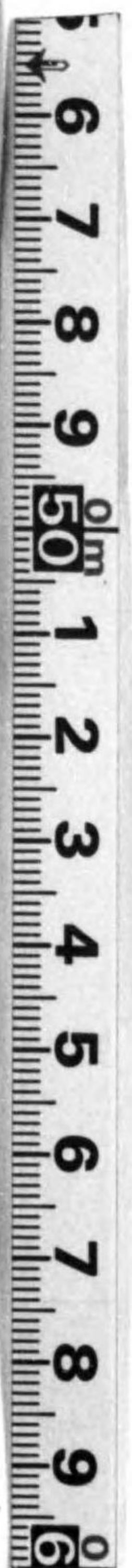


108-W44ウ



1200800289779

08
1.44
ウ



始



KI 3F-4

108

W44

①



日本思想闘争史料

史料編纂官
文學博士
鷺尾順敬編

新
城
文
庫



日本思想闘争史料 第八卷

目次

出定笑語 四卷 平田篤胤

序文 一

一 五

二 五四

三 九〇

四 一三四

出定笑語附録 三卷 平田篤胤

序文 一八三

目次

一之卷	一八四
一之卷下	三七
二之卷	二五五
跋文	二九九
追蠅拂	三卷 治鳥子	
自叙	三〇一
附言	三〇二
凡例	三〇四
目錄	三〇五
卷之天	三〇六
卷之地	三五二

卷之人 三九

神敵二宗論辯妄 二卷

本之卷 四二七

末之卷 四六三

解題

文學博士 鷺尾順敬

○出定笑語 四卷

平田篤胤

本書は平田篤胤が、佛教を排撃したる名著なり。篤胤が一生の著書に、佛教を排撃したるもの多し。而して本書は殊に名著なりとす。

本書は夙に板行せらる。而して嘉永二年八月十三日座摩宮社務從五位上近江守都下朝臣資政の序を冠する木活版本尤廣く流布したるもの、如し。今その木活版本を底本としたり。

然るに平田篤胤全集に收むるものと對照するに、行文異同あり。その意味の不明なる點は同全集によりて之を校訂す。猶、木活版本書題の下に、平田先生講說門人等筆記の文字なし。今同全集に依つて之を加ふ。

○出定笑語附錄 三卷

神敵二宗論

平田篤胤

本書は佛教諸宗の中、殊に眞宗日蓮宗を神敵二宗となして排撃したるものなり。文化十四年一月十五日、下總の人野口音春平山光長の序を冠したる木板本に依り、こゝに收む。

平田篤胤は通稱を大角と云ひ、別號を眞菅乃屋とも氣吹乃舎とも云へり。佐竹藩の士大和田清兵衛平祚胤の四男なり。安永五年八月廿四日出羽久保田の城下下谷地町の邸に生る。初め漢學を學び、後醫術を修む。二十歳の頃俄に志を立て、郷里を出で、江戸に入りて流浪困苦し、學業を勵む。寛政十年八月、備中松山城主板倉侯の藩士平田藤兵衛平篤穩の嗣となる。これより板倉侯に仕へて江戸に在り。享和元年本居宣長の著書を見て始めて古學に志し、同三年太宰春臺の書を見て憤慨し、始めて一書を著はし、呵妄書と云ふ。この後頻りに書を著はす。文政六年六月、板倉侯に暇を乞ひ、京都に上りて富小路治部卿に依りて著書を天覽に供して嘉納せらる。天保九年、秋田藩中となり、祿百石を食む。同十一年八月、白川神祇伯より神祇道の學頭を命ぜらる。十四年六月、秋田に歸り、翌七月病に罹り、閏九月十一日歿す、年六十八。著書百餘部、門人千餘人あり、弘化二年三月白川神祇伯より神靈能眞柱大人の諡號を贈らる。明治十六年二月贈正四位となる。

○追 蠅 拂 三 卷

治 鳥 子

本書は平田篤胤の出定笑語及び同附録を辨駁したるものなり。本文に蠅曰とあるは、出定笑語の文にして、追曰とあるは著者の言なり。著者治鳥子は曹洞宗の僧良月の匿名なり。

慶應三年良月の弟子僧絶學の序ある丹州龜山宗堅禪寺藏の木活版本に依りて、こゝに收む。

奥書に見ゆるが如く、木活字缺乏にて宛字等多し、今直にこれを改むることは興味を殺ぐを以て傍註を以て之を訂す。

○神敵二宗論辯妄 二 卷

本書は出定笑語附録神敵二宗論を辨駁したるものなり。著者の名なし。蓋し眞宗の僧なるべし。明治四年辛未秋日の序ある木活版本に依りて、これを收む。

出定笑語

平田篤胤

活字板出定笑語序

天地遠隔之極千萬國は雖多、今現に天地八方に照徹大座ます天照皇大御神の天日嗣の珍大御子現御神吾大王の彌爾續に知行、これの大御國と神漏岐神漏美尊の天賦たまへる高貴明清直正清清しき大倭魂千年あまり、不淨き外國の夷狄の手風俗に迷惑ひ隠れにたるを、神風の伊勢國の御民本居翁甚く慷慨歎息憤激て、いかで此隱にたる大倭魂を顯してむとするついでに、さへづるや漢の手風俗の猿に倭奸言甚くて、大御國の禍となれることは明白に分別れにたれど不須也。凶目汚穢き佛道を大神等の忘たまひ嫌ひたまふことを、少も知りて精神ある類は直惡に惡むものから、其論ひは夕月夜おぼつかなくて不足こちせられけるを、百不足出羽國の御民に篤胤翁無比重太健雄々しき大倭魂を振起して、宗とある書ども著られけるいとまのひまに、諸人の解得やすく俗語もものせられたるこの書、もと此大坂に御宇の年號を延享と申しころ、富長仲基といひし人出定後語といへるふみ書て、佛道明らか論ひたるを本居翁うちみて、諾よくも論ひ定めたり。彼道の學問に長たる法師だにえやはかくものすべきと讚歎おかれたるを、ゆかしみなつかしみて、いかで其書見てしがと江戸京都大坂の書林に求むれどもえ得ざりけるを、からくし

てもとめで、讀明らめ解明らめて、それに翁の論ひをもおほくそへてものしつるなり。抑釋迦といへる猿智惠人天竺に生いで、彼國に神隨とある古風をすて、自己が私の邪道をひろめしより、そのくには更にもいはず漢國また此大御國まで幾千年いく千萬の人を常闇如惑はしけん。ざるを如此夜の開たる如く、曇なく論ひ定めたる無比愛甚此書なん眞實に珍寶なる。かゝる寶とめでたきふみ寫本にては、志あるひとにひろくしめさんといとかたし。活字板書にしてこそと東雄主かくものしけるを、おのれおなじこゝろに權しみていひけらくは、斯書自今以後漸々に青雲の靄限、谷蟻のさわたる極、山の奥島の崎々おつる隈なく、天下四方の國に弘まりて、公民もろく佛道は眞に神の厭すも宜理なりとさとりひらきて、悔の八千度後悔憤激ていま、で千年餘迷惑汚穢にたる心の垢をいはまくもゆかしく、挂まくもかしこかれども神祖の尊の橘の小門の阿波岐原に禊、祓たまひし事のごとく拂ひ清めて、清々しき元の大倭魂に復しなんものと掌拍よろこびて猶言けらくは、翁たちの勳功もさることなれど深く遠くおもひめぐらせば、これはた天神地祇八百萬千萬神等の大御心と甚貴くかたじけなくてなん。嗚呼かしこ。斯云は大御代の號を嘉永貳年と申としの八月十あまりみかの日

座摩宮社務 從五位上近江守都下朝臣資政

出定笑語一

平田先生講説 門人等筆記

扱是は出定笑語の大意で、演説致すことは、先第一に天竺の國の水土風俗より致して、其國の始の傳説由來。また釋迦一代のあらまし。またもろくの佛教一部一冊として釋迦のまことのものでなく、残らず後人の記したるものなる慥な論辨。さて佛法が諸越へ傳り、夫より御國へつたはつたることとのあらく。また御國に有所の諸宗の始り。および其宗旨々々の立かた、さて佛法の本意又當時世にある者の佛法の心得かたなどの事を申すのでござる。但しわが師の翁は、とかく漢學びの、人心をさぐりてしたゝめ、わるさかしらに致すことをば、返すくゝさとされましたなれども、あまり佛法のことをいはれず、たゞ聊ばかり佛の道といふものは、世の女わらんべを欺くが如きことなれば、論にもたらぬものじやなど、いはれたくないこと。また「釋迦といふ大おそびとのおそごととに、おそごと添て人まどはすも」また「佛書よめばおかしきことおほみ、ひとりわらひもせられけるかな」これは實に左様のわけで有なれども、今はかよふに行れて、至らぬくまなく、世に有と

ある諸事諸道、何に不_レ依其意の混雜せぬ事もないやうで、夫をよくしらげわけねば眞面目の見えかぬることが多いによつて、其根本のわけも心得ねばどふもならず、それ故にあらましながら、其佛道の眞面目をありのまゝに申すのでござる。但しこの佛道と申すものは、いとをさなきもので有なれども、其稚_せき處が人氣に叶ふと見えて、世に信じ人も多いから、これは甚だ申にくい事てござる。なぜなれば、その信じてゐる人は、みな佛者どもの爲に、計られて、實は佛者共がよきさまにとり繕ひて、其誠の事を云ひ聞せず、鉛を銀じやとさとしおくことを知らず、其聞染_{きしみ}たるそら言を信じて、この方が佛經によつてその正實を云ひ聞すをば、佛法を謗るなど、心得、以の外に腹をたつてござる。正實のわけをいふをばそしると心得、坊主のそら言をば眞_{まこと}と信じるといふは、借々迷ひと云者はしかたのないものでござる。この佛法の眞實をいつたならば、をこる人があらふといふ事は、云ぬまへからこの方も、さし心得ておつたるゆへに、實はいふまいとさへ思つたなれども、云はんでることがわからぬと、先年も心遣ひをしつゝ、いつた所が、果して一席二席きいてそれを氣にさへたる人なども兩三人ありました。此方のいふ所は謗ると云ふものではない、眞の所をいふのじやが、夫程に心遣ひをしての演説を、そしりと聞取るは、扱々白ひ黒いの分らぬことと、腹さへ立つたてござる。これは譬ば出家の輩の云處は、澁柿を甘いと云て、人にだましくわせてをくような物だか、

其澁柿をよひ氣に成てくひなれて居たる人に、それを氣の毒じやと云て、眞の甘柿をくはしてもとんと喰ず、その澁柿にくひなれて、けつくその甘がきをば顔をしかめてくはぬやうなものでござる。わが鈴の屋の翁がよまれたる歌に、「まが神の世人の耳がふたぐらんまことかたればさく人のなき」と讀れた通り、こりや彼古道の大意にあらく申たる如く、神にも善惡邪正様々有が、其あしく邪しまなる神にまじこられ、耳をふたがれ、眞の事をさくことならぬ人々と見えるでござる。釋迦の縁なき衆生は度しがたしといつたのも、かよふの人々の事でも有ませうか。其くせ出家の方で云所は、御國の神をば佛法の下役のごとくいやしめてあるが、それをば何とも思はんでゐるでござる。抑古への神々は、天地をさへにをつくりあそばしたる程の事で、かつは恐れなごらいは、自分の先祖じやが、それをば賤められても何とも思はず、釋迦はたとへ眞に尊き者にもしろ、外國の人じやものを、それをかしくわが先祖とも身の本ともましますわが國の神に見かへて、又なきものに諂ひつかゆると云は、ちやうど我君我親をすて、他人を尊み、其他人への諂ひが有つて、かへさまに我君我親をそしられても、何とも思はず、且ともく我が君わが親をそしり、たまさか自分の親を尊めと勸むる人をさへに憎むやうなものじやが、かへすくも借々世にはさかさまな心の人もあればあるものと、覺へず肩で息をする程の事でござる。然れどもそんな邪_{よこしま}なる人は夫にしておいて、どう

考へても佛法の事も云はねばならず、いでや云ふとなつては、もはや彼のぬれぬうちこそ露をもちとへ、かように逆もぬれかゝりては、あゝ儘よ、しよ事がないとあきらめて謗は致さんが、その正實と云つて佛法のまことの所をありの儘につくろはず飾らず、竹をわつたる様に説ますから、何れもそのおこゝろえで必ず腹をたゝれぬがよい。さてまた別段に申す事がある、それは古へより支那やまとのものどもが、我おとらじと生なまごしやくをやたら云て、佛法を論辨誹謗を致したなれども、みな佛書をよく見ず聞はず見はつりて、かの胡椒丸呑とかいふ様に、只々大きな聲をしていつたぐらいの事でござる。それ故いひあてたと見へる論は、甚とんとすくないでござる。すべて論辨と云ふものは、我れが家の説を以て申しては、先承知は致さぬものでござる。是は蘇子由と云漢人の申たる語に、善與レ人言者、因ニ其人言ニ而爲ニ之言ニ、則天下之辨者服、與ニ其里人言而曰、吾父以爲レ不、然則誰肯信以爲ニ爾父之是ニ云々。掃シテ夫異端ニ而終以不レ明者、唯不レ務レ辨ニ其是非利害、而以ニ其父ニ屈ムルレ人也と申たが、誠に尤ないひかたでござる。夫故拙者の諸道を論辨いたすに、儒道は佛書で論じ、佛道は佛書で論辨いたす事でござる。これはすべて何事にも其本を知て論ずる時は、向ふへまはつたものは何とも云こと出来ず、又本をきめさへすれば、先の枝葉の事は何ごともわかりがよく、事によつては本をさへによく取極れば、末はいはずと聞ずと自らにわかる事も多いからのござる。

たとへば鼠をつらまへるに足や尻つぽをこはくにつらまへては、振返りて喰つきもする所を、胴腹か首筋の所をきゆつとつよくひしぎつけると喰つくことも出来ず、其中に目玉がとび出すよふなものでござる。夫故この方の演説は餘りこまかしきことはい、ませんから、そのこまかしきことはそれに准なぞへて知べきことでござる。

偕まづ天竺の國は誰も知ての通り、御國からは漢土を隔て、西の方に有國で、すなはち西洋人の五大州と名づけたる、其第一の亞細亞と立たる州の内でござる。さて其國がらのことは、世のおこ人もは何か結構な國の様に心得違ひをして居るけれども、實はもろこしよりもまた餘程わるい國でござる。然るを坊主どものそれをよさまにとりなして云ふは、どうしたことじやと云ふに、これはちやうど漢學者の何もかも漢土がよいと最負すると同じ事で、自分の業とする道の本尊釋迦法師が本國ゆゑ取り繕ひてのござる。又中には實に天竺はよき國じやとばかり心得ていた僧も昔からいくらかあつた事でござる。夫らが言觸たことゝもの世に弘まつて、尋常よつねの學問せぬ人などは、とんと誠のことと心得たものでござる。中に甚しきは天竺を天ちよくと覺へて、直にこの青くみゆる空の事じやと心得て、段々朝鮮から漢土へ、それから行々すれば行れもする事の様に心得て居るものも多くべらぼうにはあるでござる。今證據正しく彼國がらの事を、まづ云ふでござる。さて佛

法のわけをとくのみにて、その國がらのことはいらぬ様に思はる、衆もあるだらうが、一體國々の道といふものは、其國相應に組立たる事が多き故、その國風のわけも心得て居らぬと、わからぬ事も受ひき難いことじやと思ふ様なわけもあるものでござる。夫故あら／＼申すのでござる。さて據と致して申すものは、大唐西域記と云ふもので此書は漢土で唐の代といつた時分に、その二代目の太宗といふ王の貞觀二年といふ年皇國の舒明天皇元年の八月に、玄奘法師と云ふ僧がありて、佛法でもいはゆる大乘と云ふ高い所が傳へたしといつて、漢土より何千里の難所をこへて、天竺の國へ至つて國中悉くあるきて搜しごとをして見たり聞たりしたる國風總體の事を具に記し來て、さて同十九年正月に本國へかへりて、取て歸つた處の佛法はもとより今の國風總體を記し來りたる書をも其王太宗へ奉つたが、夫がこの大唐西域記でござる。此功によりて佛法の方では規模としてきつく重んずる處の三藏と云ふ位になつた故に、世に此僧のことを三藏法師といふでござる。なんと夫程この人が佛心信で、誠に嶮阻艱難千辛萬苦いふに云れぬ程の難義をして天竺をあるいて佛法を受け來り、そしてあくまで佛びいきと云、其佛を本國の事じやによつて、どうもよくいゝたくつてならなんだらふが、どうもさうは云はれぬ、わるい國じやによつて、ありのまゝに書たと見へるでござる。よつて彼國がらの事を見るには、是ほど慥かなるものはないによつて、其西域記に玄奘の書て置たあ

らましをかいつまんで申すのでござる。まづ天竺の異名を身毒ともまた印度ともいふ。印度と云ふは天竺の詞では月のことで、彼國の國形が北は廣く南は狭くて、ちやうど半月の形しているによりて、國の名を印度といつたものでござる。西洋の人は、インデヤ又インナイ、ン又インナヒ、ンなど云。俱に言の轉謬つたのでござる。さて右の如く月の形していると云の心を以て、漢土ではかの國をさして月氏國ともいふでござる。

西域記の一説にいはいく、印度者言諸々群也云々。故謂印度といへるは、後人のいゝ出たる説にて信ずるに足らず。本文に取れる説を正とすべし。

さて漢土などよりは、またひとかさ廣ひ所で東西南北中と五つにわけて、これを五天竺といふ。それを又細かに分つている。采覽異言に引く萬國傳信記事に云く、西はベルシャに界ひ、北は韃靼に連り、東は支那に至り、南は印度海に臨りとござる。偕其風土のことは阿蘭陀の方でくわしく考へ、よく見極めたる天文地理の説によりて見ると、天の度數でちやうど赤道線と云て、日輪の御通なさる道に近く、已にかの國近くの島々には、赤道の直下にあたる島々もある程のこと故、大の熱國でござる。夫故米穀が一年二三四度もみのる。草木も四時いつと云ことなく華が盛たり、實がなつたりする。それ故西洋人は此國を天の下の華園といふと云こと、采覽異言に見へてあり。又沈香や

丁子胡椒などのたぐひ、香氣の高きもの、出來るといふも熱國故の事のござる。人間も殊の外下品で、熱國故へ國人がみな黄黒くいはゞ土氣色でもつとわるひ色さしじやと云ふ事のござる。西域記に、天竺の一國々々の風俗を記す度に、顔色蒼黒と云ふ事が幾所ともなく云つてあるはこのことのござる。又采覽異言にも、土人色或は黄なるあり、或は黒きありと云つてある。すでにクロンボ國と云もこの國の内て則ち釋迦の生國迦毘羅衛國の西南の界にある國で、かの崑崙と云ふ州がそれのござる。天竺人の黒き中にもこの崑崙國人が別して黒いによつて、西洋人はすべて色の黒き人をコンロンボと云ふのござる。御國に於てクロンボと云ふことは、この言のうつりのござる。釋迦の生國はこの隣じやによつて、其黒きことは同じ事のござる。熱國故みな黒いのござる。又西域記にも、時特暑熱地多_ニ泉濕_一と云てあるごとく、とかく暑熱の烈しき國は濕氣も又強きもので夏物にかびの生るでも知れること、熱氣にむされて色々悪しき蟲獸も多く、わるき病ひもある。さて家の住居方なども上下のあまり隔がないが、とかくぢ、むさき事どもが多ひ。其中に變なことをするは地に牛の糞を塗り、それを清淨だとしたもので、その是をぬる心は牛の糞は日に照つけらるゝと、ふと嗅では麝香の様にほうからの事と見へるのござる。また時々の花を取てまき散す事もある。衣服は裁製をせず染もせず、白きをよしとし、横巾の儘に男は腰から巡らし腋のかたへまとひつけ、

右の肩をぬいで居る。女は衣を擔ひて下に垂れて、これは肩をも隠している。髪は中に結び餘りをば垂下し、國王や大臣などは、首には華鬘と云ふものをかぶる。又寶冠と云ふものもかぶる。則觀音などのかぶりているものがそれのござる。身に纓絡や環や孔雀の尾などをつけるもあるけれども、王家の次にたつ婆羅門など云ふ家柄の者などには、死人のしやれかうべをかざりにするものも、くあるとの事のござる。また耳たぶへ穴をあけて、環をかける達摩などのみ、の環がそれのござる。又悉く人が徒跣である。履物をはきあるく者は、とんとないと云事のござる。いかにも諸の佛どもに履をはきたるのは見たことがなきのござる。またからだには白檀や鬱金の類ひ、諸の香をぬることのござる。なぜさうすると云ふに、濕熱つよくむさるから自然と彼國人は體がくさいからのことのござる。又髪縮んであるのも、熱國ゆへおのづからちむのござる。又釋迦の生國迦毘羅衛國と云は、印度にある一つの島で、めぐりがやうく三百六十餘里御國ノ六(七本島)と云事のござる是をせいらんと云のござる。増釋采覽異言に、此島は去_ニ赤道_一北方四度と有から、別して焼るやうのござる。則釋迦の修行したる靈鷲山といふ山が有て、古跡も存してあるそうのござる。さて此國の近頃の風俗を采覽異言によりてみれば、玄奘法師が渡たる時分とは餘程風俗も移りて、男子は上身赤膊圍_レ絲布_ニ手中_一加以厭_レ腰、鬚鬚並滿身毫毛、皆剃去止_ニ留其髮_一用_ニ白布_一纏_レ首、女人者髻縮_ニ腦

後、不_レ圍_二白布_一、其新生小兒則剃_レ頭、女則腦後不_レ剃_レ云々。若欲_二人喫_レ飯_一則於_二關所_一潛食、不_レ令_二人見_一など、有_レから、大きに風俗もかわつたでござる。又面白い事のあるは、此國人が大便秘しても溺_レしても、其あとで前陰も肛門も是非あらふと云こと、西域記に有_レますが、是は今以て其風俗が遺りいて、釋迦が生たるカピラエ國は、とくに其子孫も亡び、今は彼コンロンボの國と共に、阿蘭陀にせしめられて佛法も大方亡び、切支丹宗になりてしまつた故、長崎へ來る阿蘭陀人が召仕いに、いつも彼クロンボをつれて來る。なぜならば人があろかまで至極骨を惜まず働く故じやと云ふ事でござる。扱其阿蘭陀人の連て來るクロンボめが、今以て昔の通り大小便のあとで、やはり尻や前陰を洗ひある。これにつけて面白き咄がある、先年來たクロンボめが、己れが子僧クロンボを連れてきたさうでござる。所が二三年も長崎に居るうちに、其子僧がとかく皇國人の眞似をする、そこで其親クロンボが叱つて云ふ事には、己れは其様に日本人のまねをしあるが、後には尻も濯ぎあるまひと云たと云事でござる。成ほど一言もないでござる。さて其洗ふ器は壺の様にこしらへてさげてあるく、これを彼の黒ンボの國へ歸る時に捨て行くに、めうな何か形ちの變な物故に、好事な輩の拾つて庭へでも置たり。彼是年を経るうちに、江戸の茶人などの手に渡り、江戸の人はこんな物とは露もしらず、其形にほれて自慢と貯へ、床へ直して花生にして、有_レたを見たと、森羅萬像の紅毛雜話に書て置

たが、いかさまこれはいやな事でござる。偕また天竺人は煩_レひついても國の風で、七日が間と云ふものは粒_レを絶ちいて、其内になほればよし、なほらぬとそこで藥を飲せる。また死人の葬かたは三つのわけがある、第一を火葬、これは皇國にも持統天皇の御代に道昭といふ僧が彼國の法をまねて仕始めた事で、今も爲る通り。又一つは水葬といふて流川へうつちやる。次を野葬といつて、野へ棄て獸に飼せてしまふでござる。またきつく年がよつて煩_レひ付、連も今度はよくなるまいと當人も思ひ、人も思ふ様になると、親故や知友のより集り、樂を奏し饒をして、其上で舟へかせて海川へ流し出すと、中流にして其人がみづから溺れ死んでしまふでござる。かうすれば天へ生ずると心得ているといふことでござる。さてこれで玄奘法師の西域記に記しある風俗のあらましでござる。たゞし右申すやうな風俗どもは、すべて下國の風俗で夫はしかたはないが、中にけしからぬことは觀經と云ふ佛經によつて考へたる所に、釋迦の時分迄に王にして其父を害するもの一萬八千人、また子として父を殺すもの一萬人ともしるし有。是によつて天竺の國がらをやるがよいでござる。尤かやう亂りがはしかるべきわけは、何事も始りが大切なものであるに、彼國に人の出來たる始が亂りて有つたからのござる。それはまづ彼國の人物に四つの差別がある。是をまづ心得にやなりませんが、夫はちやうどこちらの詞にたとへば土農工商と云やうなわけでござる。まづ第一を刹帝利

といふ、これは代々王となるべき家柄で、則月氏七千餘國の國々の王となつてゐるでござる。第二を婆羅門といふ、是は翻譯していへば淨き行と云ことで、則淨行とかく詞で國柄相應に有り來つた學問もして、段々家を傳へるものでござる。第三を毘舍びしゃと云ふ、これは商人でござる。第四を首陀と云、是は農業のことをする者でござる。云はゞ百姓でござる。刹帝利、婆羅門、毘舍、首陀、これを天竺の四姓といふ。まづ此四つをよく心得あるべき事でござる。

偕この刹帝利といつて、王と成べき家柄の起つた所以は、長阿含經どもの内に彼國の古傳が悉く記しあります。夫によつて其あらましをいはゞ、世の初天地の成なよふとするとき、大水彌滿みまんたる所が、風が吹てそれを結構けいこうで、さて此世界が出来ると、化生といつて、人が蟲のわくやうにした、か生じて、其砌は身に光が有て飛行自在で、男女の形もそなはず。また尊卑親疎の差別もなく、又其食物は歡喜爲くわんぎ食じきとありて、うれしひ悦ばしいと云事を、食としてあつたといふこととござる。是が變なことじや。とかく佛經にはこんなおかしひ事が有ますが。どふして歡よろこびを食つたものか。彼獾くわんといふ獸が夢を食ふと同じこととござる。偕かくの如く元一所にうじや〜と蟲のわくやうに、衆共に生じたるもの故、衆生といふとあります。此がそも〜衆人をひろく衆生と云ふ佛語の出處でござる。さて右の如く此衆生どもが、おまんまにもおかずにも歡よろこびをたべあつたるに、自然と地

より蜜のやうな物が湧き出て是を地味といふ。そこでかの衆生どもが以手試嘗とあるから、氣味わるながらに、ちよいと指をつけてなめて見たことと見へますが、やつてみると味甘く今まで歡よろこびを食ていたとは、きつい相違な事とどふもうまくてたまらん故、こゝでかの衆生どもが元來蛆むしのやうにわきたる者ども故、うぢの様によりたかり頬ほつ、こんでなめるもあり、手でしゃくりなめたるもあり、因有アリ勝負アハ便相アハ是非アハと有から大きに争ひが出来て、いやおれが一口嘗る中に、おぬしは二しやくり嘗やつたなど、犬の群衆してゐる處へ、汁の餘りでも捨たやうに、嚼か合あひなども致した事と見へるでござる。さてこゝに悲しき事は、右の物をしゃぶつてこのかた、各々身の光りもなくなり飛行自在も止み、そのうへ意地きたなく多くしゃぶつたやつ程、顔色蠱悴あらくたと云ふ事とござる。彼是する中に、かの蜜のやうな物が皆な消てなくなつてしまつた。此に於て皆懊惱咄哉とあるから、大きに力を落して泣わめいた事と見へるでござる。これは尤もなることとござる。此後にまた地皮といふものまた地膚といふものも生じ、それをも右の如く争ふて取食たといふこともありすが、其事はまづをきて其二種の物がまた滅つてしまつと、後に自然と粳米じやうまいが生じたと云ことでござる。そこで衆生が大きに悦で是を食したる所が、この時始て男女の形をなして、陰莖陰門が出来たと云ふこととござる。そこで互相瞻視しんし遂生すいせい慾想よくそう、共在こぞ屏處びんじよ爲な不淨行ふじやうぎやうとあるから、衆生各々互に前を出

し見せもし見も致し、ふしぎやそこもの御またぐらへ、あやしき一物が突出致してござるといへば、こちらも又さきの股ぐらをのぞきみて、しか仰せらるゝ其許の股ぐらへは奇しき一つの洞ほらが出来てござる。いかに拙者がこの突出致したる一物をその股なる洞穴へさしふさぎ試みたくこそ候へ、いかにもなど云て在ア屏所マ爲ス不淨行トとある通り皆が見へぬ所へ行てかの上總の方言にいはゆるそゝこめぐしたることゝみへるでござる。此が天竺に於て男女交合の始めでござる。さてかように有つゝ其衆生どもが此淫佚のことにのみ心をよせて夫婦となり、其行ひの時に人に見らるまじき爲にとて、始て屋舎を立たといふ事でござる。則本書に因チ此因縁ニ世中立レ家トとあるのでござる。又これより始て懐胎して、子の生れる事がはじまつたといふことでござる。扱かの自然に生じたる處の粳米は、始のほどは朝あしたに刈れば暮に熟し、暮に刈れば朝に熟すると云やうに有たる處が、中に大きに慾づらのひつばつたる衆生が有て、四五日程の糧かてを一時に刈取たる所が、とんと其米が生なくなりてしまつたでござる。そこでどうもならんから各々土地を分つて疆さかひを立て、田を作ると云ことが始つたでござる。處を不届な奴が有て、己が米をば藏めて、他の田穀を盗みなどするけれども、彼蟲のわくやうにもろゝ一所に生じたる衆生のこと故、みな同輩で誰有て是を決斷する者がないから、各々評議して中に一人すぐれて形の大きく威徳のある者があつたる故、夫を主かみに請たのみて善をなす

者を賞し、惡をなす者を罰しさせたる處が、先づこれで亂りがはしきこともうすらいだといふことでござる。これを刹帝利といふ。刹帝利といふは民主といふの心で、これが天竺に於て會長の始で、彼天竺四姓の第一たる刹帝利家の元祖で、是から段々に子孫がふへて、さて天竺の國々の會長共は皆此末じやと云事でござる。釋迦法師もすなはち此刹帝利の子孫でカピラエ國の淨飯王といふが子でござる。さて釋迦の姓に五つのわけがある、一つには瞿曇氏と云、二つには甘蔗氏と云、三つには日種氏と云、四つに舍夷氏といふ、五つには釋迦氏といふ。悉くこれにはわけがあるけれども、餘りくだくしいによつて是はあきませうが、其中甘蔗氏と云わけは、かの刹帝利の子孫からすまじく年代を累ね、いつち後の王を大茅草といったでござる。夫が老衰して子もなかつたゆへ國の事をば大臣とも云べき者に任せて、自ら剃髮して出家をなしたけれども、極老の事故歩行もならず、そこで弟子の輩が時々出ては乞食をしてこれにくはして置く。其乞食に出るときに虎狼の害を恐れ、かの王仙をば草籠へ入れて樹の枝へひつかけては出たと云事でござる。所にかの白い物をきてゐる國だから獵師がありて、遠くからは是を見て白鳥がゐると思つて、これを射殺したと云事でござる。そこで其血が地に灌しみつて、そこから後に甘蔗が二本生たと云ふことでござる。そこで其甘蔗がだん／＼日に照されて、われて一本の中よりは男の子が生れ、一本よりは女の子が生れたと云ふ事で

ござる。そこで彼國に居る臣下どもの聞傳へて。その男と女の子を迎へ取りて、こりや王の胤だといつて養育して成長の上で遂に立て王にしたでござる。これ故に甘蔗氏ともいふと。また釋迦氏といふわけは、此の甘蔗から生れたといふ王に五人の子がありて、其内一人は本妻のうんだ子でこれは不器量もので有つた。残り四人は妾腹の子で何れも器量者なる所が、本妻がそれを嫉ましく思つて、右妾腹の四人を讒言して雪山と云ふ山の邊へ擯出したる所が、四人の子供は器量ものであつたる故に、遠くの人まで歸服して數年の間に家居を立つて一ヶ國となしたでござる。そこで父の王が大きに歎息してわが子どもに釋迦じやといつたと云事でござる。釋迦氏といふは是からのこととござる。さて釋迦と云天竺詞を翻譯すれば、能仁と云ふ言となつて、能仁といふは仁を能すると書たる文字じや。いはゞ我子どもは仁者じやといつたのでござる。偕この甘蔗氏が五人の子どもの第五人目を尼拘羅と云ふ。尼拘羅が子を俱盧と云ふ。俱盧の子を瞿俱盧と云ふ。瞿俱盧の子を師子頰といふ。師子頰に子が四人ありて、第一の子を首圖駄耶といふ、是を翻譯すれば淨飯といふ事になる。淨飯とは淨き飯といふ事、こゝろ名をつけたにもわけがあるけれども、これはまづよませう。さてこの淨飯が善覺長者といふ者の娘摩耶と云ふ夫人を娶て、生んだる子を悉陀といふ。是が彼の初て佛道と云ふことを考へ出して世に弘めた釋迦と云ふはこの悉陀がこととござる。さてまた釋迦

と云ふは、本とうの名ではない。元來は姓で、先にも申す如く能仁といふことで、能仁と云ふは仁者と云程の事とござる。夫のみならず、悉多は衆生の爲じやとか云て、苦んで佛法を弘めたによつて、其徳を賞て釋迦と云たと云こととござる。何れにも釋迦と云は實の名ではなく、姓なりあだ名なりとござる。

扱この者生るゝ時に母の右の脇から生れ出、うまると直にみづから七足あるいて、右手を擧げ天を指し左手を下げ地をさし師子吼をなしたと云こととござる。この師子吼と云は何のこともなく産聲の事と見へるでござる。然るをまた此師子吼に文句をつけて、我於一切天人之中、最尊最勝。無量生死於今盡矣。此生利益一切天人と吼たともあり。又一説には天上下唯我獨尊と吼たともあるでござる。この生ると直にあるいたり手を指上たり何かして吼た事は、何の經にもいつてあるが、實にこんなことあつたかもしれせん。なぜと云に此奴邪しまなる道を始め、夫をかく世に説き弘めたる程の變な奴故、その生れる時もこの位の變はありそうなものでござる。又眞蟲を見るやうに脇から生れたと云ふ事も、是は心狭き儒者などはわけをも正さず、めつたにやかましく云て凝ませうが、古學の廣ひ心から見れば是も有まいことでもなひが、やつぱり偽でござる。なぜかやうに偽つたものじやといふに、釋迦ほどの佛が凡人と同じやうに陰門といふ不淨な所から生れたと云へば、

尊く思はれぬから脇腹から生れたと、事を神妙にせんが爲に偽つたこととござる。すでに經文にも、摩耶が腹にやどらんとするまへに、陰門は不淨な處じやによつて、脇から生れやうと觀じて託胎したと云てあるでござる。右申す通り變物の生れたること故、かやうな變のあるまひでもなければ、右のわけもあり、この外にも諸々の佛經に尻口の合ぬ嘘ばかりついてあるによつて、誠のことをも實とは思はれぬでござる。是はちやうど今の俗でも、とかく何によらず間にあいの嘘ちよ／＼を云てあるく人が、たま／＼實の事を云ても又嘘かと思はれて信用のならぬやうなものでござる。是に付ても偽はいはぬ様に致したいものでござる。不斷嘘をつく人と云ふものは、何を云ても人は誠にせず、何かいゝ出すとまた鐵炮か萬八かと云て取上ぬから、後々は自分からして嘘つきの心持になつていと見へて、何ぞ一言いひ出すにも此ばかりは實のことじやと、まづ前口上を云て云ふやうになるものでござる。又其うぶ聲に、天上天下唯我獨尊といつたの、或は我於一切天人之中、最尊最勝云々いつたなどと云ふも、みな釋迦が成道出山の道を弘むるときに妄言したる説の尻を結ばんが爲に後の出家どもの偽り云つた事とござる。是は追々聞るゝうちに、其化の皮のあらはれてわかることとござる。偕此生れたる日は因果經には四月八日じやとありますが、佛所行讚經といふには二月八日と云ふこととござる。時に白淨王及諸釋子未識三寶、即將太子往詣天寺とある

は、則梵天の祠に參詣したる事で、所謂宮參りと見ゆるでござる。これは釋迦が云出さぬまへは、佛といふものはなきもの故、誰も知たる者なく、その第一と祭る處は、古傳のまゝに梵天を大切にしたるが故とござる。

この續の文に此時その梵天の像が座より立て釋迦小僧の足を禮して淨飯王に云ふには、この太子は天人中の尊で、虚空大神も皆悉く敬禮す。如何ぞ今こゝに來て我を拜さするぞといつたところが、例の偽とござる。

扱その呼名をば諸の婆羅門どもに相談して薩婆悉達と名づけたでござる。

これは漢語に譯して吉祥と云ふ事になるでござる。

さて此悉達が人相を阿私陀仙人といふが見て、此子乞食の相あり、出家して大名を發すべしといつたといふ事とござる。そこで淨飯が大きに愁て出家させまじき爲に、くさ／＼其用意をして中にも多の妓女の形容端正不肥不瘦、不長不短、不白不黒、才能巧妙各々藝技を兼たるを撰で、身には名寶のようらくをかざり、替る／＼にもりせさせ、悉達が心目を悦ばせんと、はかつたと云事とござる。扱彼摩耶は悉多を生で七日目に死だでござる。脇から生れたと云は偽りなれども、いづれにも以の外の難産で有たる故死だのでござる。これを又大善權經など云ものには、生後七日其母便薨。福應并

天非^ニ菩薩^ノ答^ニ前處^ニ都率^ニ觀^ニ摩耶^ノ大命^ヲ、將^ル終^ラ有^ニ十月七日之期^ニ。故神變^ニ來^ル下^ニ。是菩薩^ノ權方便^{ナリ}などいつてあるが、すべて釋迦が妄言の尻を結ばうとして作つた説でござる。すべてこの大善權經といふものは、かよふの尻をむすぶ事ばかりを多くいつたものでござる。かくて淨飯王が後妻を入れてこれが名を摩訶波闍婆提といふ。是にも子が出来て難陀と云でござる。

さて悉多が七歳の時婆羅門を師として手を習はず時、其師が梵字四十九字の手本を書き其音を教たる處が、悉多が問には、此國土の中に書が幾種あるぞ。またこの阿字に何等の義があるぞと問ふ。そこで其師も答が出来ぬときに悉多がいふには、すべて此國土の中に梵書あり、また佉樓書といふがあり、蓮華書と云があり、すべて六十四種あり、また阿字はこれ梵音聲にして、字義に無上正眞道の義があると云て、こまかに其事を諭し聞したので、師匠の婆羅門もへこみ果たとある。又諸の藝典籍議論、天文地理、算數射御悉く自然に知ていたとあるが、是も僞でこのしりつぼが今にはげる。それは此つゞきの事實を見ると悉多がつき従ふ者どもと、國界へ出て閻浮樹といふ木の下に立て耕人を看居たるときに、蟲が一つ死いてそれを鳥の啄きいる處を見て、悉多が慈悲の心を起し、衆生可憐互相吞食する事と思惟して、是の欲界こゝで菩提心をきざしかけたとある。此後また野外へ出たる所に、一人の老人が頭白く背偃りやせさらぼつて杖にすがり歩み行を見て、側の者にあれは何

じやと問ふから、從者があれは老人といふものでござると答へた所が、老と云ふはどうしたわけじやといふ、從者が云ふに、老といふは年つもりて色衰へ飯食も減じ氣力も薄くなり、餘命いくばくもなきものを老人といひますると云ふたれば、夫れはかれ一人のみさうか、また一切の人皆さうかと問ふ、一切の人みな悉くあのやうになりまするといふと、悉多が大きになげきてこゝにまた思ふには、年移り老の至ること電^ニの如く、吾雖^ニ富貴^ニ豈獨免^レ耶^ニ、いかゞして世の人が是を怖れぬ事であらふと云て、ますく世を厭ふ志が起て愁ひつゝ歸つたといふ事でござる。これが十七歳のときでござる。此後また途に於て甚だ弱りはてた病人を見て、此時もかれは何ぞと從者に問ふた所が、あれは病人でござると云、其病といふはどうしたことじやと問へば、病と云ものはかやうくのわけて起ると云事を云聞いた所が、それはあの者ばかりか、または人皆さうかといふ。一切の人誰ともこれは通れがたいこととござると答へたれば、悉多が又ふさぎ出し、かゝる怖ろしきことのあるに、なぜ世人はこれを恐れぬことであらふと怖ろしく思つて、身心戰動如^ニ月影現^ニ波浪水^ニとあるから、地震の子か菟蕪の幽靈とやらいふ如く、ぶるくふるい出したと見へる事でござる。これらの説どもは釋迦の菩提心に發したる所以を、有のまゝに記したので、これは實にかよふの事どもから世を捨る志が起りたであらうでござる。是につけて念へば、右申したる七歳のとき書を學んで色々

とこましくくれた事をいつたり、また諸々藝典籍、天文地理算數射御を始め何によらず自然に知っていると有るのは、みな跡からいつたうそなることの、ばけの皮が知れるでござる。なぜと云ふに六つ七つでそれほどのことを精密に辨へ知っていたほどの者が、十六七歳になつて人には病と云事があり、また老ると云事もあるわけを知らぬと云ふ事がどふして有ませうぞ、能く考へて見るがよいでござる。また右等の蟲や老人また病人などは、悉多が野外に出たる時、ゆくりなく見て、右の如く無常を觀じたこと、見ゆる。それを又つくり言をして其蟲も老人も病人も悉多に菩提心も發させんが爲に、淨居天といふ天神が、そんな者に化て見せたのじやと有ますが、これは殊に尻の結ばらぬうそでござる。なぜと云ふに釋迦は元都率天に居て成佛していた所を、此天づくへ生れて來たのは假に摩耶夫人が腹をかりて生れたと云ふではないか。そんなら出家することは兼て覺悟している故、淨居天が色々工夫をつけて菩提心を勧めずともよいこととござる。殊には天から下り摩耶の胎に宿る時、諸の天神に、かねてそのことをいつて聞しあると云じやないか。是らは何のこともなく釋迦が元來凡人である所を、こんな事から思ひつひて出家したと有のまゝに傳へては面白みがなく、尊とくもないやうじやによつて、ケ様にしり口のおはぬ嘘をいつたものでござる。すべて經文どもは此次の會に委くいひませうが、盡く釋迦が死で、はるか後の世に、うそはつき次第と記したるもの故、實の事は

ないが、其中に實に有たること實がまゝ、交りある。それはよく前後の考へわたして味はへると動かぬものでござる。其動かぬ實事を撰び取て、それを規矩として、よくさぐり考へると、彼僞どもがよくしれるでござる。すべて佛經を讀む法は一つ二つ、その實事を以て僞説を考へしり、また其僞説を以て實事を知るといふ法を、心に立てよむが宜しひでござる。さうないと惑はさるゝこととござる。叔悉多は己が居所に歸つても、右らのことのみが心に懸りおふくとして愁悶へていたる所に、父の淨飯が其從者どもに、上件の事どもを尋聞て、悉多の遁世心の萌有事を察し、彼阿私陀仙人の前に相を見いつたる言もあり、方々その出家せん事を恐れて、悉多は此ときもはや十七歳にも成つたること故、妻を持たし、その心を止させんと構へ、都合三人を呼びさづけ、また、選下諸妓女、聰明智慧、顔容端正善於歌舞、能惑人者、種々莊飾光麗悅目ともあるでござる。さて悉多が妻三人のうち、第一を瞿夷と云て、水光長者と云者の女、第二には耶輸と申し、移施長者と云ふ者の女でござる、第三には鹿野と申、釋長者といふ者の女でござる。また子も三人あつたでござる。第一を善星といふ、是は鹿野といふ女の生んだ子でござる。第二を優婆摩耶といふ、瞿夷と云ふが生んだ子でござる。第三を羅睺羅と云、これは耶輸と云ふが生んだ子でござる。かの五百羅漢のその一人でござる。なんと妻を三人持ち子も三人生ぜりや、隨分澤山の事で、子福者と云てもよき程の事でござる。但し是は佛本

行經、五夢經、十二遊經など云類ひのたしかなる佛經に記し有て争れぬ事のござる。抑釋迦に妻子のある所以は右申す通り、天竺の四姓の中に第一たる刹帝利は王胤と云て、國を守り民を治むる者。其次にたつ婆羅門は法種といつて、民を導き教ふる者で、漢土の國ではふならば、儒者のやうな者のござる。夫故この婆羅門と云ふ者は、妻子のあるもののござる。釋迦は刹帝利の家に生れは致したなれども、自分の物ずきで王とはならず、廿五の時、家を出て婆羅門と同じやうに人を導き教へ、釋迦以前にはとんとなかつた新趣向を立て、妻を持つといふ事を始めたもののござる。

かやうの法を立たにもわけがあるが、それはおつ付申すのござる。

此わけ故に、その出家せぬ前は妻をもち、妻を持たに依てまぐはいを致し、まぐはいを致たによつて子も生せたといふもののござる。夫を後世の佛者どもが、わるいさを致すひがみ心に、釋迦に妻子が、しかもかやうに澤山有たといふことがいやでならぬから、後々偽り作た佛經に、いかふ負惜みな事を云たもののござる。

一體諸の佛經を、みな釋迦の説た事を記したもののじやと思つて、世人はあるけれども、盡く後の出家どもの、釋迦に託して偽り作つたものにちがひなく、其わけは具にこの次の處に申つてもりてござる。

さて其後世にいつはり作た佛經の負惜みと云は、譬ば瞿夷と云女のことを、耶輸が別名じやといつたり、是は一人でも妻子少くしようと思つて、負おしみ、又は善星と云子をば釋迦の子ではない、堂弟の難陀が子じやなど、云て有けれども、皆せつなく作た説どもで、眞の事では有や致さん。殊に善星などいふ子は、涅槃經の文によつて考へた所が、釋迦の菩薩のときの子じやと有から、さすが廿五で出家して山に入り、三十のとき已に佛に成たと云て、山を出てから後に鹿野と云ふ女を犯し生せた子にちがひないのござる。さすが菩薩も油断はならぬ。所が是をい、くろめようとして、まづ大善權經といふにいつて在には、何故菩薩而有室娶、菩薩無欲所以示現妻息、防人懷疑菩薩非男斯黃門。耳故納瞿夷釋氏之女。生羅雲云、於天變沒化生、不由父母合會而育と有ます、此經文の意はまづかりに何が故ぞ菩薩にして妻を娶たものじやと云ふ問ひの辭を設て、さて夫に答へて菩薩は無欲といつて房事の念などはなければ、其妻子を持って示現せたる所以は、もしや人が菩薩はありや男では有まいなど、いひ、又は黃門と云て、陰莖なしのことじやとおもはれうかと、其うたがいをさけよふが爲に、瞿夷と云女、又釋氏の女などを納れて妻となし、羅雲を生したもののじやが、夫も天より變沒といつて胎を投じさせ産したもので、父母の交會によりて出来たものではないといふの意でござる。然れども交會して出きたでなけりや、釋迦は黃門と云て、陰莖なしではなかつたといふ

の證據には成ぬ事じやが、こりやけしからん尻口の合ぬ負おしみてござる。又或は耶輸が腹をちよいと指さしたれば妊んで、六年が間生ずにいて、釋迦の成道出山して後に、羅睺羅が生たなどいふ事も有けれども、然ば羅睺羅一人は夫にもしてやらふけれども、外にまだ優婆塞耶といふ子と、善星と子と二人あるが、この二人の子どもをば、何ともいゝくろめようがないでござる。こりやみな俗にいふ頭隠して尻かくさずとか云類ひのうそで、とんと釋迦の知ぬ事では有けれども、餘りといへば智恵のない嘘のつきやうでござる。なぜ又ケ様にせつない嘘をつくといふに、一たい釋迦は人を導くの方に、我は久劫といふて幾百萬歳と云限もなく久しき前から、成佛して都率天といふ天上に居たるが、世に出て佛法を弘てもよき時節じやと見極めて、淨飯王が妻摩耶夫人の腹に宿つて世に出たものじやといつて、人をおどしをいた所が、其後其流れをくむ佛者どもの心に、もし人に釋迦は、さほどに久しい先から成佛していたといふならば、妻子はありそもないものじや。佛に妻子が有てはすまぬと難じられたときにこまるわけ故、釋迦の方便にいつたことの、其尻を結ばうとかゝる類ひの、せつないうそをついたものでござる。實にこゝへ出して申にも申されぬをかしひ事ばかり有ますが、其うち一つをいはうならば、觀佛三昧經といふ經文に有趣は、釋迦は妻を娶つたなれども交會をせなんだ處が、耶輸陀羅を始めもろくの侍女どもが、いかふあやしんで居たる時に、其侍

ひ女の中に一人がいふには、奉事して歴年不見其根、況有世事といふ。

たゞしこゝに根といつたれば則陰莖のこと、世事といふはやがて交合のこととござる。何のこともなく釋迦につかへて年をへたけれども、其陰莖を見たことがないから、まして交合はせぬはづじやといつたのでござる。

時にまた一人の女がいふには、我事太子經三十八年未見太子有便利患況復諸餘といふ。此意は我は太子につかへて十八年をへたけれども、是まで太子の大小便をした所を見たことがないから、さすれば陰莖もないと見ゆる、どうして交合がならふぞといふ。その時もろくの女どもがみなくしからば太子は男ではあるまいと思ふたと。そこで釋迦はこれを察して晝寢をして、かの一物を出してみせたでござる。其見せたる趣をば、經文のまゝによみますから、とつくりと御さゝがよろしでござる。爾時太子於其根處出白蓮花。其色紅白上下二三華相連。諸女見已復相謂言、如此神人有蓮花相。此人云何心有染著。作此語已、噎不能言。是時蓮中忽有身根如童子形。諸女見已更相謂言、太子今者現奇特事、忽有身根、如丈夫形。諸女見已、更不勝喜、悅現此相。時羅睺羅母見彼身根華々相次如天劫貝。一一花上乃有無數大身菩薩、手執白花、圍繞身根。現已還沒。爾時復有諸姪女等、皆言、瞿曇は無根人。佛聞此語、如馬王相、漸々出現。初出之時猶如八歲童子身根、漸々長

大如、少年形諸女見已皆悉歡喜。時漸長大如蓮花幢。一一層間有二百億蓮花。一一蓮華有二百億寶色。一一色中有二百億化佛。一一化佛有二百億菩薩無量大眾。以爲侍者。時諸化佛異口同音毀諸女人惡欲。而説偈言。

若有諸男子 年皆十五六 盛壯多力勢

數滿恒河沙 持以供給女 不滿須臾意

時諸女人聞此語已、心懷慚愧懊惱、躡地舉手拍頭、而嗚呼惡慾各厭女身、皆發菩提心、とあり
ますが、なんとこれは大變なことではありませんか。こりやみな右申す通りのちの法師どもが、まけ
おしみでつくつたる馬鹿説でござる。かやうの馬鹿説をつくつて、釋迦をかばふつもりではあらふ
けれども、これこそまことに最負のひきだふといふものでござる。なぜといふにそうそう世の人
じやといつて、文盲なものばかりあるものでもないから、坊主のやうに、だぶだぶだぶだぶとばかり
は讀であらず、たまさかにはいま篤胤がよんだやうに、しやんとよむ人もあるから、さうよまれては
たまらず、右申す通りもろくの佛經ごとごとく釋迦に託して、のちの佛者のいつはり作つたもので
はあるけれども、世の儒者など大かたのひとは、みな實に釋迦のくちから出て阿難が書ておいたも
のじやとかたく覺へてゐるによつて、目指ては釋迦を謗る。世に佛道をそしる者が皆やうてゐる。

此方のやうに佛經はみな後の佛者の偽り説で、釋迦の言ぬ説どもが、十にして九分ほどじやと云説を
心得て、其論辨せねばならぬことが有て論辨するとも、かよふにわけを立て云人は、佛法をそしる
人が、たとへば百人有ませうが、其中によくこゝらのわけを知ていふ人は、やうく一人有かなし
で、外の九十九人はみな釋迦をめざして謗るから、なんと後世の佛者どものしはさは、釋迦をひいき
のひき倒してはあるまいか。釋迦の妻を三人、子を三人持れた事は、どういゝくろめたればとて、活
た眼で書をよむ人には、是非其尻つぼを見出される。其しりつぼと云は五夢經、十二遊經、佛本行
經などにたしかなこと、又其餘にも維摩經の註に鳩摩羅什なんといふ、しかも是はもと天竺の僧じや
が、其言つたことに淨飯王が釋迦に出家をさせまいとて、更に伎樂を増してよろこばした所が、其
時菩薩欲心内に發し羅睺羅胎に所し、耶輸其夜に身めりといふこともあるから、さすれば釋迦は其
うたまい酒の遊びに心うかれて、淫欲のこゝろがおこり、そこで耶輸をしかかしてはらましたに
はそふいことござる。

倍悉多は父の淨飯がはからいで、妻をむかへ子さへにうみも致したなれども、此後又々野邊に出た
る所が、死人をこしにのせて香花をそなへ、其眷屬の者と見へて哭つゝ是を送つて行く。是をみて
從者優陀夷と云ものに、あれは何じやと問ふ。そこで死人じやと答へたる處が、しぬといふはどう

した事じやといふから、優陀夷が云には、死と云は魂しひ去り身動かず、寒熱をも知る事なくなる事じやと答へたでござる。悉多がこれをきいて大に恐れて、それは彼死人ばかりしぬ事か、又外の人もさうかと云から、優陀夷が一切の人みなかくの如く貴賤ともに免るゝことあたはずと云ふと、悉多が、かゝる苦しきことの有に、世の人それを恐るゝ心のないというは、木石に等しきことじやと云て、早々に歸つたと云事でござる。但し前後の事實を考へわたすに、此時は悉多が二十三歳の時と見へますが、夫まで死といふ事をしらんであるといふは、餘りといへば愚な事でござる。すべて右等のことどもは、悉多が出家したる先の因をいひ傳へたこと故、只大らかに蟲の死だのや、老人病人死人等を見て菩提心を發したといふことに、さつと見てをくがよいでござる。又悉多は王の太子と有ながら、此出たる度々に、かゝる不淨の者などをみる處を以ても、漢土の王などの如く立派な事ではなく、今御國で云はうならば、村々の大庄屋を見た様なものなることをするがよいでござる。さやうな趣に相違なき故、佛經をみるに同輩に見へる王のいくらとなくあつて、既に五百の王が一度に攻來つたなどやうの事さへあるでござる。かくの如くなる所を佛經を漢土で翻譯する徒が、そのしどけなきことどもがいやさに、文を飾り譯し、盡く漢土さまに書取て、庄屋殿をば王とかき、そのかゝあどのをば后と書き、又其子をば太子とかき、其云た言も吾といふをば、朕と云様に何もかも漢風に、

國から住居の様子までをも、もろこしぶりに仰山らしく書て、人に信を起させんとしたものでござる。佛書を見るにこの事をもよく心得てよまぬと、其文章に謀られて支那などの様に大そうらしい事かと思ふでござる。中々あんなに結構なことではない。近く云へば蝦夷にも村々がしたゝかありて、其村々の會長をおとなと云。これは何百人と云ふ程多くある。これと同じさまでござる。蝦夷の事をかくにもおとながことをば王とかき、めのこが事を后とかき、其子を太子などゝ書くと、殊の外に仰山に見へるでござる。漢土は實に仰山に立派なこととござる。是にわけがある。それは漢學者のとき申すでござる。

斯て悉多はいよゝゝ出家遁世すべき心に決定して、父淨飯王が前に出て云には、恩愛集會必有別離。唯願聽我出家學道。不_レ留難_一といつたる所が、淨飯王大に驚き泣て物も得云ず、良久して云には、汝よろしく其意を息めよ、いかにぞなれば、年もなほ若く國には未だ世嗣もなし、然るに我をすてゝ出家しようと云は宜からぬ事じやと、涙ながらに諫る時に、悉多がいふには、然らば我に四願がある。一つには不老、二つには無病、三つには不死、四つには不別、父もし此四願をあたへ給はゞ出家は致すまひと云。是が實にいはゆる難題で、これで父をやりこめたものでござる。淨飯王これをきゝなほ悲み彼是と諫る所が、とんと聞入れず、悉多はまづ吾いる所へ引取りはしたなれども、出

家せんと心は決定して、或夜人の寝しづまるを伺ひ、車匿と云者一人をつれ、蹠歩と云馬に乗り忍び出たてござる。其出るときに、我若不_レ斷_ニ生老病死憂悲苦惱_ヲ終不_レ還_ニ宮_ニ。不_レ盡_ニ恩愛之情_ニ終不_レ還見_ニ耶輸陀羅_トと云て出たといふことござる。かくて跋伽仙人といふ婆羅門の修行して居る山へ行て、馬より下り身に着たる衣服かざりの品々を脱て彼車匿に渡し、夫まで送たる事を賞め歸さんと致す處が、この者いふには、君をこゝにおひて我のみ歸りたならば、定て父王の答に逢ひ候はん程に、こゝにおき給へといふ所が、悉多が云には、汝還て父の王に白すべきは、吾今不_レ爲_ニ生天樂_ニ故_ト復非_レ不_レ孝_ニ順父母_ニ。但以_レ畏_ニ彼生老病死_ニ爲_ニ除斷_ニ故來_ニ至此_ニ耳_トといへ、又父王わが出家したる事を早いといはれたならば、生老病死至るとき豈定有_レ時_ト。人雖_ニ少壯_ニ焉得_レ免_レ此_トとわがいつたといへと、逐一に其答のしやうまで教へて歸さんとする所が、車匿はなほ戀々として還りかねて居るときに、悉多は聲をあげまして會者常離の理_トで有故に、我れ生れて七日にして母の命終たるをみよ、母子すら尙死生の別がある、況餘人をや。汝速に馬と共に歸るべしと嚴くいつて、自ら鬚髮をそり、折節そこへ來る獵師のきておつたる袈_ト裘_トをわが今まできておつたる服ときかへて、車匿が泣たふれて居をもかまはず、袖をはらつて山奥へ入つたてござる。此時は二十五歳のときゆへ、是を二十五出家と申てござる。此出家の年も諸の經にちがひが有て、或は十九出家ともあり、又は七歳出家

とも有ますが、是はみな釋迦の妄説の尻を結ばんとする種にせんとて、後世の法師どもの奸曲にいひ出した事で、實は二十五歳が出家の年になひてござる。そこで車匿も詮方なく、涙ながらに馬を牽て還つたてござる。偕悉多は山奥に入て、彼跋伽仙人が修行して居る所へ行て見ると、諸の鳥獸が住馴て飛び走らず。偕彼仙人共の修行を察る處が、或有_レ以_レ草爲_レ衣者_ト、或以_レ樹皮木葉_ニ而爲_レ服者_ト、或有_レ唯食_ニ草木花果_ニ者_ト、或一日に一食、或二日に一食、或三日に一食、かくの如く自餓の法を行ふ者あり。又或水火を事ひ、或日月に奉へ、或翹_ニ一脚_ニ、或臥_ニ塵土_ニ、或有_レ臥_ニ荆之上_ニ者_ト、或有_レ臥_ニ水火之側_ニ者_ト、こゝに悉多がその跋伽仙人に、そこらは今かくのごとき苦行をするが、これは何等の果報を求めんとするのじやと問ふた處が、仙人答て、此苦行を修するは天に生ぜん事を欲するのじやといふ。そこで悉多がまたいふには、天は楽しいけれども、福盡るとき窮て六道に輪廻して終に苦聚となる。いかにぞ諸の苦因を修して求_ニ苦報_ニぞと難じて、かように議論しつゝ、日暮にも及び、其夜は一宿して明旦まで思惟したる處が、此の仙人ども苦行を修すといへども、みな解脱眞生の道にあらず。こゝに留るべきことでない、其所を去て、この山の北の奥に阿羅邏鬱陀羅仙人といふ大仙の修行している事を聞て、それへとて立ちこへたてござる。さて又悉多が家にのこつておつたる耶輸陀羅、およびもろくの女どもが眠をさまして見ると、悉多があらぬからまづとりあへず泣出し

て、淨飯王と繼母の摩訶婆闍波提に是を告たる所が、二人とも大きにたまげて地に倒れなき、淨飯は夫れが爲に精魂を失ひ、いはゆる氣絶いたしたてござる。所へ彼車匿が馬をひき哭ながらに歸りきて、具に右の始末を語るときに、摩訶婆闍波提は、悉多我が養育によつてひと、成ながら、そこは思はず我をすて跡をかくし去れりと云てなく、耶輸陀羅は我は年久く親んで行住坐臥相離ず、然に今吾を捨たり。古昔諸王入山學道、皆將妻子不暫相棄。世間之人一遇相識別不相忘。夫妻之情恩愛之深、而反更是如之薄よと云てなく。其中に淨飯王も氣が付て果して車匿を叱る、そこで悉多が申付たる如く理屈をいつたる處が、淨飯もへこみ、そこで車匿を答ることを止めたが、とかく親子の情愛止がたいから、いでや悉多が在處を尋ねんとまで致したが、人も諫るゆへ、王師と云て淨飯王が師と頼む者に心服の者を多く添て遣して、まづ彼跋伽仙が許へ尋さしたる處に、かの仙人の云には、淨飯王の太子か何か知ず、近頃一人の少沙彌きて一夜我と議論をしたが、北方阿羅邏仙人の許へ行たと云から、王師が又夫へゆく處、道にて尤山中に悉多が樹下に座禪をして居るから、王師その前に進で父王の歎きを云て歸る様にいふ。時に悉多がいふには、我豈不知父王於我恩情深也。但畏生老病死之苦、故來此爲斷除一なり、父王もし此苦を除きて賜らば歸るべし、さうなけりや中々還らぬと理づめをいふ處を、王師もさるもので色々利害をとく處が、といへばかくい、つゝ口

がしこく、われは是より阿羅邏仙人を道師として、生死解脱の道を求ると云て袖をはらつて一はやく山奥へかけ入たてござる。そこで王師は空く還られもせぬから思ひついて、其連たる人どもの中に橋陳如と云者始め五人を山にのこして、悉多が修行のやうすを窺はせて王師は還つたてござる。さて悉多はかの阿羅邏仙人が居る山は、是よりはまた遙に國々山川を隔て遠き處なるを厭はず、其途々國々の王ども王舍城の頻婆沙羅王又摩竭國の餅沙王、此らも皆元は彼刹帝利より出で同姓の事故達て諫る處が、夫も右の如くきゝ入ず、遂にかの阿羅邏仙人の住する處にたづね入て、對面して道をきゝかけたてござる。そもく天竺に於て婆羅門どもの學問といふものは、前にも申すごとく婆羅門家の者どもが、代々うけついで致すことで、其學びかたは七歳以上は自分の家で學問し、十五以上になると出家をして諸々方々をあるいて學び、年四十になると子孫の斷絶せんことを恐れて家へ還り、こゝで始て妻を持ち、さて子を生むと其中に年の五十にもなると、又々山に入て道を修行するてござる。さて其道と云て修し教ふる趣はどうじやと云に、治心と云て心をちやんと治むるの修行をして、いつも申通り彼國にも天津神の天地を始め、世に有とある事どもは、その御靈に依て出来る物じやといふの傳へが有て、これを彼國では梵天王といふ傳へてあるてござる。夫は諸の佛經に、梵王は是沙婆の主といひ、又は梵王居大千之中一以統御爲主といひ、又は大梵王言我生世間とい

ひ、又梵天王名、一切衆生祖父、作一切有命無命物、などやうにいへる言どもがした、かある。此古傳説が有によつて、是を本として道を説たものでござる。故に其行を梵行といひ、書た文字も梵天の教たるといふ事で梵字と云でござる。此梵天王と申は即ち皇産靈神のをん事をかく申傳へたものでござる。これによつて世人も甚だ尊みたる事でござる。龍樹菩薩の大論と云ものにも、衆生常識、梵天、以梵天爲世間祖父、爲世人、説梵天、也と在は此ことでござる。又夜見の國の傳へもある。これは彼國の辭では那落といふでござる。その那落といふは地の底にある獄屋といふことでござる。こゝが御國の眞の傳説とちがつて、人間生涯善根をつめば、死して後天堂と云て則梵天帝釋の御許へ生る、又惡事をすれば那落へ行き、底に居る所のあらぶる神十王など、云に責られると云事でござる。これらは彼國の古傳説で、決して作りて云たこととは見へぬでござる。さればさしもケ様のことは憎みいふべきことではないでござる。さて世々の婆羅門家は是等の古傳説を本として教を立た物でござる。其いつち最初に教を立た婆羅門を衛世師と云て、是は釋迦より八百年前に出た人じやと云ことでござる。此衛生師の後に追々勝れた婆羅門家が出で、道を弘たことで何れも天竺に生ずることを修し教た物で、其内に少しづゝ立かたにちがつた所が有てすべて九十五種、これを佛法からさして九十五種の外道というでござる。其ちがふ所というは、其始め何の事もなく欲界といふ

天が有て、そこに梵天帝釋がまします故、善を修し天へ生れよふと修し教たる所を、其次に出たる婆羅門はもちつと其上をいはねば行れぬに依て、其欲界の天よりは上に色界といふ天が有、此方に從ひ道を學ぶとその天へ生ずるといつて道を弘たでござる。所を其後に出た婆羅門は、又其上を一層言上げて其色界どころではない、此方の修し得たる所は色界の上にある空所と云結構な所へ生ずる法じやといつて弘める。さて此様に其上を上々とい、上々して、終に二十八天までい、上げた物でござる。然れども實はばつとしたことで、皆よいかげんにいつたものでござる。右の如く生天の事をおもといつたるもの故に、已に悉多が始てまづ跋伽仙人どもに逢て欲求何果のじやと問ふた所が、仙人どもが答へて爲欲求生天とは答へたでござる。さて此時悉多が慕ひ尋ねたる阿羅邏仙人と云が立たる趣きは、二十八天の上に非想非々想天と云天が有といつて教へたもので、是も此前に出たる尊陀仙人といふ婆羅門の無所有と云天が有と云つて弘めていたる處へ出、其上をも一つ越して非々想天と云天があるといつたものでござる。こゝらのさまが實は子供のいたちごつこやらをするやうな事でござる。偕又天竺の國風とかく不思議奇妙なことがすきで、その世間を教ふるにも彼不思議神通をやらんでは人が信じないから、代々の婆羅門ども人に教授でもする者はみな夫を修行してやるでござる。さて夫を神通でいへば甚だき、よひやうなれども、實には幻術といふ

物で、幻術とはまぼろしの術といふことで、狐や狸などでもない物をそれと見せて人をたぶらかすと
 同じ術でござる。夫故これを幻術といふ。近くいへば手妻の大きいやうなもので、このことも法花經
 の妙玄といふものに、如下幻師在四衢道一幻作種種象馬瓔珞人物等、無明幻出。六道依正。當知本
 自不有無明所爲とあり、又圓覺經の疏といふものに、世有幻法。依草木等一幻作人畜一似往來動
 作之相。須臾法謝還成草木。然諸經教幻偏多。良以五天此術頗衆、見聞既審法理易明とあるを、よく
 とつくりと考へるがよいでござる。まづ釋迦の出ぬ前天竺に、もとから有た教の趣き、婆羅門の學
 びかたはあら／＼この通りでござる。

扱悉多は右の阿羅邏仙人に逢て、生老病死を斷ずるの法はいかにと問ふた所が、阿羅邏が答へて、
 衆生之始始從冥初。從冥初起於我慢。從於我慢生於痴心。從於痴心生於染愛。從於染
 愛生貪欲瞋恚等諸煩惱。於是流轉生老病死憂悲苦惱といふ。悉多また問ふには、其説をき
 て生死の根本は解し得たるが、それを斷絶することはいかにといへば、仙人がこの生死の本を斷ぜ
 んと欲するならば、出家して修持戒行一謙卑忍辱。住空閑處一修習禪定、離欲惡不善法一離於種
 々相、入非想非々想處。斯處名爲究竟解脫一是諸學者之彼岸也。汝若以斷於生老病死之患、ま
 にかくの如きの行を修學すべしと論じたでござる。悉多は其説を聞てまたいふには、非想非々想處

爲有我也。爲無我也。若言無我、不應言非想非々想處。若言有我、我爲有知。爲無知。若
 無知則同木石。我若有知則有染著。有染著一則非解脫。一切盡捨。是則名爲眞解脫といはれて、
 阿羅邏仙人もひしとつまつて默然として居たと有ますが、よく思へばこの悉多がいつた趣は、たゞ辯
 才にまかせていつたことで、阿羅邏が説よりは大きに無理でござる。夫はいかにといふに、阿羅邏が
 いつたる趣きは、欲惡煩惱すへて一切の善らぬことどもを離れて善心に歸することを云て、その善心
 までを止めよといふの説ではない故に、非想といふが欲惡は想はぬといふこと。非々想といふは世
 の爲人の爲になる善事をば想はぬではない。それは想ふと云んで非想非々想法の法といつたもので
 こゝの場へ學びつけた者は學問の彼岸に到つたので、是が解説といふものじゃといふの心でござ
 る。隨分尤なことでもしろいでござる。また悉多が言ふんは無理じやと申すわけは、非想非々想
 處。爲有我也。爲無我也。言無我、不應言非想非々想處といつたが、是は知れたことでご
 ざる。なぜといふに非想非々想といふわけは右申したる如く、惡欲不善なることは思ふまい善きこ
 とをば想ふといふの義じやによつて爲有我也。爲無我也と問ふがものはない。又若言有我、我
 爲有知。爲無知。若無知則同木石といつたもした事で、非々想といふからには有我といふ義
 なる事論はない。有我なれば有知は是又論はない。夫を何も無知則同木石など、口あ／＼くしやべ

ることはなすべからざる。若有^レ知^ル則^チ有^リ染^著一有^リ染^著一則^チ非^ズ解^脱一といつたは、則^チ悉^多が趣意では何の事もなく阿羅邏が非々想と云て、善事をば思はぬといふわけではない。夫は想ふと立た筋を氣に入らぬからいひ出した事で、あのれは生老病死を遁れたひとといふて、親妻子をもかへり見ず、悪事はもとより露聊も善事をさへに想ふまひといふねじけ心からいひ破つたものでござる。又能一切盡^ス。是^レ則^チ名^ヲ爲^ス眞^實脱^ト一といつたが、此通に一切盡く想といふ事をばすて果てしまつたならば、如何にも悉多がいふ通りそれは眞の解脱では有ません。かく天地の間にはらまれては生て居るうちにはもとより、死でもそれは決して出来ぬ事でござる。出きぬ事故さやうに心懸けて親妻子をさへすて山に入たるこの男が、口は此通り立派にしゃべるけれども、已に今阿羅邏にいつた言にも、無^レ知^ル同^ニ木石^トといひ、又一切の想ひを捨てぬから、まづ阿羅邏が説が氣に入ぬといふをもひもあり、さて生老病死がこはひものじやと云思もあり、又此次の會^ニに出^マス。此阿羅邏が許を去り修行するときに、物さへ喰はずりきんで見たが、ひもじくてたまらず、既に死さうになつたときに、牧^{ウシ}牛^{ヒメ}女^メに乳をもらつてしゃぶり、夫故命を助かつたでござる。さすればひもじいといふ想もなくなりやせん。さて年がよつたればしわくた坊主に成居て、死ぬ時もあるいたや、あら苦しやとうめきちらして死おつたでござる。何と是が生老病死一切の想を盡く捨てたと云者か、どうして棄らるゝものか、すてられぬはづ。忘

られぬわけは天津神の皇^{ミコ}産^マ靈^ミ御^ミ靈^ミによつて、是天の下に生れてはどんなに捨よふの、はらひ落さうのとあせりて馳つて廻りても、生老病死の四つはあつちぢぬでござる。然るを悉多が心得ちがひを致して、あゝ大べらぼう成かな、あゝくそたわけ成かな、けつの毛へ火の付たやうに夫をいやがりあわてさわひだがやつぱり死んだが、其さまをつらく念へば一寸と俗の諺にいう、一つ長屋の左二兵衛とやらが、四國を巡つて四國を出られず、まはりくゞて猿と化たと云やうな形ちで、其いひをいた説どもは、只世の愚人原を惑はす種と成たのみのこととござる。なほ追々わかるでござる。

さて悉多は阿羅邏仙人を調伏し、夫より伽闍山苦行林中に入り、尼連禪河と云川の側に、静座觀想して苦行を修し、日に一麻を食し或は一米を食し、或は二日又は七日に一麻米を食す。こゝに彼王師が遺し置たる橋陳如らも悉多と共に苦行を修し、人を遣して王師及びかの長臣に悉達が所行を具にいひやりけるに、王師と長臣は國に還り、悉多がいへる言、並に其苦行の事を淨飯王にいへば、淨飯其言を聞て身をふるひ身の毛を豎て聲も絶々にいへるは、悉多は是我が性命^{イノチ}なり、然に汝等今渠を伴ひ歸らず。我性命いかにして存^マへよふぞと云ときに、王師の悉多が志の堅固なること大山の如く中々移動し難き事をいへば、淨飯王もさてもあらねば、衣食住の具一切を多く車に積で、彼車匿に申つけ、汝これを悉多にあたへて供養し、乏^ト少^シ事のなきやうに致せ、盡たらんには又請によこせよと云て

送り遣たてござる。さて車匿は悉多が修行する處へ行て、其形を見たる處が骨と皮計のやうに瘦さらぼつて、血脈も悉く現はれて居る程のことゆへ、車匿は涙を流し淨飯王が日夜に歎き悲み忘るゝ事あたはず、これらの物を送れることを述たる所に、悉多がいふに、吾は父母に逆ひまた國を捨て遠くこゝに在ることは、至道を求んが爲にとての事也。何が故にかゝる品々を受よふぞと嚴しく云から、車匿が思には是では此品々を受はずまひと悟りて、右の品々をば悉く淨飯王の許へ反し送りて、吾一人は彼の橋陳如らと共に麓に在り、悉多が苦行を見ついだと云事でござる。これ程に父の厚き志を無にし、かへしやるとはさてくゝ悉多は心なき者でござる。くはずんばくわいでもよいから受け置き、父の志を慰るが人の子たる者の道でござる。こんなに瘦さらぼつて居から、さぞかし心中におひては食たかつたであらふでござる。所を一旦何も入らぬ食ひ物も喰まいと云出したる我慢を弘ての事とみえる。是がまことに諺に云瘦我慢でござる。さて悉多は早く婆羅門らが説を看破りてあるに、坐禪觀想に身を苦めたはいかにと云に、まづ彼念ひ極たる生老病死を解脱し、かつ神通を大きに修し得て、夫を以て婆羅門どもを伏させんが爲でござる。それはすなはち大論に、若し不行苦行、而呵言非道者、無一人信受。故自行ニ苦行、過於餘人、と見へ、又西域記にも、太子思惟至理、爲伏ニ外道、節麻米以支、身六年とあるは此事でござる。さやうに外道を伏させんとするはいかにと

いふに、かの外道の輩は國人に普く信じられてゐる者故、まづ其外道から伏させて道を説かねば弘まらぬからのことござる。またそれを伏さするに神通を以てするはいかにといふに、それも神通といへば大そうに聞ゆれども、先にも申したる如く實は幻術といふもので、その幻術といふはかの圓覺經の疏に、諸經教幻偏多。良以五天此術頗衆、見聞既審法理易明とありて、五天竺ともにこの幻術が頗る多きことで、衆人見なれ聞なれてゐること故、この術を行てその奇怪に目を驚かし心を惑はして説つけると、人が信を發してよく會得する故、これで人をさとしたものじやといふの義で、釋迦より前に出たる婆羅門どもが皆是を以て人を服させたものでござる。故に釋迦もこれを專にやらんでは、その道が行れぬによりて六年の修行にこれを第一と修行したものでござる。それはすなはちかの龍樹菩薩が著したる大論にも、鳥無翅、不能高翔。菩薩無神通、不能隨意教化衆生とある。この文を考へて釋迦法師が神通を行つたる故をしるがよいでござる。扱また神通の出来る觀相の仕法はこれも大論に、菩薩爲衆生、取神通、現諸希有奇特之事、令衆生心清淨。何以故。若無希有事、不能令多衆生得度。菩薩作此念、已、繫心身中虛空、滅重色相、常取空輕相、發大欲精進心、智惠籌量、心力能拳、身未、壽量已、自知心力大能拳、其身譬如學、常壞色、色重相、常修輕空相、是時便能飛。二者亦能變化諸物、令地作水、水作地、風作火、火作風。如是諸大、皆令

轉易。令_レ金作_二瓦礫_一。瓦礫作_レ金。如_レ是諸物、各能令_レ化、變_レ地爲_二水相_一、常修念_レ水。令_レ多不_レ復憶_二念地相_一。是時相如_レ念、即作_レ水。如_レ是等諸物、皆能變化_一と有る。これをよく考へるがよいでござる。なんと手妻の大きさものなる幻術に相違ないでござる。また右申す通り釋迦以前の婆羅門ども何れもくこの幻術を以て道を弘めたる所へ、其世の人のき、知らぬ佛道といふことを作爲して、又々同じ神通をかりてひろめよふと爲ること故、以前とは事かはり、大きにはなれたわざをして、どかしたものでござる。これも大論に、種々諸物皆能轉變。外道輩轉極久不過_二七日_一。諸佛及弟子轉變、自在無_レ有_二久近_一とあるはこのこととござる。さて釋迦が神通自在なることは、諸經に委く見へたる中に瑞應本記經といふにその状が言みじかにいひとつてありますが、それは、所_レ欲如_レ意、不_レ復用_レ思、身能飛行、能分_二一身_一作_レ百作_レ千、至_二億萬無數_一、復合爲_レ一。能徹入_レ地、石壁皆過、從_二一方_一現、俯沒仰出。履_レ水行_レ虛、身不_レ陷墜、坐_二臥空中_一、如_レ飛鳥翔、立能及_レ天、手捫_二日月_一、涌_レ身平立、至_二梵自在_一、眼能徹視、耳能洞聽、意預知_二諸天人龍鬼神蚊行蠕動之類_一、身行口意言心所_レ欲念。悉見聞知とあるから、いかにも勝れたことであつたでござる。此神通といふものは大論に有通り、觀想に身を苦めて能修行すれば出来ることと見へるでござる。夫はどうして出きると試にいはい、人の通はぬ深山ゆうこくなどに魑魅魍魎とか天狗とか云類の奇しきもの、多ければ、修行するうちにつひ夫らの物と馴交り、又それを使

ふやうにもなることと見へるでござる。それは先日申たる釋迦が始て跋伽仙人が所へ尋たる時、諸の鳥獸がなれ住て飛去らずにおつたと有を知るがよいでござる。御國の古にかゝる事の、みへたるは書記の皇極天皇の御卷に、高麗へ遣し置れたる鞍作得志と云者、彼國に於て虎を友とし其幻術を學び取り、あるひは枯山を變じ青山となし、或は地を水に變じ、此の外に種々奇しき術を覺へたる所が虎の其針を授け云には、ゆめく人_一に知すこと勿れ、病お治したならば愈ぬと云ふことは有まいといつたでござる。そこで得志が虎の教の如く爲て治するに皆々驗が有たと云こととござる。然るに得志が其針を大切に柱の中に隠しおいたる處が、後に彼虎がどう思つたか其柱を折り針お取去たと云ことがある。これお以て考るに釋迦も虎か何かに針でももらつて持たと見へるでござる。扱佛法の御國へ渡り御國の法師どもも其幻術を受續きやつたものでござる。それは菅原寺の行基、叡山の傳教、高野の弘法、淨藏法師其外いくらもあるでござる。近くは御嶽をひらいたとか云僧や、金毘羅信心じやの、或は道了信心じやのと云輩がまのあたり神通らしし事をやるを見れば、隨分苦行おさへすれば出きる事と見へるでござる。爲れども釋迦にはなれた業をせぬのは修行力がたらんで、あの様には出きぬから、若くは出きても今は幻術と云ことがしれてきたに依りて、縛られるが怖さにはなれたことおばせのか、何れにも深山幽谷へ行て難行苦行おして年月をかさね、一心に觀想をすれば大

論にある如く出来るに違はなきと見へるでござる。又かの役小角などの輩は前鬼後鬼とか云ものを使つたとあるから、本より狐づかひと同じ事。又阿部清明は式神を使ひそれで不測を見せたと有ますが、この式神と云ふは死人の靈を使ふとみへる。かやうの業する輩、昔の僧どもはもとより、外にも多く有ましたが、其うち法師のしざまが憎ひでござる。それは中比の書を讀でみるに、高貴の御かた御懷妊とか、いさゝか御不快とでもいふと大かたは物怪がつく。そこでいつも法師どもに仰せ付られて祈をなされ、そこで御快氣有た所を見れば、法師共己れその物怪をつけまいらせ其祈をいたし、私せんとしわざでござる。夫に違ひのなひ證據はとかく上様にばかり物怪の祟りが有て、下さまにはとんとないでござる。こゝを以て坊主どもの爲る事なるをしるが宜しひでござる。これは今世にも僧や修驗者など云奴らのこの謀事行ひ、己れ狐お付け其狐をおどす祈禱の受合ひ、物取る者もまゝあるでござる。これらもやはり幻術の流れで、多くは佛法より傳へきた事でござる。然れども是を神通と云ゆへ何か香ばしげに思ひある人もあるけれども、元來邪法ゆへ上の御咎めもありて縛られもすると、頓と神通も何も知らぬ常の人と同じ様にいくじもなく縛られて、既に山伏の方などでは、神變大菩薩とか何とか云てさわぐ、役の行者でさへ色々あかしな事を致しても、天皇の勅命には何の手もなく縛られて伊豆の嶋へ流され、ちよ／＼成ておつたでござる。是を元享釋書な

どには、勅命の下で小角を捕へようとしたる所に、空へ上りて飛去たる故捕へる事ならず、よつて其母を捕られ縛つたによつて、小角は是非なく捕へられたなどいふてある。みなそら言でござる。こりやどうじやといふに、たかが凡人の爲に役せられて使はれる様な前鬼後鬼ぐらいの卑き妖鬼のしわざ故、逆も其人を救ふ程のこともなく、また悟り深く威徳のある人には手も足も出る事じやなひでござる。

さて悉多はかく坐禪觀想をして神通の修行工夫に苦行を致しつゝ、月も經年も經て殆んど身も枯木の如くに瘦衰たが、老病死苦は解脱すること能はず、只修しゑたる者は神通ばかり。こゝに思ふやうは我かばかりの苦行をして已に六年に垂とするが、未だ生老病死を解脱するの道を得ず、さすれば眞の道ではなかつたと見へるから、是は昔閻浮樹の下に於て傷虫の鳥に啄る、所お見て思惟したりし趣に不如事をさとり、彼時の思惟に欲お離れて寂靜ならん事を想たのが、最眞正のことで有けるよと言たでござる。此語に依て考ふれば、かの生老病死は解脱する事ならぬ物じやと云事を、此とき始て發明したとみゑるでござる。あゝのろまなるかな沙婆悉多。其頑愚成心より解脱しがたき生老病死も、修行をすれば免れらるゝ、事の様に長々の年月も、ひもじひ念ひもしてみたが、更に解脱が成んで年とるまに／＼身の様子もちがつてきたから、そこで始て目が覺て離欲愛寂靜の道より外に修し

ゑられぬ物と珠數を投た物でござる。是がのろまでなくて何で有ませう。偕離欲愛寂靜を修し得たばかりでは、是までの婆羅門仙人どもがやつた所とさしも替ることもなく、我慢おやつて物食はなんだかひもないから、負おしもお思には今我若以此身而取道、彼諸外道當言自俄是涅槃因。我當受食然成道と念ひ定めたと有でござる。此文に涅槃とあるは死ることとござる。釋迦が死る時の事を記したる經を涅槃經と云もこれ故の事、又釋迦が死る時の像を涅槃像といふも此故とござる。じやによつて、此文にねはんの因と云は、やがてしぬるといふの義になるでござる。また取道とある道も當成道とある道も、道といへばことごとくしひが悟の道お得たりといふて此苦行を止ることをかよふに重くろしくいつたのみの事で、さしも深いわけはないでござる。佛經をよむ人はかゝるおどしをくはぬ様に、よく前後を考へ通して文に拘ず義をとるが宜しひでござる。扱一體の語の義は、我もし瘦身を其まゝにこの苦行を止たならば、彼諸々の婆羅門共がそしつて、それ見たか爲とげもならぬことを爲て、自がすきで餓さらばつたが、それが因となつて命は死るであらふといはうから、まづ食を喰てちからをつけ、のちに此苦行は止め、生死解脱の道を得たりと披露するがよいと念ひ定たと云義でござる。これがまけおしみてなくて何で有ませう。人の噂やあとさきを考へて取締ひ、己が今までの阿房を文らんとする惡念がある。こんな佛のあるものか。物食んではひもじくた

まらず、また生老病死を解だつすることもならず、有體にすればよきにこれが憎いでござる。さて右の如く念ひ定めて座より起て河に入り、垢だらけしらめだらけの骸を洗ひ落し、偕河より上がらふとする所に、身體疲瘦不能出とありて上りゑず、あつぶくしてあぶなく土左衛門にならふと

しているゆへ、人が樹の枝につらまへて攀出してやつたでござる。
扱まづ川より上げてもらつた處が、垢はおちもしたらふが、彼の本文にも消瘠皮骨相連血脈悉現とも若枯木ともある如く、眼はくぼみ腹は背はひつき、あばら骨は出る頬はこけて、頭といへば栗のいがをこへ壺へおつことしたと云やうで、いや其形は見られたものじやない。こゝに於て一人の牧女の名は難陀波羅と云がこれを見、不便さやる方なかりしと見へて乳味を取つてくれたでござる。そこで悉多はその施を受けて甚だ悦び、よくくうれしくあつたと見へて、その女に對し禮に咒願をとなへたでござる。

咒願と云ふは

其咒の趣は、今所施食欲令食者得充氣力當使下施家得瞻得喜、安樂無病、終保年壽、智慧具足と云たでござる。この咒の義は、今この吾に施してくれる所の食は、食する我が身の氣から充しむるばかりでなく、施てくれた功德によつてそなたも喜を得て安樂無病で一生無難に壽を保ち、智

惠も具足するで有ふぞと云の意でござる。きつい禮の云やうでござる。頸で蠅を追やふになつて、ひもじくてたまらず、ひだるき時にまづい物なし。馬の糞でも食ふ氣になつてゐる所へ、かゝる馳走に預たる故悦びさうなものでござる。今の世にもたま／＼は坊主に一文やるとこの文を唱へゆく者があるはこの故でござる。但しこゝに憎ひ事の有は、ひもじひ所へうまい物を下され有難いなら有がたいでようござるが夫に又へらぐちの負おしみを云おつたでござる。其言に我爲^レ成^ニ熟^セ一切衆生^ハ故受^ニ此食^トといつたでござる。これがほんにいやらしいと云のでござる。かくいひつゝ、夫を受け食た所が身體丈夫になり、大きに氣力をゑたでござる。たゞし右の如く川であぶかぶしている所を人が憐んであけてやつたのを、天神が攀出したのじやと言、又ひもじがつているを不便に思ひ、牧牛女が乳糜をくれたのを、淨居天といふ天が此女に勸てくれさせたのじやといつて、是ばかりでなく何もかも實事をば諸天がかうしたの、淨居天がそうしたのと奇妙不測に託して重くるしく記し有が、みな跡からいひそへた事で取に足らぬ偽りでござる。それほど諸天がつさまとつてゐるならば、悉多にこんなたはけを盡させぬがよひでござる。そりや諸天でもないといふでござる。かくて悉多は畢波羅樹といふ木の本^ノなる石上に座して

受胎經には閻浮樹とあり、又一には菩提樹ともあり。

我道不^レ成んばこゝは起まいと思ひ定め、彼の乳糜をしやぶりつゝ、そこに四十八日結跏趺座したと云ことでござる。こゝにも又大きな嘘がした、かある、それは悉多がかくの如くづゝしりと居つたる故、其徳の重き故に大地が勝ること能はんでめり／＼震動した所が、其響で大地の下にいる盲聾龍の兩目が開き明かになり、過去七佛の出世したる時も是瑞應が有たによりて、是は何ぞ佛の出世と念はるゝと云て、地より湧出して悉多が足を戴て偈を以て讚たとい、又其通大地が震動し悉多が眉間より大光明を放たに依て、六天の魔王がそれを見て是は佛の出世と見へるが、夫では吾が魔道を行ふ妨げとなる事じやと云て、吾配下なる數千の魔どもに申つけ、また自も色々悉多が成道を妨んとしたれども、とふ／＼悉多に降伏せられたの、この餘にも仰山なる偽ばかり云てあるが、みな釋迦に重みをつけよふとて云た事で、一つもとるに足るものなきでござる。

出定笑語二

平田先生講説 門人等筆記

偕悉多は山に入て右の如く坐禪觀想を爲て、終に其道を成就したると云て、山を出たる年が三十歳の時で有たる故、是を三十成道と云でござる。俗に出山の釋迦の像とて破れ衣を身にまとい瘦さらぼつたいが栗坊主が山を下りながら、風に吹れて後を振り返り見ているすごいやうな圖が在は、此とき成道して山を出る時の形を書たものでござる。是は二十五のときより三十までじやによつて、ちやうど六年の修行でござる。斯で彼石上を起て山を下り、彼車匿橋陳如が輩五人のおつたる波羅奈國へ來ると、かの五人の者は悉多が食を受け食たる事を知りあるによつて、互に語り合には、瞿曇棄^チ苦行^チ、受^チ飲食之樂^チ。所^チ志不^チ獲^チ。今既來^チ此^チ。我等不^チ須^チ起^チ迎^チ之^チ。亦勿^チ作^チ禮敬^チ。と云合せて各々もく然としておつたが、さすがそこへきてはさうもならず、かれこれと世話やいたと云事でござる。其時悉多はかの神通を以て、早くかの五人の者の意を悟り、汝ら申合せて我を迎へまいと約束したがなせに其申あはせたる言にたがつて斯取はやすぞと云た所が、五人が大きに驚、各面を見あはせ手持ぶさ

たに前に進み、瞿曇行道得^チ無^チ疲倦^チといつたれば、悉多がいふには、汝ら無上尊たる我に對し憍慢の情を以て姓を呼で瞿曇と云たが不埒なことじや、子稱^チ父母名^チ於^チ世^チ傲^チ中^チ尙^チ不^チ可^チ、まして我は是成道して、一切の父母と有物を姓を稱事相すまず、汝ら自ら惡報を招くで有んと嚴く叱りつけたでござる。此しかりつける事は山から出て來て手始のこと故、かやうにまづ人の己れを輕んずる情をおさへんが爲に、けんのみねおくれたので尤なことじやが、此姓を云たる事を咎めたと云のは、是は諸越の是を翻譯する法師がからの事によりて加へたことでござる。姓をいふを無禮とすることは、天竺にはない事でござる。もろくの佛經にかやうの事が多く有から氣をつけて見るがよいでござる。さて五人の者どもはかくの如くきめられて大きにへこみ、顔を赤うして我らは愚癡なる者ども故、さきに見うけました處が人の飲食を受られたによつて道の苦行に怠られたのじやと存で、不禮を致したでござるといつた處が、悉多が汝ら小智をふるつて、我が道の成と不^チ成^チとを量ることなかれ、抑形ちに苦あれば心がう亂し、身に樂あれば情夫に著す、じやに依て苦樂共に道を得ることならぬから吾は其中道を行き、しばらく苦行をつとめ、又飲食をうけてかくの如く物くつたり、物くはなんだり行をしたのじや。是皆おれが深き存より有てした事で、其方どもの知たことではないは。今既に其驗によつて生老病死の患を離れて、無上正覺^チの道を成就する事を得たらんと

嚴く申し、其弱つた所で彼四諦十二因縁と云事をこま／＼と説きさせ、種々の神通を見せて無常
 にとき入れ、まづ彼者どもを屈服させたでござる。此阿匿、喬陳如の二人は弟子の中に於て、かく
 始に悟したる故に第一の弟子とは云でござる。こゝに五人の者の云には、我を今佛法に於て出家し
 て道を修せんと思ふといつたる所が、悉多がうなづいてかの五人を善來比丘と一聲いふと、鬚も髪
 も自におちて、くり／＼坊主と成、自に袈裟衣が身に著てしやんと沙門の形となつたでござる。こ
 らがとんと尾上松緑が早替を見る心地がするでござる。なんと手妻で在せんか。この手妻をつ
 かつて人おくり／＼坊主にしたる事夥しく有。其が一つをいへば、或長者の息子に名を耶舎と云が
 有て、何の氣もなく女狂をして遊び居たる處を、坊主にした手際が妙でござる。彼神通を以て自然
 と其樂みおいとふ心お生じさせ、まづふら／＼と外へ出る心もちになして家の外へ出ると、空中に
 光明赫してかまへの門も自然に開けさせたでござる。さて耶舎は何かしらずやみくもに世事がいと
 はしく苦しく覺へて、其光明を尋て行くと其路に川が有、向は悉多の居所でござる。こゝに耶舎は
 覺へずあら苦しやと一聲云と、則ち河向ふから聲おかけ、耶舎汝便ち來べし、我に苦お離るゝの法
 ありといふから河お渡り往て見と、悉多がさまは彼三十二相八十種好とかいふ顔容で、威あつて丈
 高く見ゆるから、まづひらたくなりて足を戴き吾が苦を救ひ給へといふ。そこで色々あはれつばい

ことを云てきかして、然らばその法に歸したいと云と、悉達が彼善來比丘と一こへ云と、車匿喬陳如
 らのように自然に髪が落ち沙門の形となる。夫をたずね此耶舎の父の來ると、また彼神通でおかし
 な心持にしてそれも我が道に引入れ、またこの耶舎の友とする者ども五十人もあつた時に、耶舎の
 縁によつてこれお出家したく成やうに仕かけて、吾許へつりよせて説法し、さて出家したいと云
 と直に善來比丘と云と、五十人が一時に右の如くくり／＼坊主になるでござる。かくしつゝ段々に
 人をくりくりにしてまはる。これはまあ何とも名づけやうのない山事でござる。

さて其山ごとの妄説、釋迦が悟りたるといへる趣きは、此天地いまだなかりし百千億萬の前世より
 の事實、及び人物の有初よりその父母兄弟妻子眷屬、また貧富貴賤、壽命の長き短き、またその姓
 名、また造す所の善き悪き、さて今の何某は古への誰で、此處の何某は彼處の何某に生れ、或は島
 に生れ蟲に生れておるといふこと、また人の賢きも愚なるも、顔の麗しきも醜きも、悉くに故ある
 ことなるを始め、また人死しては其所行善惡によつて、天上、人間、地獄、畜生、餓鬼の五道にわか
 れ行くこと、まづその人間に生れては始胎に託らんとするとき、父母和合すなはち不淨を以て體とな
 し、生れ出ては老病死その外くさ／＼の苦あり。また地獄に墮しては、或洋銅灌レ口、或抱銅柱、或
 臥鐵牀、或以鐵鑊煎煮之、或以火上而加串炙、或爲虎狼鷹犬所食、或有避火依於樹下

樹葉墮落、皆成刀劍、割截其身、或以斧鋸解剥肢體、或擲熱沸灰河之中、或復擲熱屎坑中、受如是等種々諸苦。また畜生に生れては雜の醜き形を受く、或は骨肉皮毛の爲に殺され、或は人の爲に重擔を負ひ、饑渴ても人これを知る者なく、或はその鼻を穿たれ、或はその首に鉤うたれなどの苦しみをうく。また餓鬼は恒に暗中に居て日月の光を視ることあたはず、形を受ること長く大きく腹は大山の如く頸は鍼の如く、口中つねに大火もえ出て常に饑渴を苦しめども、千億萬歳食を得る事能はず。雨の灑ぐに値へば夫が變じて火の珠となり、海河すべて水に臨めば其水化して熱銅炭難となり、身を動かし歩行すれば股體節々より悉く火燃出づ。是みな爲下本造慳貪、積財不施故、令今者受斯罪報。若人見彼受此苦痛、宜應惠施勿生吝惜。設使無財亦應割肉以用布施。又諸天に生るゝは其身清淨にして、塵あいを受ず、るりの如く大光明有て目瞬かず、心常に歡悅して適はざるのことなく天樂を奏して娛みちう夜をしらず、四方悉く絶妙ならずと云ことなく、衣服飲食念ふに應つて則至る。然れども天福盡るの時ありて、命終は彼天身をすて、三惡道に陥る事あり。わが修し得たるはこんな事じやない、生死の相を離れて一切智を成じ、甚深なるが故に一切の衆生はさとりがたく入難し、惟佛與佛よく是を知とまづおどしかけたものでござる。この如く一切のことをさつたものと云義で佛とはいひ、その道を佛道とは云でござる。佛とは天竺の詞で翻譯名義集によつ

て見れば、佛陀こゝには云智者學者とあるから、さつた人といふこととござる。さてこの佛道といふことをいふにつけては、古きよりどころをこしらへんでは、杜撰におちて、人が信ぜぬから過去の七佛と云をつくり、夫は過去の世、人壽八萬歳のときに然燈佛と云佛が世に出で、次に人壽七萬歳の時尸棄佛と云が出世し、次に人壽六萬歳のときに毘舍婆佛と云が出世し、次は人壽四萬歳のときに拘樓孫佛と云が出世し、次に人壽三萬歳のときに拘那含佛と云が出世し、次に人壽二萬歳のとき迦葉波佛と云が出世したり。我今人壽百年のときに出世して、最正覺を成ぜり。抑佛は天上天下の至尊成が故に、梵天王帝釋天も隨從して命を聞と大言を吐出し、彼修し得たる神通を以て梵天王帝釋天などの形を現し、所謂佛足禮頂をして己お尊ぶ體に見せる。是は今までの婆羅門の立たる教の趣は、古傳の儘に梵天を尊んで夫に奉事し、其修る所も天に生ずるを極意とするお破り、又國人も普く梵天を誡て世間の祖父とし、又大梵天は萬物を生ずるの本じやと心得て、皆婆羅門等が説を信ずる者多き、其鼻をひしやいで己が新ばり道お弘んとてのこととござる。扱其過去の七佛とやらは、更に聞も及ばぬ佛名じやが、さばかり久しき以前のことをどうして知て居るといへば、元來吾は阿僧祇と云て限なき遠きむかし國王で有たる所が、菩提の道おゑんが爲に難行苦行をし、其功德積々りて一切種智といふおゑて、兜率天といふ天に生れ其名を聖善白菩薩と云て、則ち天の諸

神を教道しておつたる所が、時到りたるによつて又此國土に生れ來てひろく衆生を濟度せんとして、まづ其生るべき國はどこにしようかと云事、又其生るべき家がら及び其父母にすべき人がらなどを觀じたる所が、天竺國の中にカピラエ國は誠に國土の眞中で十二遊經因果經これにこしたる地がない。天上下唯我獨尊の身として外の邊地に生るべき事ではないとまづ觀じ、さて其國の淨飯王は甘蔗王の苗裔で夫婦俱に我が父母にたのむに足る。又其妻摩耶夫人は壽命が短く來何月の何日に死ぬべきといふ。されば彼が腹をかりて世に生れよふと云事まで觀じ、その腹へ假に宿て出世したる者じやと云て、なをうたがひの者にはいざ其證を見せんと、彼大神通おあらはし大地の震動する如く思はせ、大地がわれると其地中より一つの塔がわき出し、其塔の中に彼の過去の七佛と立たる中の佛などかいて、善哉々と云て今釋迦の説る如くちがひなきことでは我は今より過去三十一劫のむかし、人壽七萬歳の時出世したりし尸棄來なり、うたがふ事勿れなどいはする。また我は早き昔より成佛して兜率天にいたものじやと云を、うたがふ者に示さんとて眉間から大光明を發つて、其光明の中に兜率天の在様を現はし、諸天神が吾を尊敬して仕へる相を見せて膽をつぶさせ、此外にも地獄をうたがふものには、地獄の有様お見せ、餓鬼道と云お信ぜぬ者には、餓鬼道の有様お見せ、又乾達婆城といふて此海中に其住處が有と云を信ぜぬ者おば、いざ來れ其様お見せんと伴て海底にすらく

歩み入る。さて乾達婆城へ行と龍王が出迎て佛足頂禮おする。かくの如きの相を現ずることは、皆かの修しゑたる幻術をもつて現し見する事で、其逐一のことは中々二席や三席に申盡さるゝ事ではないから、是に准へて知るべきことと云ざる。かやうに致しつゝとんと人を惑はして己が新なほばり道に歸服させたものでござる。けれども既に其世の人らも心有は誹謗して佛智慧不出於人但以幻術惑世といつたと云ことも龍樹の大論に記しあるでござる。かくしつゝ我より前に道を説たる者どもをば、おのが道の外なるといふの意を以て、すべて外道と名づけあつたの如くに賤めたでござる。世の人々外道といへば、何か怖しく角でもはへている物のやうに思っているが、是は釋迦のとき出したる佛道の外のみちといふ意で、儒者が儒者のほかなるみちおば異端といふと同じ事と云ざる。但しかくの如く諸の外道をばおしかすめいひ破つたなれども、其世にも並び行はれて心有ものは、皆元のまゝに婆羅門の説を用ひたること、見へるでござる。是はさうあるべきはづは婆羅門どもの説く所は、彼國の古傳説を本とし、今ある實事を見て道を論じ、親妻子ども其儘あり、愛情もすてぬもの故、いはゞ其國にはなつきの道でござる。然るに釋迦が立たる趣は、彼婆羅門どもの謂ゆる天堂地獄因果應報治心などの説は理ある事で、夫は破られぬから其なりに竊んで我物となし、其中生天の説を破りてひくしとし、親妻子の愛情をさへにすて、生死の海を出るといふ事を加たるのみ

の事で、其加たる所はすべて無節なる事ども故、このわけを辨へたものは釋迦が説にはよらぬはづのことのござる。夫故并び行れたものでござる。又玄奘法師が西域記によりて考るに、此法師が彼國へ渡つたる時分は、佛法は婆羅門の道よりも大きに衰へた様子に見ゆる。それは彼西域記に大祠といふて梵天を祭たる祠が國々にいくらとなく有やうすだが、佛閣は夫よりも少いやうするを考へるがよろしひでござる。

扱かくの如く大山ごとを工夫して、とう／＼釋迦は一大家となつて國々をあるく所が、彼婆羅門の輩も多くしめられて弟子と成たるが多き中に、摩揭陀國の王舍城と云所に摩訶迦葉と云婆羅門が有、是は其父なる者は甚だの大富長者で天竺の内に十六大國と名におふ國が十六有て、其國々に肩を并ぶる者はなかつたといふ事でござる。尤婆羅門の家柄でかの古より有來たる生天治心の學問を致して、迦葉は弟子の五百人餘りも在たでござる。こゝに釋迦が思ふには、かの兄弟二人の者は仙道を學び、國王臣民悉く信ずる物で、又聰明なるもの故かれを吾下につけたらんには、廣く人を濟度するの力になるべきものぞと思て、かの摩揭陀國へ行て日ぐれに迦葉の住所へ行たでござる。所が迦葉が出て、年少沙門どこからきたといふ。其時釋迦が、我は婆羅奈國より來れるが、日がくれたる故一宿をたのむと云、そこで迦葉が宿を貸して其宿したるばんから種々の神通を行ひ、迦葉をおど

かしたることをすべて十八度、其中にまづ迦葉らが第一と尊む所の梵天が毎夜きて釋迦の説法を聞、佛足頂禮などをする。是に膽をつぶし居る處を又婆羅門の法に火に事へると云て、晨朝に火を燃し供養する法が有。そこで彼五百人の弟子どもが火おもやさんとする處が、燃ぬからきもおつぶし迦葉に云と、是はかの沙門の所爲で有ふと云て、其事を釋迦に云ば、還り去れ、火は自ら燃るであらうと云から還り見ると火は燃る。扱供養畢て其火を消さんとする所がいつかなしめらん。そこで迦葉が其ことを釋迦に云と、汝かへれ火は自ら滅るで有ふと云、還り見ると消ている。又或時は迦葉が許へ摩揭陀國の王を始多の人がきて、七日會とも云事を爲す時に、迦葉が心に此年少の沙門は相好甚麗しひに依て是を見たならば、會つたる輩が我を捨て是を信ずる心に成も知ぬから、どうぞ此沙門が七日が問わが所にきてくれねばよいがと思と、釋迦は其心を直に悟りてどこへか行て七日歸らずにて居る。さて七日をすぎ會もはて、から迦葉が思には、彼沙門が七日きてくれんで大きによかつたが、今此に集會の餘食が有が歸たら是を食したい物じやと、心より早く釋迦が則其心を知てひよろりと直に歸り迦葉が前へ來たでござる。迦葉大きに驚き汝此七日ばかり何處へ遊行した事ぞと問た所が、釋迦が此程の集會につけてそちが心中に我を忌氣がある故、餘所へ往たが汝今心に吾を來れかしと思たによりて還來たのじやと云から、星をさゝれて迦葉はたまげまい事か身の毛も立

つほど驚たが、中々伏する氣なく此沙門年もいかんでかゝる奇特なる事をするが、どうしても吾道の真なるには及まひと思つたと有でござる。釋迦は右の如くしたることはすべて十八度して、今日こそ彼を伏さすべき日といふことを念ひ定め、河に入り彼神通で水を左右へ開いたる様に見せてそこに居と、迦葉は遙に見て是は沙門が水に溺れたとみゆると云て、弟子どもと船に乗り漕寄て見ると、水は左右へひらけ其水上に立っているから又きもお潰したが、いやまだく吾道の真には及ぶまいとおもつている。扱汝船へ上らんと欲ふかと問へば、しかりと云て船の底からちよいと入り結伽跣座している。そこで迦葉が舟ぞこに穴でも有るかとおもつてみる所が、穴もなひから又膽おつぶしている。何又穴が有ものかそこからはいつたとみせて實は上から上つた物でござる。彼手妻づかひが脇差を呑だともみせて、此に在と云て懐から出すと同じわけでござる。そこで釋迦が此こそと思て、汝不知道證。胡爲起大我慢。稱我有道德。といつたる所が、迦葉が誠にはぢ入り、如是沙門如是大仙、願くは攝受於吾と云。時に釋迦が云には、汝年既に老て百二十歳なり、又弟子眷屬も多く國土四民の爲に敬る、事故もし決定して吾法に歸せんと欲せば、よく弟子どもと評論してからの事にしやれといつたる處が、迦葉は實もと云て弟子共を集め、彼年少沙門が中々大抵の者でなく、わが及ばぬ者故我今其法に歸せんと思ふ。汝らが心はいかにと云と、弟子どものいふには我らが知た

ることと云は、尊者の恩で覺たること故彼沙門は尊者の信するからは、我らも共に歸依しよふといふから引連て釋迦の前に出て、ともく其弟子とならん事をいへば、釋迦が又例の如く善來比丘といふと、迦葉を始め五百人の弟子どもも一度に鬚髪が落ち袈裟衣が身に着て即ち沙門となつたでござる。是を見て釋迦に二人の弟子有て、各弟子を二百五十人ほどづゝも有たが、是らも弟子に成てくりく坊主にされる、迦葉一人を伏させたばかりでしばらくの間に千人餘りも善來比丘にしたでござる。さて爲迦葉及諸弟子現大神變應其心爲に說法すと有て、かくあらたに人を濟度したる時の狀を見競る所が、いつでも神通で膽を潰させ信を起さして、諸弟子に成たいと一言云と其言の變ぜぬうちに手早く善來比丘にしてそこで彼大神變を現して說法する。其大神變といふは說法のとき大地が震動して、異類異形の物が湧出して說法をき、又天上より花をふらし音樂などを奏して諸天が下で其說法を讚る。これはみなその者どもに信を起させんとする幻術でござる。則本文に爲迦葉及諸弟子現大神變とあるを考へ見るがよいでござる。また梵天およびもろく異類異形の物の現出することは先に申たる瑞應本起經に、能分一身作百作千至億萬無數とある如く、近くは狐が人に化て色々なものを出して見すると何もかはりはないでござる。さて釋迦が迦葉を骨折て伏させたる事は、先にもいふ如く此者は年といへば釋迦よりは四さうばい

で百二十歳、家柄もよく富榮へ其眷屬も多く、修行は八十年して釋迦の出ぬまへは神通廣大で中々其時には右にたつ者なく、國々の王共を始め世には大さう用ひられて居るに依て、此者一人を伏させて弟子にすれば、これを信ずる輩をば、みな坊主にしよふとまゝに成といふ見込でいたしたことでござる。夫故外の弟子とはちがひ迦葉をば殊更に敬ひ來れば出迎ひなども致し、又久しく乞食をして衣はつゞれとなり、さかやきなども長くはやして苦き體に釋迦の所へ來たる時など、迦葉をみしらぬ外の弟子どもは迦葉をあなどり陋める者もある。其節釋迦が自分の半座をわけて迦葉を座せしめ、大きに其功德を賞し我と異なる事なしと申たることもあり、又釋迦と迦葉と同座を致したるありなどは、人々皆釋迦が師で迦葉は弟子と成たと云を疑つて信ぜず、迦葉は大智惠有て普く世の人の敬ひ信ずる所、何として年少沙門が弟子とならうぞといつたと云事でござる。いかさま迦葉は年も釋迦の四そうばいなり、釋迦が敬ふ様子がたゞ何れも左様に思つたらふでござる。其時釋迦は早く其心を悟り、迦葉に汝諸の神變を現はせといふと、迦葉は即ち虚空に上り身上より水を出し身下より火を出し、又身上より火を出し身下より水を出し、或は大身を現し虚空の中に満たしめ、又小身を現し或は一身を分け無量身となし、或は身を没して地に入りまた虚空に踊出て行住坐臥す。衆は是をみて目を驚し未曾有未曾有と稱歎して、ヶ程の大仙がどうして沙門瞿曇が弟子とならふぞと云て

いと、迦葉は空中から下て釋迦の前に至り頭回禮足と云て、其つむりと釋迦の足をのせ頂き禮おなし、世尊は實に是天人之師、我は實に其弟子なりと云から、衆人膽お潰し如斯き大阿羅漢の人お弟子に爲とは、さすれば釋迦はすさまじき者だと信伏したと云ふ事でござる。實に今迦葉が致したる神通の十倍も釋迦の神變はましてあるからさついでござる。扱これより益其説をひろめて彼智惠第一の舍利弗神通第一の目連などをはじめ盡く弟子にして、さて己が道の掟も立たでござる。それは彼誰も知てある殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒、の五戒おはじめ種々の戒を立て、其道に入りり出家したるものは乞食といつて人の門に立ち、今の世の僧もする如く餘り物おもらつて命をつなぎてゐるでござる。但しこれにも法が有て、まづ乞食するわけは一切の憍慢の心お止させようが爲じやと云事で、其貫つて來たる物を四つにわけて一つは同行の僧正にあたへ、一つは貧窮人といふて物をおもらつて來ぬ人にあたへ、一つはこれを諸の鬼神にそなへ、残り一つお自分の食料として、其くらふにも度々はくはんで其戒に、飲食譬ば如く人身病服藥令其愈不_レ得_レ貪著_一といひ、又一日に一食不_レ得_二再食_一とも有でござる。又次第こつじきの法と云ことも有。夫はまづ一つには日々一家に到り食を得ると、それを喰つきたらんでも夫をおく、二つには次第七家に到り食をもらへば、喰つて又たらん時はそれでおく、三つに次第家より家にいたり、喰ほどあれば夫をく、又の日に

じきに出る時は先に行止つた家から又もらひ始でござる。此外にこじきをする法が色々有て、一寸いひきれぬ事でござる。さて此こじきといふ言は天竺の辭では分術と云でござる。それを漢土のこじきに翻譯するとこじきと云ふこととござる。今の世に僧の物もらつてあるくおばこじきといはず、只非人どもの物もらつてあるくおばこじきと云でござる。然れども人の門に立てものもらつてあるくことは古へにはとんとなかつた事で、元來佛法が渡りてから僧どもが物もらつてあるくお見まねて、よるべなき者どもが其まねをした者でござる。さればこじきの本家は坊主で、其坊主にこじきして食事お教へ法をも立たるは釋迦で、自分も元よりこじきをしてあるひて、こじきやによつて正直に自らこじきやと佛書に云て有でござる。然ば今の非人どもの爲には釋迦はきつく能事おしておいた物でござるウフ。非人の所にはお見るに、ほこらの様に作つて白山權現とかいふお祭りて有様子だが、人にきけばあれはこじきの開祖じやと云事じやが、何ものかしらぬが是は釋迦をまつるべき事でござる。然るに今の坊主はたらひそばへこじきおしてあるきながら、本おわすれて門に立た時出ぬ〜とでも云と、大きにおこりておれはこじきではないなど、云ふが、有やけしからぬ心得違ひ事でござる。

さて衣服は是も甚だ色々のわけが有けれども、一たい納衣といふものおさるが本といふ事で釋迦の

教でござる。夫は糞掃衣ともいつて、もとは人の捨て物を拾つてきるのでござる。これも四分律と云て佛法の戒めを書たるもの、中に、牛嚙衣、鼠嚙衣、火燒衣、月水衣、産婦衣、其外裡死人衣、往還衣、塚間衣のたぐひな種類とあり、夫お洗ひ袈裟色といふに染てきるのでござる。此袈裟色と云はすべて天竺の言に、物の色目の正しからず入まじつてる色を袈裟といふでござる。こりや元來出家の服と云ものは右の通り色々けがれよごれたるものお拾ひ集めするもの故、其いろが正しくない。夫ゆへけさといつたもので、元來は上中下の三衣を通じていつたる處を、後世には襟元へ引かけるものばかりけさといふ。則あれが天竺で出家の衣服の總名でござる。それを今は結構なる金欄錦などいふ類ひをするは、大きに釋迦の意とはたがつてあるでござる。さて又律の中に沙彌塞律といふがある。夫に汝ら比丘雜類出家皆捨^テ本姓^ヲ稱^シ釋子沙門^トといふたとある。法師どもの釋子といふは此事でござる。

さて右の如く法を立て衆生を導き、くりく坊主にしてまはつたることこ、には六年。此時父淨飯王は我が子の成道出山したる事を傳へきひて此かた六年なる所がまだ相見ず、甚だ戀しく思つて優陀耶と云者と呼び申付るには、わが子にわかれてより以來十二年に成が、夙夜に其愛慕の心止ず逢まほしく思ふ程に、其方かしこへ行き迎へ來れと申つけたでござる。優陀耶其旨をうけて釋迦のも

とに至り具に淨飯王が意を述たる處が、其様子の嚴重でかの梵天帝釋なども其命を聞いているさま故、こいつまた出家したいといひ出したでござる。するとかの比丘來と一聲かけると、例の如鬚髮悉く落ち沙門となる。時に其餘の所^レ度不^レ可^レ稱計^一と有から、此時も夥しく坊主にしたと見へるでござる。儲心に思やうは、今若還^レ國無^レ所^レ感動^一處^レ化勦^一少^一。先遣^レ優陀耶^一顯^レ神足^一吾が往んとすることを知らしめて道心を發起せしめ、そこでわが往て導たならば度する所多からんと思ひ定め、優陀耶にいふやふは、我今本國に歸るべけれども國人の信ずまじき事を恐るゝから、汝まづ神足を以て虚中を行、神變も現したならば、新米の弟子すらかゝる神變をなすから、まして佛は威徳無量のことて有ふと信じ受るで有ふといつた。處が優陀耶は其旨をうけ飛行して虚空に登り本國迦毘羅衛城の上に至つて、かの迦葉が虚空に上て致したる如き神通を花々しくやつたる處が、國中の者皆々口あんごりとあいて虚空をながめ、大きにたまげて感心して釋迦が得たる道の尊き事が知たと云事でござる。此時優陀耶は、しづましたりと思つて淨飯王が前に出ると、王が吾が子はいつ還ことじやといふ。七日ばかりに來らんといへば王が踊上つて大きに喜び、國中に觸まはし道を淨め地に香汁を灑ぎ、旗蓋^{きぬがさ}を豎て日を敷へまつて居る時に、釋迦は其日になりて諸弟子に告て、今日本國に歸り父王を見る程に、殊に衣服を嚴整にして供を致せといつて彼梵天を右に現し帝釋を左に現し、彼須彌の四天王

と云毘沙門の輩を前に現して従はせ、又諸弟子どもをば悉く後に立せ、其外諸天龍神など云物の形を夥しく現して、夫に或は香華を捧させ又は樂を奏しさせ、自らは彼大光明を發して三十二相黄金の膚と見せ、大地震動の神通を行ふこと六反して、足は尤地を踏す宙をあるいて迦毘羅衛國へ到たでござる。此時父の淨飯王は諸の臣下と共に遠く出迎て平伏して、この尊き有さまおみてよろこび泣になき出したと云事でござる。これはさにも有ませふ。かく平伏してあるところへ釋迦は空をあるいて來る事故、ちやうど淨飯王が額の所へ足がきている。こゝでかの頭面禮足と云て足お頂く禮を父にさしたものでござる。分別功德經と云ものに、佛還^レ本土^一足升^レ空行^一與人頭^一齊使^レ父王接^レ足^一。而已不^レ欲^レ屈^レ身^一と有は此事でござる。一體天竺の禮といふものは、合掌じや、偏袒右肩じや、結跏趺座じやといふ類が都て九通りある。其中にこの足お頂くの禮はいつち尊ぶのかたちで、まづ貴人に出逢た時稽首と云て、地べたへ首おつけ、さて其間が近ければ其貴人の踵おなで又足をねぶるでござる。すると其貴人が手を出して其あしおねぶる者のつむりをなでさすりて、どうだかわる事もないかといふやうに辭をかける。是が則其拜禮も受たるのかたちで、諸の經に佛足頂禮又頭面禮足など有は此こととでござる。なんと是も國が相應の禮なら、しかたはなけれども、さて親たるものに足を頂かせねぶらすと云は人たる者の忍びがたく出來ぬ事じやが、釋迦も眞にこゝらは豪傑でござる。

倍かようにいたしたは皆佛ほど尊いものはなひ、父にすら足をいただかすと人に信を發させんが爲でござる。又この時もろ／＼の樂器が皆自に鳴、婦女の珠環が相さへ聲おなし、盲者は目をあき、聲は耳がきこへ、覺はあるき、おしは物云ひ、狂者は正氣になつたなど、有ますが、このうち樂器の自に鳴つたなどは彼幻術でそんな事をしたで有ませうが、盲が目をあいたのいざりがあるひたのと云は皆僞でござる。もし實にこんな事が有たならば、それは彼古河の弘法水を始めた山師や、ひもんやの仁王をはやらかした山師が、兼ておしや聲んぼめくらなどをこしらへて置いて、かの仁王を信じ弘法水を用ひてから直つたといつて、目をあかしたりいざりお立したりしたる術と同じく、釋迦が兼てこしらへ置いて、此時そんな奇妙を見せたに違ひないでござる。

さて此とき淨飯王は國中のすぐれたる者百五人お撰み沙門となし、又迦葉らが有狀を見る所が至て形が陋いひげに見へて、釋迦が夫らを従へておつては尊げにみへぬとて、我親族の内からうるわしき者を撰み釋迦の弟子につけたとも有でござる。又淨飯王が弟に白飯王と云がある。これに子が二人ありて第一の子を阿難と云、是が物覺がよく釋迦が生涯にいつた言どもお覺へいたといふ男でござる。これも此とき出家させたでござる。其つぎお調達といふ、是がいゆる提婆達多でござる。これがとかく釋迦のすることが氣に入らぬと云て、生がい争つた男でござる。尤もさやうに始終の宜しか

るまじき譯は、釋迦が彼瞿夷と云女を迎へる時に、調達も夫に心をかけていたなれども釋迦にとられたるから、始終夫が根と成て中わらかつたと見へるでござる。とふ／＼争ひが募り是は釋迦の神通で燒殺されたでござる。さて此時釋迦がその親族どもを弟子に致したる神變、又無理やくたひに出家させたる者多き中に、いとも憐むべきは釋迦が迦毘羅衛國の尼拘類園にくまと云にいて城内に入り乞食おしてあるいた所が、其弟の難陀と云が有り、此は彼摩訶波闍婆提が生んだ子でござる。年もいつかう若くして高ひ處から見ると釋迦が乞食するを見下げ來て云には、佛は刹帝利の王胤として有ながら自ら鉢を持ち乞食をすることやあると恥しめて、其鉢へ飲食をいれてやつたでござる。釋迦は還てもはやかれを比丘來にしてやらんと云心が起りて、弟子共にいふはかれが居所へ乞食に行て、若かれがこの方の鉢を受取り物を入れて出したならば、夫をとらずに還り來れ、必この處へ來るべし、我はからふこと有と云てやつたる處に、はたして其計の如く難陀が鉢を受取て物おくれたなれども、行た奴がそれをうけとらんから、難陀がついて來る時に、難陀の婦よめに孫陀利といふが有たが其出る時云には、速に歸るべしと云ことをかへす／＼いつたと。是は釋迦の許へ行た者に坊主にされぬと云事はなひから、吾夫もそんな目に逢てはならんと云心で有たと云ことでござる。そこで難陀が釋迦の許へ行き鉢を置きかえろとする所に釋迦の云には、汝すでに此に來る、今宜しく鬚髮を

剃除して三衣を服すべし、何んぞ還らんと云ぞと、以威神力逼難陀令出家閉在靜室と有、又、佛即命剃師剃髮、難陀不肯。怒拳而言、迦毘羅衛一切人民、汝今盡可剃其髮也。いつたともあるから、無理やくたいにおどしかすめ責つけて坊主にした。かあいそに年もいかぬ者を押こめて座鋪牢のやうな所へぶちこんだのでござる。そこで難陀が久く有て閑暇を見て逃て家に歸らふと伺ひ竊に遁れて大塗を行けば釋迦に逢ふも知ずと、小經からこそと逃ると、やがて釋迦がそれを知り行く向ふからまわつて來たでござる。そこでどうも成んから木のかげへ隠れんとすると、釋迦が神通で其木を根より拔倒したでござる。そこで其木のぬけた穴へ隠れて居ると、釋迦がそこへきて何こ、へきたと云から、氣をぬかれてふるいわなく所に、汝はどこへ行ふと思ふと云ふから、ふるひく家に還り婦に逢ひたく思ふと云。此時釋迦の云には、吾今將汝天上に到り見せよふから怖るゝなといひざま、彼神變でとんと天上にゆき上るやうに思はせたでござる。さて難陀は釋迦と共に其天上に上り、一つの宮殿を見ると其莊嚴の麗はしく其樂きこと云べからず。そこに一人の玉女と云て玉の如くうるはしき天女が居て、夫に夫とをぼしき者がなひから難陀があやしく思つて、是はいかなる事ぞと問ふたれば、釋迦がそち自身に問へと云たから、自ら其天女に問ふた處が、天女答へて、汝不知乎迦毘羅衛國釋迦文佛之並父弟難陀、後當生此爲我天主と答たでござる。そこで難

陀もひそかに少しうれしく成て來たでござる。此時釋迦の云には、此わけじやに依り快く出家道を修せよ、久しからずして汝こゝに生れて、かの玉女を妻にし福をうけること無量で有ふぞと云。さて又地獄の様を現して見せたでござる。其有様上に申たる如く、見るに堪がたき苦しみのみ有るが中に、一つの大釜が、けて夫に獄卒大勢とりまして湯をたぎらしているが罪人は見へぬ。そこで難陀があれはいかにと問ふたれば、釋迦のいふには汝自ら獄卒どもにとへと云ふから問ふときに、その鬼どもこたへて云、迦毘羅衛國の釋迦文佛の並父弟に難陀といふ者あり、人となり放逸にして嬌欲の情多し。彼が命終り後まさにこゝに來るべし、其時煮んが爲に設けおくのじやといふでござる。こゝに於て難陀が身の毛を立、顔色かはりて恐れわなき、獄卒共のとめようとても云てはならぬと思ひて、南無佛陀、南無佛陀、唯願將吾還り給へと云て、袖にすがりて、これからとんと出家する氣になつたといふ事でござる。こゝらの神通のさまは、とんと老狐の人を化すありさまに違ひないでござる。

又我子羅睺邏を出家させんといつて、弟子の目連を耶輸陀羅の處へ遣したる所に、耶輸の云には我夫、太子たる時、我を娶り妻となし、より、われ夫に事へて一つの失もなく、いまだ三年に滿ざるに家を出て逃れ去り、父王自らゆき迎へども其命にたがつて隨はず、鹿皮の衣をきて其さま狂人の如く、

山澤にかくれ居て勤苦すること六年、成道して國に歸れども親を顧みず、舊恩をわする、こと路人より劇く、我母子をして孤を守り窮を抱かしめ、今又使を遣しわが子を求めその眷屬となさんとするは、何とてかくの如く酷しきぞ、成道して自ら慈悲じやといはるゝが、慈悲の道は衆生安樂せしむべし、今反て人の母子を離別せんとす、苦の中にも甚しきは恩愛別離の苦に若たるはなし。こゝを以て是を推考ふるに佛に何の慈悲やあらんといふ、これは一々至極尤なるいひ分てござる。そこで目連も種々さとし諫るけれども、耶輸陀羅さらに聞入ぬてござる。こゝに於て目連もこまりはて、此事を淨飯王にいつたる處が、淨飯王は其妻摩訶波闍婆提を遣て、諭させたる處に耶輸はいつか聞入ず。吾家にあるときは國を王より請に來たなれども、父母はそれにゆるさず。太子は才藝人に勝れある事ゆへ父母が許してこゝへ嫁らしたるに、太子其時世に住せず、出家學道せんとならば、なぜにねんごろに我を求めて有ぞ。夫れ人は婦おめとり、恩好聚集歡樂をなして萬世相承ぎ、子孫相續して紹繼宗嗣は世の正體なり。太子既に去り、又羅睺羅も求め出家せしめ永く國嗣を絶んと欲す。是何の義ぞやと云から、摩訶波闍婆提も此言どもの一々理あるにかへす言もなく、默然としたと云事てござる。こゝに於てどふもならんから、釋迦が例の神通で空中に聲をひびかして、耶輸陀羅汝いかにわすれたるか、往古の世に汝より五莖の花蓮を買取たるに、汝世々ともにわが妻と成ん

ことを求む。我夫を聞入ず、汝もし一切布施して意に逆らはずば、わが妻と成事を免さんといひしに汝ちかひを立て世々生るゝ所の國城及び生る子、又吾身も君に隨て施與して悔る心なからんといへり。然るに今なんぞ羅睺羅を愛惜して出家せしめざるといつたてござる。これが不測てござる。耶輸が其語をきいて自然といかにも前世にさう約束して有けると胸にうかんで、今までかたく拒んだことが氣の毒の心持になつて、羅睺羅を出家させたくなつて目連に渡したてござる。そこでましまとらごらも出家にしてしまつたてござる。佛道の仕方はおもしろい事てござりますまいか。今でも此通りしれも致さぬ現世未來の因果ばなしで愚人の鼻をすゝらせて、佛信心のふゑる様に致したものでしんに仕方がおもしろいてござる。さて右の通り釋迦の始めたる佛法と云ものは、死生をばなれ三界と云を出で、天地の外のものとならふとする事故、君も父をもすて、妻子の愛情をもいさぎよくはなれねば得られぬと云の教で、眞の人間には、とんと出來ぬ事てござる。然るを後世に出來たる佛經や諸論に、これをさも有んさまにいつてあるけれども、そりや釋迦の本意ではないてござる。論より證據は已に釋迦が山成道して國へ還り、神通やら說法やらで、其父淨飯王并におのが妻も不承知なる所を、かの羅睺羅を先出家せしめ、さて近き親屬は残らずと云程のこと同じ流れの一家八萬四千人を弟子となし、其後も國中の人々をのこらず僧にせんとかまへたてござる。能々

のことなれば父の淨飯王が釋迦になげきて、これでは國計永く絶んといったことも經文にも見へる。なんとこれでも人の眞の道にかなはふか。邪よこしまさの道ではあるまいか。さてかやうに説き弘めいひならしたる年數が、およそ四十餘年の間のござる。

さて釋迦は諸の弟子どもと迦毘羅衛城と云所の闍頭園かづみんといふへ到つたる時に、そこに工師の子とあるから大工の様な者と見へますが、其名をば周那と云が釋迦の所へ来て、例の頭面禮足して云には、明日私方に於て食を進じたいから来て下されと請待する。そこで釋迦はうなづいて承知いたし、其翌日法服を着し手には鉢を持ち大衆が取巻き其周那の舎に行たる處が、周那は程なく飲食を設けて釋迦にも、供につれたる坊主どもにもくはして、扱別に梅檀樹の茸は世に珍しきものでござると云て、夫を煮て釋迦にくれたてござる。處が釋迦も爲に説法すと有から、これは珍味をくれてかたじけないなど、悦び、舌打を致し食つた事と見へるでござる。さていろ／＼と教示し、夫よりさて弟子どもと其家を出で、これは大勢馳走になりましたなど、大きな顔をしてかへりがけ、途中にある木の下にとゞまりて阿難に云には、吾いかなる事にか疾が生じて背がいから病ふなりてどうもあるかれぬから、其方こゝへ座をしいてくれると死そうな顔をして云、そこで阿難が膽をつぶして、いや夫は周那が供へたる菌の毒にあたらしつたと見へます。さてもにくき奴かな、とほうもない物を

佛ほとけに進つて、是は極てあなたは是で涅槃を取らるゝで有ませうと云と、釋迦は阿難が口をとめて又此時も負おしむおいつたてござる。それはいや／＼阿難おぬしそんなことをば云事勿れ。周那はおれにあのきのこをくれておれはそれが爲に死ねばかれは大きに利を得、又壽命おも得る事じや。それはいかにと云に、我初て成道せんとするとき食をくれたる女、又この度この食の爲に滅度に及べば、この二つの功德正等にしてその施してくれたる人の利となる事じやによつてそんなこといやるといつたてござる。長阿含經是は逆もきのこの毒にあたつて、年は取っているなり、とても今度は能有まひと自分も決定してどうも阿難がそんなことを云だてをしては、意地きたなくそんなくひつけもせぬものをくつたからじやと人にもさげしまれる事故、かやうの負惜みを云て口をとめたと見へるでござる。これが負惜みじやといふわけは、いかにも彼坐禪の苦行に瘦さらばつたる時、牧牛女が乳糜をくれたるのみ功德にもならふが、人に毒を喰して殺し何の功德にもなるまひでござる。實はまだ／＼世に久しく居て、善來比丘をした、かこしらへるつもりでいる所を、毒殺せられたから彼我慢ものではあり、心の中には咽笛へも喰つきたかつたらふでござる。又此時のたうちまわりしたゝか苦しんだが、周那はよりつきもせぬを見れば心ありて毒物をくはしたかもしれぬでござる。もしさうなりやこの周那といふ者は、餘程見解のある者でござる。

さて釋迦は其うちにしきりに大病に成り、これはとてもいかぬこと、覺悟したる事と見へて、自ら法服をぬいでたん衰たんで、それをしひて其上に右脇に伏して、長阿含經ひごろ手なれし持たる所の鉢と錫杖をば阿難に付屬し、處胎經諸の比丘どもに云には、諸善男子よく其心を修して、したさまの放逸をいたすこと勿れ。我今背の疾ひにて總身いたくてたまらずと云て苦しむ。ねはそこで諸の比丘らが何故に一劫も半劫もこの世におわして、我等を教導なされぬのじやといつたる處が、釋迦がいふには、わが無上の正法は悉く已に迦葉にふどくして在程に、わが如く其方どもを教導するであらふと云て、とんとまづ死だてござる。統記こにおひて棺におさめておくと、しばらくして中から手を出して阿難に問て迦葉舍利弗は來たかと云てござる。所がこの迦葉はこの前より其弟子五百人と耆闍崛山といふ處へ行きあり合さぬ。夫故これは第一の弟子のこと故、戀しく思つて死かぬたと見へるでござる。又舍利弗はこの前にはやく死で、とくになき人でござる。それをきたかといつて尋ねたのはこれも秘藏の弟子で有たる故に、やみほうけてまだ死なぬことに思ひまがへたものでござる。又薩沙多論といふに依り考へたる所が、この舍利弗と目連はとく死たる時に、この二人は大弟子の事故、そのおしへこんだる弟子共は散亂してしましさうであつたる故、釋迦は其散亂なきやうにとて、かの神通で舍利弗目連の二人を化作し、左右にをいたる故みながよろこびて、さては舍利弗目

連は死だと思つたがしなぬといふて散亂せなんだと云事もある。かやうの手妻をやつたることさへ忘るゝとは、けしからぬやみぼうけよふでござる。そこで阿難がいふには、迦葉は未だ至らず、舍利弗は、とくねはんにいりましたでござる、と云たれば、釋迦が又云には、我今永取滅度ニといつて、即ち手を引こんで此のちは何もいはず、しづかであつたといふ事てござる。此我今永取滅度ニといつたる意も、とかく迦葉らに死目にあわぬ事をおもつてのこと、見へて、こんなねじけものでも、こゝらは不便な事てござる。佛ずきの輩はこゝをよく思ふべき事てござる。本より心かけたる老病死苦をはなるゝことも出來ねば、また阿羅邏と問答の時に、一切の想をすて、それに染著しまいなと、口は立派にいつたけれども死かぬる所を見て、愛情はすてられぬ物なることを知がよいでござる。さて此しぬ時の事を涅槃經に右の如く寢臥たる所で迦葉が云には、如來已免一切諸病苦患ニ無有レ病。云何默然右脇而臥。當爲九十五種之外道。所輕慢沙門瞿曇無常所遷ニといつたれば、釋迦がむく／＼と起き結跏趺座して其顔ぼう甚だ麗く大光明を放ち、其光が百千の日輪よりも光り虚空に充滿せり。さて迦葉に告ていふには、諸衆生不知大乘方密語。便謂如來眞實有疾が故に、今かりに病を示現して見せて、世間へ法を示すのじやと云て、したゝか説法したなどゝ有が、皆後世の大乗の經々を造る奸僧共の、其大乘に重みを付よふとて偽り言たることゝもて偽でござる。實に迦

葉はこの時居あはさなんだものを、此様に作事を申たものでござる。

さて釋迦の身體が無量の金色大光明を放たと云事、それも隨心の羅漢弟子といふにばかり左様に見へて、いまだ釋迦を深く信ぜぬ者は罪がふかいによつて、釋迦をば灰色やせ婆羅門と見たと云事が觀佛三昧經と云に見へて有が、こりや合てんのゆかぬ事と云事。なぜと云に實以て金色大光明のからだならば、信心不信心者をしならべ一様に見へさうなことと云事。然にかやうの隔があると云ふは、つらく考ふるに、信ずる者は迷によりて金色大光明の體とみなす。信ぜぬものは迷はぬによりて有のまゝに灰色のやせ法師とみへるではないかと思はるゝでござる。これはちやうど狐狸が人とばけているを、人間は智と云惑ひぐさのあるゆへか、其眼を掠められて其きつねたぬきを人とみなせども、けつく犬などはきつねたぬきに向たぶらかされず、飛かゝつてかみふせるやうなことがまゝ有物だが、そんな分ではないかと思はるゝでござる。猶思合さるゝことの有は、是も釋迦の若いうちは根氣つよくケ様に神通もやつていたが、年よるに隨ひ根氣もうすくなり、ついに化のしつぽをあらはしたでござる。それは増一阿含經の十八に、阿難以て手摩佛足言、天尊之體何故極緩。不如本故。佛言、夫受ニ形體、爲レ病所レ逼と云こと見へ、又中阿含經には、佛遊王舍城告諸比丘、我今年老、體轉衰弊、壽過垂訖といつたことも有でござる。こりや年のよるに従ひ根氣もつゝか

ず神通をやりおほせられなんだこと、見へるでござる。なんと佛には常少不老の徳有と云事も、外の經論どもに有がこりやどふだ。是でも後世の坊主どもが色々とせつない理屈を付け、尻口をむすばうとしたけれども一つもいを得たる説がないでござる。さてかやうに老衰しつゝ、年八十の時とんと床へついたのでござる。夫は般涅槃經と云經に、我今背疾、舉體皆痛。我今欲臥。如彼小兒及常患者、といつて、右脇に臥たと云事が有。然るを後世の僧どもがまた説を作りて大論などに、佛は金剛の體なれば實にはやまひと云事はなけれども、方便して病惱があるやうに示現したものじやないといつたでござる。然れども、こりやけつく最眞のひきだおしというもので、ちやうど儒者が聖人を引たふすとおなじやうなことと云事。實には釋迦もそのすこやかであつた時こそ、よこさの道のしひごととして其行をつくりもしたなれども、死期に及びては其眞心の現はれて、これはかくあるべきことと云事。かの佛も元は凡夫なりといふ事はあれども、元ばかりでなく實もつて始終凡夫で、たゞ化ておつたのみの事じやもの、死期に及んではかうも有そうなこと、彼四十餘年未顯眞實がこゝであらはれたものでござる。彼今はのきばになりて阿難に水を乞へる時、其聲もかすかに有たればこそ、阿難がきゝつけぬことなど思ひ出るにつけても不便なる事と云事。しかるを後世の坊主共は釋迦よりもなほたかくかまへて、我れ勝に悟りがましく、しやらくさきたぶれ言をば

吐散し、今や命をおとすまでも其まごゝろをつゝみかくして、世を終るはさてもくゝにくひ事でごゆる。「やとるへきこともなき世をさとらんと、おもふ心をまよひなりける」

さて釋迦はとふく死たるときに、こゝで阿難がおかしな事をしたでござる。夫は佛の陰藏相を出して女人に示すと有り、釋迦が陰莖を出して諸の女人に見せたでござる。これは阿難が心に諸の女共が此いん莖をみたならば、女人の形を恥じ男子の形を得たく思ひ、佛道を修行する心にならうかとの心しらひで有たと云事でござる。さて其翌朝阿那律と云弟子が阿難に云ことには、汝王舎城に入り諸の末羅まらのまらはたらき人ことかに佛の滅度を語て頼むがよいと云時に、阿難が泣々城に入り諸の末羅どもの一所にをつたる處へ行た所が、夫らが云には、朝早くなにの用在て來たぞと云時に、阿難が云には、如來昨夜已に滅度せられたによつてきてくりやれと云。是らのいふに、どふしてそう急に死んだ事じやなどいひつゝ、これらがかゝりてとりしつらひ天冠寺と云寺へ持ち行き、火葬にせんとてたきゝに油をそゝぎなどして火をかけたる所が、いつかな燃つかんから阿那律が云には、是れは大迦葉が五百の弟子と遠くへ行てゐるから、それを待ち、火がもへぬで有ふと云て、止させたでござる。雙卷これは彼ねじけ心のこりかたまつたる所より、彼様の驗しもあつたらうでござる。隨分今の世にも執念深く思ひをとめた者にかよふのが有者で、有そふなことでござる。

扱こゝにかの迦葉は五百の弟子どもと普闍屈山といふ處に是は拘尸城をはなること五十由旬と云事で御國道にして四十里ほどある道を弘め居たる所が、何となくむなさはぎがいたす故、釋迦のことが氣になりかの大勢の弟子どもと釋迦のあつたる拘尸城へといそぎ來る道に、一人の婆羅門法師が手に曼陀羅華まんたろわと云花を持ち來るに行逢つて、そちはどちらからきたぞ、我師は何處にあると問ふた處が、それが答て、我は拘尸城からきたが、其方の師は菌の毒にあたりて已に涅槃にいつて七日をへたと云たでござる。そこで迦葉は大に力を落しなげきて、善導還棄、衆生顛墜せんといつたれば、こゝに思の外なる事の有は、其迦葉に従ひ來たる弟子どもが更に相賀してとあるから、互によるこびを云て如來が寂滅しては、わが輩もし犯す事ありても誰か制する者なく、是からは安樂になることじやといつたといふことでござる。其時迦葉もあきれがほして、さてもくゝさうしたことかともつて、深く更に感傷したとあるでござる。四爰らちよく佛ずきの輩に見せもしきかせもして、釋迦の教といふ物は人情に相反してゐることをさとらしたものでござる。やうく釋迦が死るやいなや其垣内に従ひあつたる者共すら、かようによるこびを云ふほどの事でござる。是はさうも有ませうで、其師たる迦葉は釋迦が神通にたまげて弟子となつたなれども、この弟子どもは釋迦をさしも信ずる心もなかつた處を、師匠と共に思もかけず善來比丘にされたこと故、悔しくもあつたらふが、その生ているうちはいやだといふと釋

僧どもの心からして、いろ／＼と牽強附會をしたもので、其説今では周の穆王の五十三年の二月十五日と定たやうなれども、とくとしらへて見たる處に、周の穆王の五十三年よりは五百年餘りも後の事のござる。それはどうしてしれたると云に、漢土の梁の武帝といふの時に隱士趙伯休とんせいじよといふ者が天竺の地方へ行き、律師弘度といふ人に出遇ひ衆聖點記と云書物を得たてござる。これは釋迦の弟子であつた優婆離と云僧が、釋迦の身まかつた年の七月十五日に何となく黒てんを付をいて、夫より年々七月十五日になると一てんを記すが例と成り、その後代々の住職が其通りにして傳はりてあつた。それが此衆聖點記のござる。そこで彼趙伯休は其書を得て、彼星を勘定してみたる所が九百七十五でありて、前代齊の永明七年七月十五日までのてんがあつたと云ことござる。こゝに於て釋迦の年代をくり上げくりをろすと、生れ年も身まかつた年も今年まで何年になるといふ事までしやんとわかるでござる。まづその死たる年が、御國では懿德天皇の御即位あそばしてから二十五年目、漢土では周の敬王といつた王の三十四年にあたる。またその身まかつたる年が七十九歳で有た故、是から七十九年くり上げると其生れたる年が、御國では綏靖天皇の御位に御つき遊ばしてから十六年目、漢土では周の靈王といつた王の第六年にあたる。さすれば釋迦が身まかりてからは、この文化十三年丙子年までに二千三百年ほどに成てござる。なる程よつばと古さは古い事ながら、僧

どもはとかく一年も先へおくりたがつて彼是と云紛らし、ざつと六百年程もかけ直をいつてあるでしやる。

出定笑語三

平田先生講説 門人等筆記

さて釋迦が死からだおかたづけて後に、迦葉が思ふには、何にしたら佛法お久しく世に傳へて未來世の人おこの道に導かれやうぞ。是は釋迦一代の説法を結集しておくがよいとおもひつき、そこで釋迦があらゆる弟子どもを王舎城と云所へあつめ此事を評議し、迦葉は上足の弟子じやによつて會首となりて、その大勢の中から阿羅漢果といふをなす者數百人を撰みこの人數或は五百、又七百とし千人と云出し、七葉岩内と云大きな石室いほやの内に集ひ其ことにかゝりたてござる。時に其中にかの生涯釋迦の侍者となつて左右に仕へ、殊に地獄耳と云やうに覺へのよかつたる阿難もあつたる所が、迦葉は座より立て手づから阿難を引出し云には、今清淨の阿羅漢衆の中に於て佛一代の説法お結集せんとするに、汝未だ阿羅漢果をなざる者じやによつて、こゝにいるなと苦々しく云たてござる。此時阿難が泣きいふには、我二十五年佛の左右に仕へてあつたが、但し佛法には阿羅漢果を得たる者は佛と云へども其左右に仕へぬこと故、そこは修行せんであつたる者じやといふ處に、迦葉がいふには汝さら

罪もある。その罪といふは佛は女人の出家する事は好まれなんだに、汝乞すゝめて摩訶波闍婆提まかばははだの出家をゆるさるゝ様に取持たが相すまず、また佛涅槃の時に汝に水を飲たしといはれたる所に、汝それを奉らぬが相すまず。又汝佛の爲に其法服をたゝみたるときに、其上を踏たる事もある。中にも相すまざる事は佛涅槃の後に、その陰藏相を出し女人どもに見せびらかしたがあひすまぬ事じや、汝かやうの罪どもがあるによりて、この席上で懺悔しろといつた所が、阿難は長老のいふこと故、長跪合掌偏袒右肩といふことおして懺悔したてござる。なれども迦葉がなほゆるさず、汝いづれにも未だ阿羅漢果をなぬから連もこの衆中には加へられぬ、早く阿羅漢果を得て後に來れ、少しも煩惱の心が遺つていゝうちは來る事勿れと云てつき出て門を閉たてござる。その夜に至り門をたゝく者が有から迦葉が誰じやと問ふたれば、答へて、我は阿難じやといふ。なぜに來るぞと問へば、我今夜諸煩惱を盡くはらひて、阿羅漢くはなすたりと云ふから、迦葉が云には、我汝が爲に門をひらくまいから、いよく以て諸煩惱を掃盡せしならば、門の錠の孔からはいつてこいといふと、阿難は心得つると云さま、もはや神通を得ること故、錠の孔からはいつて、迦葉が前にきて例の頭面禮足したてござる。そこで迦葉は阿難の頭をなで、吾汝が未だ得道せぬことを惜く思ひ、わざと斯の如く汝を責たのじやによつてあしく思ふことなかれと云て、阿難が本の座に復したてござる。扱結

集にかゝつたる所が阿難は右の如く常に釋迦の左右におつたるもの故、よくその説法どもを覺へて
あつたでござる。

さて此説法したる事どもを集めたることを三藏結集といふ。それは集説どもを忘れぬさきにつゞり
結び集むるといふの意で結集とはいふでござる。その三藏と云ふは修多羅藏また素担覽藏ともいふはのちなり、毘奈耶

藏古は毘尼藏と云ふ、阿毘曇藏阿毘達磨ぞうと云はのち也と云てこれらのことどもは佛書をよむ毎に出る言ばしやによつて、

よく心得ておるがよいでござる。それはまづ其修多羅藏の修多羅といふ言は、翻譯すれば糸篇に泉
と云字を書たる字の義言でござる。すなはち其線の字はいとすぢと訓ずる文字で、一體佛經と云ふ

ものは四句で偈と云て、かの諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂など云類ひのことが旨とあ
るもので、かやうの辭どもを問々の文を以て釋迦が云々と云偈を唱へたれば、阿難が云々と云ふ偈

を唱へたといふやうにつなぎ合せたるもの故、其趣きがとんと糸すぢを通して偈をつなぎ合せたと
云様なすがたゆへ、天竺辭で修多羅といつたものでござる。さて一切の經々が皆其すがたをもつ故

ひろくいふ時は、修多羅と云辭は一切の經と云心にもなるでござる。此翻契經古云單經ともあるでござる。又毘奈耶藏
また古云無比法ともあり

の毘奈耶と云辭は、翻譯すれば法律と云言となつて、則ち佛法のいましめ律さだめでござる。また此云調伏
古云律ともあり
り彼飯は一日に一度くらふものじやの、乞食をするにはかうする物じやの何のと種々の律を記した

物でござる。又阿畏曇藏の阿毘曇といふことばは、翻譯すれば對法といふ言になりて、また古云無比
法ともあり
ちかくは大論じやの婆沙論じやのと云やうなすがたに、論をあつめたる物いふ名でござる。さて
修多羅藏、毘奈耶藏、阿毘曇藏と藏の字をつけて云は、是も梵語では俱舍といひますが、夫を翻譯し
て藏といふのでござる。なぜ又これを藏といふぞなれば、そのことを攝含かへんでをさめ置おきというの意で
ござる。さて後世に三藏といつてこれを法師の位の名としたるは、右の修多羅、毘奈耶、阿毘曇の
三藏に通じているといふのこゝろで、これを位名としたものでござる。

さてこの時迦葉が會首となりて、三藏を集めたとは云ものゝ、何ぞ其説どもをみな集て書に記した
と申すではない。たゞ聞持不謬、辨才無礙と申て覺るのよろしく、其教をよく聞取てあつたる者
どもが、釋迦の説たる趣はかやうくと互に口に誦し語り合ひ、我が聞落したることは彼にき、
彼が聞おとしてある事をばわが聞覺へたる所を誦しきかせたるのみのござる。其中に阿難と
申す者は右に云したる如く、元來釋迦の徒弟で殊の外に物覺へ宜しく、且つ釋迦に隨從致し以來關
席いたさず不斷傍におつたるもの故、盡くよく覺えてあつたと申す事でござる。一體釋迦の説教は
機に臨み變に應じ、才覺を以て申したる事で、かの禪宗に申す、以心傳心と云ふ様な事で有ますか
ら、文字には記さなんだものでござる。是は實に禪家に申すに相違もない事でござる。それは大論

に迦葉らが三藏を集むることを誦出々々と云るを以て知るがよひでござる。これ只口に誦覺へたる事をいつたものでござる。なほ次々もふすうちにわかります。然るに後世の僧どもの偽作つたる經論どもに、此時すでに多羅葉と云ふのはへ、釋迦一代に説き教へたることどもお記し、夫が今ある經文じやと申すのはみな事實をよく考へぬ誤りでござる。實に此事は釋迦の本國なる天竺の僧ども、漢土及び御國にも古へより致し、名僧智識など、いはれたる僧どもにも一人と致しこゝを心得たる者はなく、明らかに知れなんだ物でござる。あきらかにしねば人の迷つておつたも尤なことか、ござる。是は少し講談が横へはいる様だが、所を大直日神のいかなる御靈、たまはつたることか、も早佛法の譯も世に明らかになり、人の惑ひも追々開くる時節の恵み來たると見へてあやしい故、櫻町天皇の御世しるしめす寛保延享の間に當りて、津國難波に富永仲基と申す人あつて、これは俗名を道明寺屋吉右衛門と云て身は町人ながら、甚すぢの宜き學風で、始はかの人もしつたる三宅萬年と申す其頃の大儒に従ふて漢學を致し、大きに御國に害あることお發明いたし、説弊といふ書をつくりて萬年に見せる處が、三宅は儒者のこと故大に立腹して相用ひず、よつて富永仲基は萬年の門人を相斷り、それより進んで佛書およみ、かの不凡の玄才を以て佛法の經論のこらず讀盡し、唐大和の僧學者はもとより彼釋迦の生國その佛法の本國嫡々相承の祖師開祖と仰がる、名僧智識も、か

つてみとらず考出さぬところの明説を云いだし、諸佛經は一部一冊として釋迦の真經でなく皆後世の偽さくなるよしをはつめいして、名さへ山定後語といふ書二まきをあらはして、辨じたる年が延享元年の事で其序に、基也今既に三十以て長ずと有からは、漸々卅有餘未だ四十に及ばぬ程の事と見ゆるでござる。然れども世間に珍書を好む人の少いのか、或は佛經を論じたるもの故なほざりにさし置たのか、更に世に弘まらず誰も存じたる者がなかつたと見へて、世間に一向其書はなかつた所を我師本居の翁は、いかにしてか此書を得てこれを讀れ、翁が隨筆玉勝間に返す、譽置れたでござる。其趣は云々といひ置れたでござる。篤胤この一條をよんで大に驚き、即刻に本屋をせんざしようにと存じ、西へかけり東へはしりて江戸中の書林を殘らず驅あるひて尋ねたる處が、書名をさへに知たものがない。そこで又思ひつひて江戸にはか程博識の多き事故、たれぞ持っているものも有ふと存じ、知たる人には逢て尋ねしらぬ人にはつてを求めてとひなんぞ致したなれどもたれ有て見だといふ人がなひ。あまつさへわが翁の玉勝間にかやうに云置れたるをさへにうか／＼と見過して居たる人ばかりでござる。こゝに於て翁のよまれたる本があらふと存じて、松坂へ申し遣はした所がしれぬとの事、かた／＼大きに力を落し、また／＼考へつけてこの地の書林十四五軒へ行て上方へ注文を頼み、また仲基は大坂の人ゆへ、大坂の同門へ云ひやつたならば有うかとこれへも申遣し、

京都の同門城戸千楯と申すは俗名をゑびす屋市右衛門と云て本屋を致すもの故、あつく頼み遣はしたる所がこの人も大きに骨折て尋てくれまして、幸ひに一本も見出し、京都より早飛脚でこの書をよこし呉たてござる。それが此本で今年からは卅九年以前の事ござる。所がこの通り板元もしれません。其うちに彼頼みおいたる十四五軒の書肆どもからは、くしの齒をひく如く京大坂へ申遣はす。彼は實は大騒ぎを入れたてござる。處が大坂の敦賀屋と云書肆がその夏土藏の掃除を致したる處がこの板元が出たてござる。それ迄自分の藏板とも知らずにおつたと云事ござる。こゝでその書肆が其頃やかましく詮議のあつたこと故、早速にすり出し江戸へ下し、新たにつゝみ紙に此書我が家の藏板ともしらんで居たる處が、本居先生の玉勝間に返すゝ稱譽せられてから、四方の君子の求をしきりにうけ、この度み出したるによりてすり出したる趣を記しあるてござる。その本がこゝかしの書肆から都合五本私方へよこしました。其まへに二千楯の處から此本をよこし、最早いはせんけれども註文致したる事故、是非なく其せつみな買ておいたてござる。是から致してちつと世間の學者も此書名を覺へ、また見たる者も出來たてござる。其後又さらに賣ぬと見えて、此節本屋をたずねても又さつぱりないてござる。さすれば彼つゝみ紙に四方君子と書たのは、篤胤が注文お三ヶの津から申てやつた故では無かと思ふやうなことでござる。なる程賣ぬも尤なわけは、佛

經の論で餘り入用も無、又見所が佛經論を廣くみた人でなくては分りかぬることの多き故てござる。篤胤は何によらず珍書を得ると、おのれ一人讀誇てあるが嫌ひで、とかく人にもその善きことを聞きたいから、書をすきな人へは吹聴してみせる處が、この書ばかりはよ程文字のある人もわかりかぬるが多いてござる。さすればうれざるも尤なことてござる。依て此書かな註を致して、世の人にも廣く合點させる積りで、致しかけておいたてござる。また其後に幸ひなる事は、赤俵々と云書をゑたてござる。これは蘇門居士、服部天游と申す人の著述で、出定後語の後に出來たるもの故、又一ささみよろしひ事も、多くあるてござる。わが佛書の學問はこれらをはし立として、入始めたことて、夫藍は藍より出で、藍より青しとか申すやうに、此二書誤りをもよ程考出し、夫にそへて佛道より起つたるついで費害を論辨いたすが今度の趣意てござる。わが翁もしん而せよとのこと、見へて、佛法の事は餘りいはれず、只此出定後語をほめてをかれた事とみゑるてござる。われは其ほめ言によりて此書を得、此書を得たるがかけはしと成て、世の學者などはひろくて手も出されぬと捨置たる佛法も、たやすくかやうに申しとかるゝやうになつたことゆへ、ついてもゆけば佛書のまなびも、やつぱり翁に習つたやうなものでござる。とにかく翁にあたまの上らんといふは、實は口おしき事てござる。

さて迦葉の輩數百人、かの大石室の内で兩三月の間に釋迦一代の言教を論じ定め、迦葉は僧中上座の者故其結集したるを上座部と申して、釋迦正統はこれのござる。所にまた未熟の者じやと云て、其結集の中間を省かれたる數百人の輩が相談して申には、如來の在世には此方も共に學だ事であるに、我輩を多らみのけると云は口惜き事じやと云て皆々集り、此輩も師恩を報ずる爲とて迦葉らが集りたる三藏の上に雜集藏、禁咒藏といふに事をまして、都合五藏を結集致したてござる。是は學無學をいはず數百人で論じ定めたること故、大衆部と申して是則ち旁流のござる。

さてかやうに岩内岩外と別つて結集致し、正統と旁流と異なれども、其説に於て異なることなく、法唯二味、二部和合して二部共に其言述る處、いはゆる小乘阿含部の旨にて有を以て宗となし、こ一本二味とみな名數に有て全く般若華嚴などの類ひ、大乘と云經どもの如く高上微妙の説はなかつたもの故に、互に争もなかつたものでござる。然るに右申す如く書に記さず、口で誦し傳ふるゆへ漸々に亂れ紛れて、すでに阿難が末年に或山中を通つた所が、一人の沙彌口に佛語を誦しつゝ、行くおきくに、大きに間違つてある故におしへたれば、その沙彌がわらつて大徳は毫せり、我が覺へたるところは正しいといふてもちいぬから、阿難が大きにたんそくしたといふことも西域記に見へ、また釋迦入滅後百年ばかり過ては、大きに異論が出来たといふことござる。それは大論に、佛滅百年阿輪迦

王作^三大會^ヲ諸大法師論議異、故有^二別部名字^一といへるにて知るべきことござる。これより後はますく異説が起りましてござる。夫は婆娑序説によつて考るところが、釋迦入滅の後四百年ばかり有て、北天竺の境なる健駄邏國の王が毎に佛經お習ひ、日々に僧一人宛を請待して法を説きいたるところが、僧どもの説が異なる故に深く疑ひて、

これは一すぢなるべき道の、各々異にして合ざることを深くうたがふたてござる。

迦葉阿難より彼上座部正統の大法師、脇尊者といふに問たれば、此法師の答に、如來去^レ世^ヲ歲月逾邁、弟子部執據^ニ聞見^ニ爲^ス矛盾^トといふ。こゝに王また問て、諸部立範、孰最善乎といへば、莫^レ越^ニ有宗^一と答へたてござる。そこで健駄邏國王が然らばその有宗の部の三藏を結集すべしとて、有徳の僧どもを召て共に評議せしめて集めたるが、今傳わる毘婆沙論じやといふことござる。この脇尊者といふは迦葉阿難より正統の大法師なる故、これに糺し問ふて、釋迦の本義は有宗なりといふ言におちつたものでござる。また法顯の傳に、法顯本求^ニ戒律^一、而北天竺諸國、皆師々口々傳、無^ニ本可^レ寫^一。是以遠步^レ乃至^ニ中天竺^一。於是得^ニ一部律^一。是摩訶僧祇律。復得^ニ一部抄律^一、可^ニ七千偈^一、是薩婆多衆律。亦皆師々口々相傳授不^レ書^ニ之於文字^一と見へて、法顯爾時欲^レ寫^ニ此經^一。其人云、此無^ニ經本^一、止口誦耳といつたとあるなどが、實に佛經どもは釋迦入滅後、久しく書に記し傳へなんだものなることの明かなる

證據でござる。そこで人々定説なく又依憑むべき籍なき故に、皆意隨に改め易へ、口づから傳授し來つたものを後に書に寫したる故に、一切の經説がうち合ぬわけでござる。かくて經々の初に如是我聞と云事のあるは、文字の如く我は是の如く聞りとの意にて、我とは後世其經々を誦し説る者の自ら我と云るにて、釋迦文佛の説れたる事をわが聞傳へたる趣は、これのごとくと云の意で各々思々に釋迦の説に託して、わが思ふ旨を説出したるものでござる。然るを次々作れる經説どもに、阿難登座稱我聞、大衆悲號といへるを始め種々の説あるは、後世に成たる經々をみな三藏結集の時に、阿難が如是我聞と云つて誦し出たるもので心得たる非事でござる。それは如何と云に、我聞一時と云事も多く有が阿難は親く釋迦に教を受たる者なれば、我聞一時と云べきいはれなき事でござる。然に是にも又説を作り、阿難得道夜生、侍佛二十餘年、未侍佛時、應是不聞と云も非でござる。此説の如くならばすでに釋迦に侍へて後に聞ると云經どもに、なぜ復如是我聞、又我聞一時などあるか、不通の説でござる。また或は阿難が釋迦に願ひ未さかざる所の經を重て説けと云たれば、爲に密に説たの、或は阿難がさかざる所の經を人に從ひさいたの、或は諸天にさいたの、又は佛が棺より臂を出して阿難が爲にかさねて説たの、あるひは阿難は法性覺自在王三まいといふ法を得たりし故に、未如來に傳へざる前に説る經をも、皆よく親しく聞たる經々と同じ様に臆持て居たるの、或釋

迦の死ぬ時に我涅槃後阿難所未聞者弘廣薩薩と云が、當廣流布といつたの何のと有は、經々をみな阿難が口より出たるものにせんとて、苦しき儘の妄説で笑ふに堪たる説どもでござる。實は諸經説多くは佛滅後五百歳後の人の作れる物なることおしらず、後世の學者どもみな徒に數萬の經説みな阿難が集たるものと思ひおるは、まことに愚昧な事でござる。

偕今ある佛經には誰も知ている如く、大乘と小乗と云の差別が有。それはまづ小乗と云は阿含部と申して、長阿含經、中阿含經、相應阿含經、增一阿含經の四の阿含經を始、この部經々どもをすべて阿含部と云大乘家よりこれをさして小乗とはいふでござる。又其大乘といふは般若經、法華經、華嚴經、大集經、楞伽經、大日經、維摩經などいふ類ひ、この餘にもすべて夫阿含部を陋め貶し斥けたる經どもを大乘とはいふでござる。然らば其大乘と小乗との趣意はどこで違つておると申すに、小乗の經々は釋迦生涯の事實に就て、此所にてはかゝる説法あり、彼所にては然る事の有しと事實の様に道を説たる趣が見へて、かの脇尊者が健駄邏國王に答へたる如く有を以て、宗と致したものでござる。夫故大乘の經説にくらべては説が淺く聞へるでござる。又大乘と云經々に有趣は何れも功者にとりなしたる理届ばかりで、小乗阿含の經々とは大に赴きのちがつたものでござる。然らば其大乘部と小乗の部と並べては、どちらが釋迦の本説で、どちらが先に出來たものであらふと

云に、世の出家どもは元より在家の人々も、生ごしやくに佛書でも見かちる輩は、誰も此大乘の經々の説が釋迦の本意で、其説が高く尊く、小乗は只愚人原を導く方便で、卑しき者じやと心得てゐる。是は御國ばかりでなく、漢土をもみなさうでござる。すでに漢土では名高き儒者じやが、王元美と云者などは此大乘の經々の旨の高名なるげに惑て、その云置たる言に一切の經をみな釋迦の説ぞと心得てゐるが、其間には後人の釋迦に託して造つたるも有が、其大乘と云諸經は議する事なく釋迦の本説と見ゆれども、小乗の經々は佛滅後に竺土の僧どもの作つたので、それを釋迦に託したものじやといひ置ましたが、是は服部天游が云たる如く、ありやこりやな説で何の事もなく、大乘の經々の旨深げなるに惑つて、かへつて小乗の經々は實事のあることを辨へなんだものでござる。依て今篤胤が此天游が説を本として、具に何れが先何れが後と云ことを申ひらかば、大乘の經々はもとより小乗阿含部も俱に釋迦の入滅後、迦葉阿難の輩が三藏を結集したる時よりは遙か後の世の人の書た物で、其内小乗阿含部の經々は先に記したる故、十が中に三つ四つは實に釋迦の口から出たるまゝのこととあれど、大乘と云諸の經どもはすべて全く後人の釋迦に託して偽り作つたものにもちがはなひでござる。それはどうして知れると申に、小乗阿含部の説どもは右申すごとく釋迦生涯の事實を本に記して其事實の因に法をとき、大乘の經々の説どもは空理ばかりをいふたものでござ

る。それはたとへば釋迦の行狀を述るにも、小乗には十九出家、二十成道八十入滅と云て、十九歳の時出家して、三十歳の時に成道出山して、扱八十の時菌の毒にあたつて死だでござる。有のまゝに記しある處を、それではやつぱり凡人と同じことで、をもしろみもなく餘りに尊くもないから、大乘には釋迦は久遠劫と云て限もなく遠き昔より成佛して世に出で、さてかりに滅度を示したなれども實は入滅せんで、常に靈山と云山に住み説法して居ると云てあるでござる。これはみな小乗の經々に記し有通りの事實がまづ有て、後にかやうの空理を附會したること明かだでござる。又小乗の經々に有名目は、其義理が正しくて隠れたる事なく聞えるでござる。所を大乘のかたには多くは其小乗部に有名目をかりて、それを翻按ひつくりかへして大乘の義にとりなしたるものでござる。其心得易く悟りやすき事どもを一つ二ついはゞ、小乗部に苦集滅道これを四諦といひますが、まづこの苦とは心の煩惱をいひ、集とはくさんゝの愚か心に集まる事をいひ、滅とはその愚癡煩惱を滅するといふのころ、道とはその如く愚智ぼん惱を滅しては菩提の道に入と云の義で、この苦集滅道の四つを四諦といふで、なぜ諦と云ぞなれば、諦とは審實不虛の義と云て此趣にちがひはない、審に實なることの虚からざると云の義でござる。夫故小乗部にはこれを有のまゝに、苦は實に苦、また集は實に因と説てある所を、大乘には諦といへども苦でもなく、集は集でもないなど、何か高妙なる由有げに説

なしてある。又小乗部に四大といふ説を云てありますが、この四大といふは地水火風の四つを申、この道理を以て天地間の道理、又人身のわけをも説たもので、是は西洋の國々では甚だ古くから申た事で今以て阿蘭陀などすべて西の極なる國々では、是を四元となづけて是で物の道理をさばくでござる。是は實以て尤なことで、扱天竺で古き昔から此四大をもて諸事をさばき、釋迦より前かの婆羅門の輩が何れも是を説き、釋迦も夫をうけて説を立たること故、小乗部の經どもに四大とあるは尤なことで誠に釋迦の眞面目でござる。然るを大乘部には此四大に空といふ事を加へて五大としたなれども、空と云もの、四大へ並べては一向理にあたらず、きこへぬことでござる。なほも加へて六大七大にも致し、また小乗部に六識と云こと有。是はもと眼鼻耳舌身意の識を云大乘部にこれは加上して、七識八識六識に末那識阿頼那識を加へて八識と云九識十識など説く。是皆後々漸々に阿含部の上を加上して説を立たものでござる。たゞし此らは其例を示さん爲に二つ三つを申すのだが、余も此に准へて曉るべき事、誠は此類今かぞへ盡されぬ程の事でござる。かゝれば先づ小乗部が有て、後に大乘部の起れること疑なく、それを大乘となづけたるも阿含部を陋めて自ら立たる筋を高ぶり、自分と大乘といふに對して、阿含部に小乗と云名を大乘家より付てい、貶おとししたもので、阿含部を信ずる方で自らいやしめて小乗といふはづがないでござる。こゝを考へても小乗が先で、大乘部の經どもは後に漸に成たるわ

けは明らか事でござる。とは云もの、其小乗阿含部の經でさへ、すべて釋迦は本より迦葉阿難などよりも、遙に後の人の手に出來たるものにちがひないでござる。たゞ其中大乘部の經どもよりは先に記した者故に、僞り功者がいらす釋迦の眞面目も眞の事實も随分んに有と申すまでの事でござる。然ば小乗の經々も後人の手で成たるものじやと云事はいかにしてしれると云に、前にも云如く彼四阿含の内なる雜阿含經を見れば、阿輪迦王と云もの、法事といふを起したることが記してある。この阿輪迦王と云は、釋迦の入滅してから百十餘年後の人でござる。然るに此ことを記して有からは、又阿輪迦王よりは小百年も後の世に記したものはちがいの無ことが知るでござる。さすれば此小乗阿含部の經々といへども、釋迦の死んでから三百年ばかりも後に成たるものなること彰々として明らか事、大乘の經々は夫をおしつけよふといふ趣意にかまへ作つたるものなれば、是は又小乗部の經々よりは遙のちに出來たる事更に論はなく、尤それは一人の手ではなく次々思々に天竺人どもの釋迦に假託したる事でござる。それゆへ諸經に釋迦の語とて後五百歳と云語がたとある。是は其經々を僞り作る者どもが釋迦よりは五百年も後に、己等が作つた物を釋迦のといたのじやといふてひろめること故、かやうにいつた物で、近くは法華經などに後五百歳弘宣流布と有も、わが死んだる五百歳ばかりにして此經が弘く流布するであらふと、釋迦の未然にいふておいた

やうに思はせたものでござる。

扱右の如く見識をたて眼を活して見てゆくと、何經が前に成、何經が後に成たるといふことまで巨細にわかる、夫はまづ前にいへる如く、佛滅後に迦葉阿難の輩が彼石室の内に結集したるは上座部と云て、釋迦の正統では即いはゆる小乘阿含部の旨であります、又かの結集の人数を省かれたる輩數百人が、石室の外に集りて、結集したる大衆部と云も、説に於ては互に異なることはなかつたが、佛滅の百年ばかり後に右の大乗部の徒の中に大天と云者有て、始て異見を起し別に新義を立て生死涅槃皆是假名と云の旨を唱へたが、是やがて般若經の空假の旨で、後世大乘の説の起れる基でござる。かくて此説を大乘の徒は信用したが、上座部の徒は其古義にたがうことを惡み用ず、大に争諍を發し互に誇り相て和合せなんだといふ事でござる。偕のちにます／＼この空假の旨を唱ふる者多くなつたと見へて、前に申たる釋迦入滅より四百年ばかり後の事有ますが、後の健駄羅國の王が僧等の傳ふる經説の各々異なるを疑ひて、上座部正統の大法師協尊者に問ふたれば、此法師の答には莫し越有宗と云ました、此有宗と云は三世實有と云の義で、則ち上座部の正統阿含部の旨でござる。然れば此時分は大天が云出したる空假の旨を唱へた者の多かつたことも知れるでござる。故に夫は釋迦の本義ではなひ、有宗の旨が本義じやと正しく答たものでござる。是に依て思へ

ば般若經が大乘部と經々の中に、いつち古く成た物じやと云事も明にされるでござる。此經の旨は以て空相と爲して、事皆方廣と云て功者にたゞひろく仰山に説を成したもので、此經の旨は、諸法皆空で有故に其空なる理を悟り得よ、これ則佛法の本意で、そこを悟る智慧をみがき出すは、此經に説る趣ぞと云の義を般若となづけた物でござる。般若とは天竺の語で譯すれば智慧といふ義の語でござる。此經は六百卷有て仰山に多いが、其内肝要なる一卷を理趣分と言ますが、是を讀てみるとわかるでござる。

彼禪宗また修驗者などのいつもよむ、なんからたんのうとらやあ／＼なむおりや、とらは半分毛をむしられ、なんどいふがこの理趣分でござる。

もつと少いものでは般若心經でも此わけが知れる。其文に色不異空、空不異色、色即是空、空即是色と有ますが、色と云は即我身をいつたもので、文の義はわが身形は空に異ならず空は身形に異ならず、身すなはち空々すなはち是身なりと云ことでござる。さてかくの如く何もかも皆空にをとしたは、阿含經の旨は佛の本意ではないといやしめたもので、是がいゆる大乘の經の始でござる。されど此經の成た時分は未だ阿含が前共、般若が後とも年數の前後を論ずる事は無たもので、阿含部を首張とする者は、如來の生涯の説法は四阿含に止るといひ、

それは智度論に迦葉語^ニ阿難^ニ從^ニ轉法輪經^ニ至^ニ大涅槃^ニ集作^ニ四阿含^ニ增一阿含^ニ中阿含^ニ長阿含^ニ相應阿含^ニ名^ニ修妬路法藏^トと有^ニにて知るがよいでござる。修妬路藏とは上に申たる如く一切經藏と云事でござる。

般若を首張する輩は、如來得道の夜より涅槃の夜に至るまで、つねに般若を説れたと云でござる。此趣も智度論に釋迦初成道の事を記す所に、是時世界主梵天王及色界諸天等、皆詣^ニ佛所^ニ勸^ニ請^ニ世尊^ニ初轉法輪^ト云々。故受^レ請說^レ法^ヲ諸法甚深者^ハ般若波羅蜜^ハ是故佛說^ニ摩訶般若波羅蜜經^トとあるにて知るがよいでござる。

これ阿含部を首張する者も、般若を首張するものも各々そのよる所を正義として、後世に云ひ出たる阿含は前に説たもの、般若は後に説たものなどいふやうな、年數前後の説はなかつたものでござる。

しかるを法界性論に、十二年説^ニ阿含^ニ三十年説^ニ大品^ニ若也^ニ般若八年説^ニ法花^トといつたは、下に引く法華經文に、從^レ成^ニ正覺^ニ過^ニ四十餘年^ト云々といふことのあるに惑はされたる非説^トでござる。

かくて般若の次に成たる經が法花經でござる。それはどふして知るぞといふに、阿含は有を宗と爲し、般若は空を宗と爲たる故に、此經を偽作する人が思ひつきで此は如來のいつち末年^トに説たる經

で、此經の趣^キが眞實の本意^トじゃ。これより以前に説るは眞實の旨ではない。みな方便説じやといひ立たる其言に、從^レ成^ニ正覺^ニ以來^ト過^ニ四十餘年^ト無數方便引^ニ導衆生^ト我所^レ說諸經^ニ法花最第一^ト但爲^ニ菩薩^ト不^レ爲^ニ小乘^ト觀^ニ諸法實相^ト是名^ニ菩薩行^トといつたでござる。此は釋迦の道を弘めた間がおよそ四十年ばかりのことじゃによつて、此經はその末年に説るに託して、以前の諸説を陋^トしめ貶^トし、また是を實相に託して阿含の有宗般若の空をも破つて、彼らはみな方便に説た旨じやと釋迦の自らいつたをもむきに致したものでござる。

然るに後世の學者みな此おしらんで、徒に法華經を宗と致して釋迦の眞説を實に經中の最第一と思へるはいかい誤でござる。年數前後の説も實に法華に始り、又權と實とはかつて是までの諸教おまる吞に致すことも實に法華に始る。廣大の方便説を以て古今の人を惑すこと限もなひことでござる。天晴これお能見明^ト蔽^トりましたは、誠に富永仲基が功でござる。解深密經に、初小乘、中空教、後不空といへるは阿含、般若法華を説る年數の前後を云へるにて、小乗とは阿含をいひ、空教とは般若を指し、不空とは法花に諸法實相といへるを指せるにて、此も法華經を作れる者の黨より出たることを知られるでござる。扱三藏の目は佛滅後に迦葉らが結集の時より起つたことでござる。然るに法華の文に、三藏學者と云る言が有が、釋迦が説たる眞の經に此目のあら

ふはづがないでござる。是を以て此經の後に出たることが明にしれるでござる。

此次に成たが華嚴經でござる。此經の趣は阿含は成道出山の始に説る狀にて有を宗と爲し、般若は阿含の後に説る趣にて空を宗となし、法華は末年に説る由にて諸法實相と云を旨と爲て、始中終の説が有に依て、これは入處がないから釋迦成道出山して直に此經を説たなれども、甚高い所で人が入かねたる故趣向おしかへて、阿含經以下般若經また法花經までを説たけれども、夫は方便にしたることで、實はこれが釋迦の本意じやといはふが爲に其性起品に、譬如下日出先照諸大山王、次照大山、次照金剛寶山、然後普照大地、日光不_レ作_ニ是念、但地有高下、故照有先後。如來亦然。智慧日輪、常放光明。先照菩薩山王、次照緣覺、次照善根衆生。然後悉照一切衆生。如來本_レ作_ニ是念。但衆生善根不_レ同故、此種々差別と云へるが此經の本旨で、譬の意は如來の所説に固より淺きと深きのわからはない、唯その最初に説く趣こそ眞實なれ。されども衆生の根氣が同からぬによつて、菩薩等は聞て速に其化を被り、緣覺の徒はや、後れてその化を被り、善根の衆生はまた此に後れて其化を被り、一切の衆生はまた後に其化を被つて皆各々その徳を成すが、法を説く如來にはさう次々に化せんといふ念はない。夫は喩へば日輪の出で山王といふべき大山を照し、次にそれよりや、卑き山を照し、次にまたそれより卑き山を照し、さて後に普く大地を照せども、日光にはさう次々に照さん

といふ念はない。たゞ地に高き下き有て、高い所はおのづから早く光をうけ、下い所はおそく光をうけるに同じことじやといふ意で、般若法花の旨を釋迦の本説ではない。初に説た花嚴の旨が最妙の本旨じやと託したものでござる。また出現品に、一切二乗不_レ聞_ニ此經、何況受持をといひ、

一切二乗とは阿含部の小乗家と般若法花の大乗家を指たもので、文義は彼二乗の徒は此經の旨さへ聞れぬに、まして受持の事はならぬと云事でござる。

又法界品に、舍利弗不_レ樂説_ニ不_レ能_ニ讚嘆_一といひ、如_レ聲をしの如く抔と云て有は、智慧第一の舍利弗さへ此經の功者なる旨を得られんで、悦もせず讚嘆することもならず聲の如くをしの如く黙然としていたと云ことで、皆其立た宗をおし張り、是までの經説を斥けよとのこととござる。

さて此經は右に申た如く、最初に説る赴に託したなれども、實は阿含、般若、法華などよりは後れて成たによりて、ついにその尾であらしたは可笑こととござる。それはまづ小乗の教有て後に聲聞の人は有べき事でござる。それに此經入法界品に舍利弗等の五百の聲聞があるが、此時いまだ小乗の名さへあらふ様は無に、舍利弗ら何所よりなんの法を學で聲聞とは成たことじや。そのうへ舍利弗目連らが釋迦に従ふたは出山してしばらく後のことで、時も處もちがつているを華嚴會に居合せたはどうしたことやら。また祇園精舎は佛成道六年の後始て建立致てござる。然るに此經成道の初

に託しながら委しく此事を述べてござる。こりやなんと前後相違のことではありませぬか。また諸法實相、般若波羅蜜の語があるが、これにて此經の般若法花の二經より後に成たといふことは疑いもないことである。

無量義經は法花經に黨する徒の花嚴に後れて作つたものでござる。これは其説に、初説四諦、爲下求聲聞一人中於處々演說甚深十二因緣云々。次説三方等十二部經摩訶般若花嚴海空、法花會入、佛意慧宣說菩薩歷劫修行とあるにて、此經の法華經に黨する徒の花嚴に後れて作つたことが明かである。また四十餘年未顯眞實、種々說法以方便力と云るにて、上に引る法花文に、從成三正覺一來、過四十餘年、無數方便、引導衆生。我所說諸經、法花最第一といへるに合せ、彼經の勝れたことを示さむとして作つたものでござる。

華嚴の次に大集經、涅槃經の説が起たてござる。それは此二經の旨は大小二乘を合せて重きを其涅槃に歸したもので、十六年始説大集と云が如き、これ暗に阿含の後、般若の前に此經をといたといつて、二乘の中間へ入れたものでござる。またその律を説て、如是五部、雖各別異、而皆不妨諸佛法界及大涅槃といつた如きは、これ五部律の各々違つてゐるのを合さんとの事である。然るに五部律はもと八十誦中に出たのを分て五部と爲たことは、釋迦入滅から遙後の世のことである。

る。

五部律とは曇無德密薩婆多有一切迦葉遺論彌沙塞不著有婆蹉富羅子摩訶僧祇大

こゝを以て此經の後に出たことを知るでござる。涅槃經もまた同手で作つたものじやによつて、言語が多く似てあるでござる。則これを佛滅に託して、此經の出ること年數の最後なる由を證し、其聖行品に、譬如從牛出乳、從乳出酪、從酪出生酥、從生酥出熟酥、從熟酥出醍醐、醍醐最上、佛亦如是。從佛出十二部經、從十二部經出修多羅、從修多羅出三方等經、從三方等經出般若波羅蜜、從般若波羅蜜出大涅槃。猶如醍醐といつてござる。

十二部經とはすなはち一切の經をいひ、修多羅とは其中に大小二乘に屬する別部をいひ、方等經とはその修多羅の中に就て大乘といふべき經等をいひ、般若波羅蜜とはその方等の中に就て粹なるものをいひ、大涅槃はすなはち大圓寂にて般若の粹なる由に別つたもので、これ大涅槃經を作つたる本意である。さて醍醐といふは牛や羊の乳を段々と製法致したもので、乳を酪となし酪を酥となし酥を醍醐となすが、其醍醐は色黃白にして餅に作り甚だ味く、乳脯といふもこのことじやと申ことである。

この喩はもと無垢藏王と云者涅槃の教の最も勝れたることを嘆たによつて、釋迦の實尤なことじや

とてこの五味の譬を以て、是まで説る經等より涅槃經の勝れて濃く純たくなるよしを示したとたくした物でござる。

この經右もうす如くいつちしまいに説た趣きに致した成ども、小乗部、長阿含、増一阿含などにも釋迦入滅して寺に葬り、後に諸弟子説法することまで載てあり、又龍樹が大論にこの經のことはとんと説かないから、彼よりは後に出たと見ゆるでござる。

この次に順部説が起たでござる。其經が二十ばかりありて、楞伽經は其中に甚しいものでござる。これは従前の諸經の言説の重く煩しく、其説がうち合ず迂遠なに依り更に激切なる語を發し、其言に一切煩惱本來自離。不可説斷及與不斷。一切衆生皆是一切、畢竟不生、離諸名字。即一切法、唯一真心、一念不生則是佛とやらに、環同とした説なく言短なる語を以て、以前の諸經をうち破たものでござる。

後世菩提達磨は即この經に本づいて説をなし、義に依て文字に依らず始終一字を説かず實に禪家の元祖でござる。さて其窮まりに至つては乾屎橛を以て佛性を語つたり、經卷を斥けたりするに至るが、これ皆いはゆる頓部でござる。禪宗のことはなほ下に申すこととござる。

さて是ではもはや偽作のしやうも有まいと思ふ所が、まだ趣向が一つ残つてゐてこゝでかのはゆる

る眞言秘密といふことを作て、以前の經々は何れも釋迦の實意ではない。その秘密の所は生涯あらはさんで密に金剛手菩薩金剛薩埵ともいふ所謂普賢なりといひ傳へたる所が、金剛手菩薩これを南天竺の鍔塔に藏めてしらせず有た所を、數百年の後に龍樹菩薩が初めて取出したる經じやといつて、則三部の密經と世にいふ所の大日經、金剛頂經、楞嚴經といふ三經を偽作して、その教の趣は世尊得一切智々爲無量衆生廣演分布。隨種種々趣、種種々欲性、種種々方便道。宣說一切智々。或者聲聞乘道、或緣覺乘道、或大乘道、或五通智道、或願生天、或生人中及云々。各々同彼言音、住種種々威儀。而此一切智々道者一味といひ、六度經に契經如乳、調伏如酪、對法如生蘇、般若如熟蘇、總持門如醍醐といひ、樓閣經に眞言是諸佛之母、成佛種子、若無眞言終不能成無上正覺。また三藏經盡從陀羅尼所出など云るが如く、以前の經説を盡く陋めをととして、一切智々と云事を首張して、その一切智々を得れば以前の經々に説ることどもは心易く出來る趣にいひとり、其一切智々を得んとするには、眞言でなければゑられずと遂に重きを眞言に歸したものでござる。其眞言といふが彼毘盧遮那阿字でそれがいはゆる光明眞言でござる。

但し阿含經以下楞伽經などの事は、龍樹が大論に其噂が有けれども、此三部の密經を鍔塔から得たるといふ説がとんとなひから、夫を考へると此眞言秘密の經どもはいづれ龍樹より後の偽作に

ちがひはないでござる。なほ下に委く申でござる。

これが諸教の起つた分ちでござるが、皆もとその上々といへ上げたもので、そうせねば我立る道の張がたき故でござる。さてかく後に出たるほど先に有經どものうわさを云てをしつける事故、それによつて何經が前に成て何經が後に起きたと云ことが明にしれるでござる。さすれば是はあのれと化の皮を顯すやうなものでござる。なほ此餘に佛經はあびたしく有ども、外はみな上に論辨したる經どものいはゞ枝葉で、みなそれへわりつけらるゝこと故、こまかに云には及ばぬこととござる。なんとかくの如く諸の佛經一部一冊も釋迦の眞の物なく、悉く後人の僞り作つたにちがひないがこりやどうだ。さ此わけじやによつて諸經何れもかくそくとして説があはず、それも阿含經には有を宗とし、般若經には空を宗とし、法華經には諸法實相と云たよりのことは、機縁によつて法の説だともいつて免しておかふけれども、實事の上でけしからぬちがひが有て、譬ば釋迦の事を云に二十五出家三十成道と有と思へば、七歳出家三十成道といつたり、十九出家とあつたりして甚だまぎらはしくござる。然を後世の僧どもがそれを皆彼の迦葉が法藏結集の時に、阿難が覺へていたことを多羅葉の葉に記して有たものじやと説ふとするから、こゝで説が一つばもあはいでこじつけ理屈をまはり遠く云て、功者に取なしたものでござる。其故和漢の僧どもの佛經をちう釋したもの

たゞ感ひぐさとなるばかりで、一向みるに足らぬものが多ひでござる。實に佛經の眞面目を見出さうと思ふ人は、佛經の中の名目ぐらいを古人の説にたよりて覺へたならば、本文ばかりでよむがよいでござる。これは儒書もさうでござる。餘り古人の注解は頼みにせぬこととござる。

さて其大乘の部と云經々の中に、何がいつち大事とよむものじやと云に法華經でござる。是はからやまとの名僧智識とよばれたる僧ども、何宗によらずこの經を尊び、其註解も屋の棟を穿つばかりにたんと有て、今の俗でもをろかなぢ、ばゝに至までも、第一の經じやと覺へこんである程の事なれども、實は同じ大乘と云うちにも外の經々よりは一向に味ひも何もなく、たゞめつぽふかいなる大ばなしばかりで其わけをば説ず、この經一部八卷二十八品たゞかさばかりがこんな有れども、其要とする所はたゞ方便品ばかりと見へるでござる。然らば其方便品がいかなる甚深微妙の説があるかと思へば、唯一乘法、無二亦無三と云語であるばかりで、外はなんにも珍しい事はない。只有一乘法、無二亦無三とは、たゞ一乗の法有て二もなく又三もなしと云事じやが、その二もなく又三もなしと云はこのわけじやと云、その尊きいはれも何にもないからさつぱりつまらん。譬ば今一寸手紙を書ふが、其文言に外に比類のなき旨い物で結構じやと書たならば、其比類なき味ひものは是とさす物が一つなければならんわざなれど、この方便ほんの語に其如く、唯一乘法、無二亦無三と云からは、

其指す物がなければならんが、何も無いはどうだ、なんとつまらぬじやないか、またいひ出して胸のわるい程たわけなことは世中の語に、これを持つ人と誘ふ人との罪むくひを記して、持此經一人、功德百千万世、不瘡癩、口氣不臭、舌常無病、口亦無病、齒不垢黑、亦不黃不疎、不脱落、唇不下垂、鼻不匾、亦不曲、面色不黑、亦不隘長、亦不窻曲とある。この意は此經を信心する人の功德は千年万年すぎてもおしとならず、口もくさくもなく、常に舌や口に病なく、齒に垢もつかず、黒くもならず、黄色にもならず、すきもせず、かけもせず、唇さがらず、鼻もまがりかまらず、顔の色も黒からず、せまく長いといふこともなく、すぼくまがりもせぬといふことでもござる。またこれを誘ふ人の罪むくひを記して、其人命終入阿鼻獄、從地獄出、當墮畜生。有野干、身體疥癩、亦無一目、爲諸童子之所打擲、受諸苦痛、或時致死、更受蟒身、其形長大五百由旬、宛轉腹行、爲諸小蟲之所啖食、晝夜受苦、無有休息。若得爲人、諸根闇鈍、盲聾背偃、口氣常臭、鬼魅所著、貧窮下賤、爲人所使、多病無所依怙、身常臭處、淫欲熾盛、不擇禽獸、誘此經、故獲罪、如是とあるでござる。この意は此經をそしめる人は死ときに阿鼻地獄に入、その地獄より出てまた畜生におちて、あるひは野干となり、からだはなまらずかたいを煩ひ、目といへばたつた一つ、またもろくの子どもの爲にうちた、かれて色々の苦しみを受け、又あるときは死だ上にまた死、さらに蛇の身となりて

其形の長さこと四百里、其からだでそこらをはひあるまで小蟲どもの爲に吸くらはれ、夜ひる苦しみを受る事隙なく、また萬一人に生るれば諸々の事にくらくにぶく、眼がつぶれ耳が聞へず、背もかままり口がくさく、またいろく物の物に取つかれ、貧乏にして賤しく人につかはる。又病たゆる事なくよるべき親類もなく、身は常に臭くして又淫欲がさかりて鳥獸に限らずつるむ。それと云ふに常に此經を誘しれるが故に、罪を得ることかくの如くじやといふでござる。こりや人情の好み悪くむ所であったことで、愚ともおろかな爺婆を導くには是でも用をなすかもしれんけれども、右にも申す通りに或は持ち、或は誘つても、かやうの報をあたへるそのものは何者じや。これが罰利生を見すると云ふ其ものがなけりやならんが、肝心の其ものがないから薬を取落したる能書見たやうなもので、一向に何にもならぬものでござる。なんとこんな物をいつかどの人間が、鬚くひそらしてたどぶだくと誦でいるが、さう只たらくとばかり云っているからあぢもしれぬが、誠によんでみるとあいそもこそも盡はて、こんな物じやがこりやどうだ、片腹痛いばかりでなく下腹さへ引ばることでもござる。こんな物をよんで験や報ひが有ならば、しんぐい／＼やさせもせ、といふ歌でも験が有、薬のかはりに其能書をのんでも病が治る。こりや悪口じやなひ、實に法華經一部八卷廿八品、みな能書ばかりでかんじんの丸薬がありやせんもの、もし腹の立人があらば、其丸薬を出して見せると云つもありで

ござる。後世の日蓮など、云愚僧はこりや云にもたらぬが、漢土でも天台の智者大師など、いはれる僧が、きつくこの法華經を尊信して、大造くはしき委註解などを書いて世に弘め、法華經の親玉のやうに人にははれ、この智者がいつたことには頭も上らぬやうに人は思っているが、此方の目で見ると智者ではなくて愚者大師とも云べきものでござる。なんと此通りにつたないものを昔からとりはやしたはどうじやと云に、一體の經を偽書とせしらず、みな釋迦の眞のものと思つている故、夫四十餘年未顯眞實、又無二亦無三など、云語に目がくらんでとんとほれこみ、また此法華經の内の二十五品目を普門品といふ、これは一冊別にすり出して世間のひとが觀音經と覺へているがこれとござる、夫故始めに妙法蓮華經普門品第二十五とある。これが又一向に拙きもので、もと在家の愚夫愚婦を勧め誘ふ爲にしたるものと見へて、將諸商人ツ齋持重寶ツ。若有女人ツ求男ツ求女ツといふの類ひ、すべて出家沙門の事でないでござる。またこの品の偈に、咒詛諸毒藥、所欲害身者、念彼觀音力、還著於本人とある。この意はのろいごとで毒藥を以て人間の身を損はんと祈れども、其祈らるゝ人觀音を念ずれば却て其わざはいが祈る人につきて、祈る人の身をそこなふといふことだが、こりや佛道の意とは大きにたがつている。なんと大慈大悲と名づけられたる觀音がかよのむねきなことをしてよからうか。漢國の蘇東坡といふ人が戯れにこゝを評して、もし此語の如くならば菩薩の大慈悲といふも

のではなひ、是によつて下の一句、還著於本人といふを改て、兩家總て沒事となしたならば眞の事じやと云つたことじやが尤もなこととござる。又臨刑ツ欲壽終ツ、念彼觀音力、刀刃斷々壞といふ言が此所に有によりて、是を不斷念じていれば首の座に直りたる時太刀が折るとかいつて、已に法華經宗の開祖日蓮なども龍ノ口の難とか云て、そんな事が有たなど、其宗旨の輩の作つた日蓮が傳などに書て有が、是は實にないこととみなのちの法華宗どもの主馬の判官盛久が古事を盗んでいつたもので、夫故日蓮が自書にないでござる。其上主馬の判官盛久の古事も謠などにも有て古く云たことじやが、こりやまたからの古事を盗んで云つたことで、其古事の本は佛祖統記といふ物に見へてあるが、是も元は偽つたことに違ひない。すべて佛者と云ものは今に尻のはげる嘘をついて、夫をひんむくられても恥とも思はずしやあゝとしてゐる。こりやみな釋迦の遺風と見へるでござる。又あかしい事は日蓮宗の者は大かたは觀音などを拜まず、まれにも拜む者があると、かの米の中へ砂の交つてある様なものじやといふたとへなどをして謗法じやなど、云て、甚しきは身の毛をよだて騒ぐけれども、其觀音は法華經第一のきゝものだが、どふした事かこりや此普門品一冊別にして觀音經と云て有ゆへ、別のものじやと思ふと見ゆるでござる。夫でも日蓮の傳に念彼觀音力、刀刃段々壞の事實を附會したがあかしいでござる。

一體もろくの大乗の經にある所の佛菩薩と云ふものは、みな其經々を僞作したる者どもものよいかげんにこしらへた物で、實もつて有たものはない。皆かのからの古き文書に假に人名を作りて、亡是公とか、烏石先生など云ふことをかくと同じ事のごさる。夫れ故どこから出てどうした物と云事もなければ、行く先も居所も知ず、虚空と同たいじやの、極樂と云處にいるのと云て紛らしたも、實に有た人とはとんと名のわけまでがよつくわかる。毘盧遮那、阿彌陀、觀世音、不動、普賢、文珠といったやうな名は借で、其おんづまりを穿鑿しぬくと、人の心の異名に成わけのごさる。譬へば毘盧遮那といふを翻譯すれば大日といふ事に成り、日輪の普く世界を照すやうなる心徳をいつたものといふこと。又觀世音といふはよく世音を觀じて、これも至らぬくまなく人をめぐむといふ心徳をいつたもの。不動といふも心を氣海丹田におとしおさめて、物に惑はぬ處をいつたもののごさる。俗に持扱ふ不動經は尤僞經の中の僞經ながら、人のよく知てあるもの故一寸讀ませう。其文に、是大明王有_二大威力_一。大悲德故、現_二青黑_一形大定德故、坐_二金剛石_一。大智慧故、現_二大火焰_一、執_二大智劍_一、害_二貪瞋癡_一、持_二三昧索_一、縛_二難_一伏者、無_二相法身_一、虛空同_レ體、無_二其住處_一、但住_二衆生心想中_一と有ます、とんとちがひ有まい。すべて佛菩薩といふ者は皆こんなもののごさる。をなじ佛經の中でも誠に有た人の名は、これとはとんとわけがちがつている。譬へば釋迦第一の弟子たる摩訶迦葉といふ名を翻譯す

れば大龜氏といふことになる。大龜氏は大龜氏と書く、是は迦葉が生れたる時龜が出たといふてかやうに名をつけたもの。また舍利弗と云弟子の名も翻譯すれば鷲の子と云ことになる。是は其母が眼の様子が鷲のやうであつた故、このあだ名をつけたといふことのごさる。夫が生れた子じやによりて鷲の子と云ふ意で舍利弗とつけたもののごさる。此外も阿難、目連、羅睺羅などを始め、皆かやうのわけが有て名をつけたもののごさる。これらは甚だ質樸なることでもしるいでごさる。是に引かへかの阿彌陀、毘盧遮那、觀音、勢至、普賢などの類ひ、後人作つた名どもはみな空理をいつたものでござかしくしやらくさいでござる。

さて其佛菩薩は後世に僞り作つたもので、實はないものだといはるゝが、その無ひものなる觀音や不動に祈つて驗の有はこりやどうじやと。此やうに云人もあるふが是は旨く古の道を心得て、神祇のわけを能辨へると何の事もなくさげることじやが、一寸いふなら此大地の間には、彼萬葉の歌にも、海原のほとりにもおきにも神集り、うしはきいますもろくの大神等と有の意で、海原ばかりではなく神と人との差別があるゆへ、人の目にこそは見へねども、何國もく神のいまさぬ所なく、其神々には尊さも賤さも善さも悪しきもくさくある事で、そのいやしき神などのよりそつて驗をあらはし、或は易の十翼などの遊魂變をなすといつた通に、人のこん魄杯のよりつきてしるしを

顯すのでござる。夫は云々いちこ草鞋大王 鮑魚神これらのことを考て此道理をしるがよいでござる。さて今日
はよき序じやによつて阿彌陀經のことを一寸申ませうが、まづ阿彌陀と云ものは右申す通り元來つ
くりもので、實はなき物なる事これは論なし。それ故後世の坊主でも如在のなひ輩は、うはべこそ
は有物のやうに云ふらして物を貰ふの種としたけれども、實の所へ行てはすでに一向宗の有がたが
る書物にさへ、阿彌陀とは我心の異名也など、いつてある。扱この阿彌陀經といふ物も大乘の經
の部で、其拙きものなることは今さら云まではなけれども、よつほど下手な作者と見へて、こればか
りの中で直に尻口のあはぬことがある。夫はまづ西方十萬億土とやらに極樂といふ結構な世界有
て、阿彌陀がそこにいるといふ事は是は誰もしつたる通り、さてそこへ生れたる人々が身にみな光明
が有り、其外何もかも光りかゞやきて日月の光をからんでも常に闇くないと云が、極樂のしるして
是は諸の經論に云てある通りのこととござる。然るにその本文にちう夜六時といつたり、また清旦
と云事などが有。なんと此通りにちう夜と云ことがあつたり、また清旦と云ことがあつては、やつば
り此日月の御恵みをうける所で、此大地の内と見へるが、楮はこの大地球の内にはそんな國はたへて
なし。此間より申通り此大地の内では御國程結こうなる國はないから、しひて戯れにいはゞ御國な
どが極樂とも云べき國でござる。西方十萬億土、天竺の西へくと、そのつまりへ行ば、大地は丸きも

の故東へ出て、則御國へ來るでござる。さすれば御國などでもありません。但し是らの尻口合ぬのは
此經の作者がつひ心づかなんたものでござる。又其文の中に、彼國常有ハニ種々奇妙雜色之鳥白鶴孔雀
鳥云々、ちうや六時出ニ和雅音一と云ことのあるが、一たい佛經の説では鳥獸に生れるのは、みな作た
罪のむくひでさう生れるといふ事じやといひ、又極樂へ生れる者はすべて善根をつんだ者でなくて
は生れぬといひながら、そこに鳥がいるはどうか、罪深ひ者も極樂へ生れるかといはれた時に困か
ら、これをばよく尻を結で、勿レ謂是衆鳥、皆是阿彌陀佛、欲ムト令下法音宣流、變化所作トと云つたでござ
る。この意は其極樂世界に鳥がいるとて、夫を罪報故に生れたのじやと思はんがよい。是はみな阿彌
陀如來の其佛法の音を流布しようが爲に變化分身して、鳥の形を現し啼しめたものじやと云ふ意で
ござる。かやうの事どもは何もこの方が云はずともよいことではあるなれども、是は序じやによつて
申すのでござる。扱釋迦はぬれ衣被くとやら、實は一向しらぬことどもを後世の人の爲に大きに無
實の難を受てあることとござる。又すべての佛書を偽り作つたる輩も、さして長久に傳へよふとい
ふ意もなく、いはゞ愚婦愚夫のさとしぐさ、一時の戯れ同様にしたるものだろふと思ふ様な物もあ
る。すでにこの阿彌陀經などがさうでござる。さやうの拙なくおろかなるもの、世に弘まり、夫れ
を頂にをしささげて、かの草鞋大王の類ひなる、有名無實名あつて實なきものを拜して、甚だしきは

身をさへに捨て媚諂ひ、おのが國おのが身の本たる有名有實、名あり實ある我が皇神等をあろそかになし奉ると云ふは、是もみな云ひもてゆけば禍津神どもの心とは云ひながら、いきどほろしく歎かわしきこととござる。佛法の傳來は釋迦が初で、其正統は迦葉、迦葉が次ぎは阿難、阿難が次が商那和修尊者、是より段々相承傳來して、其十三祖と仰ぐ處はかの大論などを作つて大いに佛法を再興したる龍樹法師でござる。これは悉多の入滅後七百年ともいひ、六百年ともまた五百年ともあつて、何れをそれと極め難いよふなれども、どうか六百年と云ふが本とらしい事とござる。元來南天竺の人で幼少の時よりきつく利發な生れで覺へもよく、天竺にある程の學び事はみな學び盡したと云ふ程の事で、尤もかの幻術なども殊の外に鍛鍊して、一體が豪傑ものと見へるでござる。或時に其契友三人と相談し、世間の神妙なる業は我が輩すべて達していることじやが、なんと此上は何を樂しみとしよふと思ふに、人間の樂みといふは色欲がこの上もなひ樂みじやによつて、何れ隱身の術を學び、これを身の樂みとしよふと相談致し、其術を知た者の所へ行きどふを習ひたいといった所に、其人の思ふには此四人は才智拔群なる者であるけれども、我が所へきてかしまるのは己れ此術を知っている故のことじや。さすれば此法を受けなば直におれをば捨て仕まうだらふから、これは授けぬがよいと了簡して、青い丸薬を一つづつを四人の者にくれて、この薬を水でときて眼にぬる

ときは形ちが見へぬと教へる所に、龍樹は其香ひをかいでしかも多味な薬をこれ／＼であらふといつたれば、其師匠どのもあきれて、其法を授たと云事とござる。そこで龍樹はかの三人と右の薬を用ひて國王の奥へ忍び入て、思がまゝに色欲をやつたる事、數月の間で有た所が、其奥の女どもが段々懷妊する。こゝで國王も大きに膽をつぶして、是は鬼魅といつて妖物のわざか、又は隱身の術を行ふ者のしわざか、ばげ物ならば跡はあるまい、隱身の術ならば人の足跡があらうとて砂をしきておいたる處が、果して四人の足跡があるから、すはと云まゝに勤番の者を入れて、人は見へぬけれどもむせうに劔をぬいて振まわさせたる所が、とんと三人は斬殺したが中に龍樹はりはつ者故、王の側へ／＼と身をよせていた故、其切つける者共王の側へは餘り近きりかけぬ。こゝに於て龍樹もこり／＼して誓を立て、もし此難を遁たならば出家と成り色慾を止めようと心願して、とう／＼此場を逃れて、さて迦葉より十二代目の迦毘摩羅尊者といふが弟子となつて佛道に入り、此横着者で大才士がひつくりかへりてさうなつたること故、何の事もなく九十日ばかりのうちに三藏に通じ、剩へ世にあらゆることは學び盡したと云ふの意で自ら一切智人といつておつたと云事とござる。さてさき程論辨いたしたる經どもを取しらべて夫にそへてよむべきもの、かの大論を始め色々の論をも著して、もろ／＼佛經を世に傳へたるは實には彼奴がわざとござる。それ故諸宗に於ても此者をば釋

迦について尊む事のごさる。

さて佛法の漢土へ渡たる年が、是も又僧どもの方では一年も先の事にしようと思つて、彼是と偽り申したる説どもが有なれども、實は前漢の代にまづ民間へ渡つて有たると見へて、漢武故事又魏略の西戎傳などにその證據が見へるのごさる。其のち後漢の明帝と云王の七年に、丈六の金人が頂に日の光を佩びて、殿庭を飛行すると明帝が夢にもみふたのごさる。そこでもろくの臣下に問たる所が誰も答ふる者のなかつた中に傳毅といふ者進み出で、西方に聖人あり、其名を佛と申すと承つてをるが夫で有ふと答たる處が、明帝が、然らば其佛法を求めよとて中郎將蔡愔、秦景、博士王遵、など云輩十八人を天竺へつかはして、佛道を尋ねさしたる年が八年の事のごさる。さてかの蔡愔等は中天竺へ行き、摩騰、法蘭と云二人の僧に出あうて、夫を伴ひ佛像と經論とを得て白馬につけて明帝が十年に歸來たのごさる。扱此明帝が金人をゆめに見たることは、すなはち例の幻術で此後も度々有たことのごさる。この前より彼國の民間に渡つてある所の佛者共が、其道の世に廣く用へられぬ事を歎きて、この術を行ふたものと見へるのごさる。又かの傳毅が此度のさまを考へたる所が、彼奴民間にある處の佛法を竊に信じこの術をも學び、明帝に夢を見せて疑ひを起させ、それに答へてなほ公に其法を弘めんとの心でなしたる事かと思はるのごさる。群臣誰もしらず答へぬ其中に、お

のれ抽ぬきだて西方に聖人あり其名を佛といふなど、云へるさま、己が國の聖人と云ふものより外にはよき人もなきものと、ひたすらに思つていたる其頃のから人の口つきとも覺へぬことのごさる。

扱其あくる年に始めて白馬寺といふ寺を建たのごさる。これが漢土にて寺を立たる始めて、則かの佛像經論を白馬につけ來たれと云ふ縁を以て白馬寺とつけた事と見へるのごさる。此年かの摩騰がはじめて四十二章經といふを翻譯致したのごさる。これが經論を漢土にて譯したる初めてのごさる。然れどもこの時分は彼法もうい／＼しく未だ經文全部を譯する程のこともなく、たゞ大部の中から要文をぬきやくせし計りのことのごさる。

さて又漢土には元から道士と云者が有て、是は此漢の代といふよりは二代先の周の代といつた時に、李耳といふ人の作つたといふ老子と云書を本として道を學び無爲恬澹といふを專と致して勞することのないように、身をやしなひ神氣を練て長壽することを勤るの道のごさる。其神氣を練て心を治る所は、かの佛法よりは外道としたる天竺の婆羅門の仙人どもがする處と大きに似よつたもののごさる。尤幻術をも行ふもののごさる。からで仙人と云は此道士のかうろへたるもの、仙術といふはこの道士どものする仙術のことのごさる。これはこのまへかんの武帝といつた王などのきつく好んだもので、其のち大きに世にひろがり、この明帝が時分などは殊更に多かつたのごさる。所へ佛

法が渡りてからは新奇なことには目も心も移世の中ゆへ、大に道士どものけんびきとなりさうであつた故、道士の輩六百九十人が上表して明帝が十四年の正月一日佛道とまさり劣を試みたいと願たる處が、然らばと云事で其月の十五日にかの白馬寺に於て、東の壇には道士の經論や符録と云ふいはゆる御符などのことを書たものをあき、また西の壇には佛法の經論佛像舍利などをあき、さてさう方へ火をかけたる所が道士方のはみな焼て灰じんとなり、夫のみならず日頃の験を得たる所の咒術もしるしなく火に入、履^ハ水の術もどふしたる事か此時は夫も出來ず、又佛法の方の物は一つとして焼なんだでござる。こゝに於て道士どもはあをくなる。佛びいきの者は其悦云ばかりなく、かの摩騰は身を踊らして空に飛上り種々の神變を現はし、かの法蘭は大梵音と云を發して佛法の徳をのべて、天より花をふらしなどしたと申す事でござる。此時男女千五百六十人一時に出家に成たと云事で、その通りにこれをゆるし、其中に道士の佛法に歸依して、僧となつたる者も六百二十人有でござる。それを氣にして、道士貫叔才といふ者などは死んだ程の事でござる。雒陽に於て寺を十ヶ所たて、是より致して佛法の勢がますます熾^{ホニハヤクアリ}に有たでござる。此事を漢土やまとの僧どもがことごとく云立つる事なれども、これも例の幻術で、もとより佛法の幻術は此間も申通り釋迦の大きに工夫して、甚だ手あつくしておいたる事故釋迦の靈は幸な事でござる。かの幻術の本國たる天竺の

婆羅門どもですら、みな佛法の幻術にかなはず勢ひをとられたる程の事なるものを、漢土の道士どもの生々なる幻術がどうして佛法の妖術とちから競べのなるべきことではないのでござる。かの大論に、諸の外道の神通は不過^キ七日^ニ佛及び諸弟子の神通は久近ある事なしと有は此こととござる。道士どもはかようなわけをしらず螳螂の立車に向ふ譬の如く、怒^{イカリ}に事を仕出して大きな目にあつたこととござる。扱^キ此後世々に弘つて天竺へ僧をやつて經論をとりよせ、又彼處より持て來る、彼は宋元の代あたりまで千三四百年の間には、佛の經論が大がい残なく漢土へ渡つてきたでござる。其間に國の害と成たる事指をかゝむるに暇なく、既に是が爲に國をうしなひ身を亡したる王ども、少からんでござる。こゝに於て世の儒者なども其弊を考へて、其時の王を諫めなど致しても用ひず、あまつさへ其諫たる者を罪に行ひなどして、代々の王どもが誠に惑ひはてたものでござる。其諫めて罪におとされたる儒者の論でも、韓退之が佛骨の表、または原道論、あるひは歐陽永叔が本論など云ものは甚だ尤なる事どもとござる。一たい釋迦佛法と云ふものは御國らはなほ更のこと、漢土でも實は餘計なものでござる。なぜと云に、佛法の經論どもに云てある道理は、かの飛行自在の神通ばなし、方便の術を除て見ると正味のこる所は只天堂、地獄、輪廻、治心の四條ばかり残るでござる。是らの事は自分の國の古書に小澤山にいつてある。夫はまづ天堂梵天の事は、天帝、皇天、后

帝など、いつて古書にあくまで其理が見へ、又地獄の説は、かの黄泉の古説で其理がみへ、又因果應報輪廻の事も、漢土では古くより申たる事で、其一つ二つをいはゞ、左傳に、禍福は門なしたゞ人の招く所といひ、又は易の文にも、積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃ありといひ、また臣其君を弑し、子其父を弑するはこれ一朝一夕のことにあらず、よつて來るの者漸なりといひ、又遊魂變をなすなど、ある類ひが、大きに輪廻また因果應報と同じ理でござる。また治心と云て心を治め壽をやしなう道も、老莊の書或は淮南子など云もの、または醫書でも素問靈樞など云物にもあくまで其理が見へるでござる。さすれば佛法の經論と云物は、すべて漢土でも餘計なものでござる。しかるを己が國の書どもに委く其理のみへたる事で、心づかず無せうに佛法を弘め、其國世々の害となつたるのみか、つひ御國までに及んでかくまでかぶれるようになった事でござる。但し其うち儒者と云者はいつも申通り心のせまき者で、己がよむ儒書に直に佛説と同じ意の語があるの、事實があるのといふと、大きに腹をたつけれども、はらを立ても背を立ても、こりやどうも仕方がなひ、その腹をたつよふなせまひ心で書をよむ故、眼もくらみかよふの語を見おとして佛語ばかりをやかましくいつているけれども、此方が佛者だ一番に儒者をやりこめて仕まわれるでござる。また儒者の中にも稀々こゝらのことの氣のついたものも、多き中にはありましたらうけれども、夫らも又儒

書を佛説と同じ意の語があると云ては都合のわるいこと、見へて、諺に云ふ猫の糞を隠すやうに、臭ひ物に蓋をするやうにしらぬ顔して居ると見えるでござる。

出定笑語四

平田先生講説 門人等筆記

御國へ佛法の始めて渡りましたる年が、皇孫邇々杵命より三十三代の天皇命欽明天皇の十三年十月十三日に、いはゆる三韓のその一つ百濟國の聖明と申する王の許より、怒唎斯致契と申す者を使と致して、釋迦の銅像經論幡蓋その外種々の佛具を貢に献つて、さて表を上つて申上るには、是法於諸法中、最爲殊勝、難解難入。周公孔子尙不能知。此法能生無量無邊福德果報。乃至成辨無上菩提。譬如人懷隨意寶、逐所須用、盡依情。此妙寶亦復然。祈願依情無所乏。且夫遠自天竺、爰泊三韓、依教奉持。無不尊敬。由是百濟王臣明、謹遣陪臣怒唎斯致契、奉傳帝國、流通畿内。果佛所記我法東流、と申上たてござる。そこで天皇聞已、歡喜踊躍、詔使者云、朕從昔來、未嘗得聞如是微妙之法。然朕不自決、乃歷問群臣、曰、西蕃獻佛相貌端嚴、全未會看。可禮以不とある如く、天皇命の御心にもいかんとも御決かねあそばして、もろくのまへつきみたち、則群臣へいかにしよふと御尋あそばしたる所が、其時の大臣蘇我稻目の申さるゝには、西蕃の諸國これに禮奉す、しかる

にわが御國のみ是を禮奉せぬといふは、ひがごとござりませふ。殊に百濟王は世々御國の御厚恩をうけて、忠義を盡しあることではあり、もし妖神を貢るならば御國へ忠義など、は申されぬが、中々左様の事では有まいによつて、是は御あんどなく御受なさるが宜しうござると奏上られたてござる。時に大連物部尾與、おなじく中臣鎌子の奏されますは、我が天皇命の天下を治め遊ばすには、恒に天津神、國津神、八百萬の神を祭らせ給ふべきが御典でござりまする。然る所を、今改めて蕃神を御まつりなされたら、恐らくは元より祭り奉る天津神、國津神の御怒りもありませうと申し上られたてござる。

此大臣大連と申は古へ臣の姓の人を大臣になされ、連の姓の人をば大連になされてちやうど今世の左右の大臣のやうな方でござる。また蕃神とは佛をさしていふ言で、蕃とは我國の外の國の事で、みやつこぐにと訓す。さすれば陋しき外國の神と申義でござる。

こゝに於て天皇にも御すなほに御聞入遊ばして、如何にも是は卿等が言す所尤なる事じや、去りながら聖明王がせつかく貢つたるものを捨ることもなるまい、返されもすまいによりて、誰ぞこの佛神につかへよふと思ふ者に遣はそうと詔がありて、かの蘇我稻目大臣に其像を下されたてござる。そこで稻目大臣は跪て受け大に悦び、右の釋迦の像を我が家へ安置いたし、向原と云ふ所に有たるお

のが宅を寺にしつらいて、かの像をすゑて禮拜致した事でござる。これが御國に於て寺院のはじめ、佛像をおくことの始でござる。其寺の名を則ち向原寺と申すでござる。處が國中大きに疫病がはやりて多くは治療もとどかず、たま／＼治る者も久く煩ふて愈ることでござる。此にをいて物部尾與大連、また中臣鎌子の連の言上せらるは、國にかやうの禍のある事は臣等が申上たる義を御用ひなく蘇我の稻目へ下され、彼が心のまゝに祭らせ給へる故なり。さればかの佛像を御捨なされて後の福を御祈りあそばすが宜しいと申し上られたる所に、天皇命にも其奏しのまゝに／＼聞召し、有司の人らに仰付られ、かの稻目が建たる寺を御焼せ遊ばし、かの佛體をば難波の堀江へ御流棄なされたでござる。このとき風雲もなくして忽ち大殿に火災があつたと云ことでござる。

さてこの天皇命の十三年に佛像經論の參渡まゐりたつたるは表立てのこと、實は是より三十年以前、則ち繼體天皇の十六年に漢土の梁の武帝が普通三年の事で、即ち彼國より司馬達等と云者が渡り參つて、大和國高市郡坂田原と申す處に草堂をむすび、佛體を安置いたしてあつたる所が、誰一人信ずる者なく、異域の神を祭るとて皆あざめ鄙いひしめたと云ふ説があるでござる。

さて物部尾與大連と中臣鎌子の連との諫めを御用ひあつて、一とまづかやうに佛像經論及び其寺をさへに焼失ひは致したなれども、この頃は禍神どものいかにあらびに荒びたることか。とかくに奇

しき事なども多く、天皇命にも清く佛を捨はて給ふ事もなく、此翌る年の五月やがて河内國茅渟ちゆう海より上つたる樟木くすのぎを以て、佛像二つを御造らせ遊したる程のことでござる。天皇のかく遊ばす程の事故、そのみちを好める輩はなほ媚諂ひ、佛に仕へたる事はこりや申すまでもないでござる。

偕この天皇命の御次が敏達天皇でござる。此御代の六年と云年にも百濟國より經論及び律師等六人を貢つたでござる。その後も度々佛具を三韓よりかはる／＼奉り、其時の大臣すなはち蘇我稻目が子馬子きつく佛法を好で、寺をたて佛像を愛し類にこれを弘める所が、其十三年二月又百濟國より彌勒の石像を獻じ奉たる處が、そが馬子その二つの佛像を請ひ奉て、かの司馬達等を四方に遣はし僧を尋たる處が播磨國に於て高麗より來れる僧の先還俗していたる惠便ゑべんと云ふ僧を見つけ出して、馬子大臣がこれを師として又佛道を學び、司馬達等が女の島と云を夫が弟子にして善信尼となづく、ほかに尼二三人をこしらへ其尼どもを崇敬して、佛殿をたて、うつゝをぬかしての大たはけで、大會と云て佛事お設け彼髮長どもに飯をくはせし時に、司馬達等が其齋食さいじきの中から佛舍利お得てそれを馬子に獻じたる所が、馬子が夫を鐵の上にあき、てつのつちにて打て見る所が碎けん。そこで又水の中に入れて見たる所が、浮うかしと思へば浮、沈しづかしと思へば沈で、心のまゝになる。そこで馬子がますます信心を起して修行怠らず。またむまこが石川の宅といふに佛殿お作り佛法がこ

れより大におこりましたでござる。然れども舍利を得たる始末、また水に浮沈、心のまゝで有たなどがみな坊主どもの例の手妻でやつたことで、それを馬子がまにうけたのでござる。またもしくはむまこが僧どもと示合せてかゝることの不例があつて舍利を得たると披露して、佛法を弘めんとて致たるが此二つに出ぬこととござる。かやうのうきたることを舍人親王の公然と朝廷の御正史に御記しなされたる御きが知ぬでござる。扱其翌年二月むまこが煩ひ、夫を卜者に占はしたる處が、これは父稻目がときに祭つたる佛神のたゞりじやと云こととござる。そこで其占を天皇に申上たる所が、詔にうらなひの言に隨て祭れと仰出されたでござる。そこで馬子のかの石像を禮拜し壽命延る事を祈るでござる。さて是が又馬子が虚病をして卜者にいひつけ、佛の祟りといはして天皇に奏し、それまでは内々密に祭つた所を御ゆるしお受て世にはれて祭らんとての奸術と見へるでござる。なぜなれば稻目が祭つたる佛も、物部尾與大連と中臣鎌子の連との奏上によつて御捨あそばされたる事でござる。稻目は其佛をいかう大切に祭た人じやに依て、彌々佛が祟るならば稻目が子の馬子に祟るべきわけは無て、此時は尾與の子の守屋の大連となつておられたる事故、夫に祟るべき理でござる。然るに其たゝるべき人には何の氣もなく、たゝる間敷恩ある稻目が子のむまこにたゝる事は相違なことでござる。こゝお以てむまこが虚病をして卜者と馴合かやうにいはいはして、それで佛を

祭らんと云しわざに相違ない事が現はれるでござる。とかく佛者どもの佛法を弘めんとて致したるたくみごとには、かやうの事どもがこの後の世にもいくらもあつた事でござる。さて馬子にかく詔の有て佛を御祭らせあそばすと、直に國中いみじく疫病流行して人草の死する者おびたゞしく有でござる。こゝに於て物部大連守屋と中臣連勝海かつみの申上らるゝには、是は臣等が諫を御用ひなく佛法を流布し給ふゆへ、先の天皇より今の御代まで疫疾かやうに流行いたして、國民も絶んと致す程の事、これひとへに蘇我大臣が佛法を世に弘むる故と存じますると申上られたる所が、天皇にも至極尤成ことじや、佛法をたやさしめよと仰せられたでござる。こゝにをいて守屋大連は其身自ら彼寺へ行れて、胡床こしどに腰うちかけ指圖しつゝ、其塔をくづしたをし、佛像佛具と共に残らず火を放つて是をやき、焼のこりたる佛像は難波の堀江に捨てしまつたでござる。此時雲なくして風吹雨ふりつゞくと有ますが、これこそいかにも佛法を弘めんとする禍神の心と見へるでござる。守屋大連はそれにもいづかなたじろかず、雨衣を被て馬子宿禰又馬子に従て佛法に醉狂居あひたふれてる輩を責訶り、また佐伯造御室と云を遣して馬子が尊信する尼どもを呼びよせ、むまこが泣くおもかまはず其三衣を奪て海石榴市と云所に於て尻眉おしもとでうち、いはゆるたゞきはらいと云ふべき刑に行はれたでござる。扱もこゝちよき事でござる。さて是はすべて日本紀によつて申のじやが此つゞきの文に、天王與大連卒患

於瘡^ツ云々。又發^レ瘡死者充^ニ盈^リ於國。其患^レ瘡者言^フ、身如^ニ被^レ燒被^レ打被^レ摧^カ、啼泣^{シテ}而死。老少^モ竊^ニ相^ニ謂^フ曰、是燒^ル佛像^ノ之罪かと有^マすが、とかく日本紀の撰者舍人親王は佛最^ニ眞^ニなるおかたで、いづこも^レ佛の事をばおもくろしく尊^キさまに記し、其御心ゆへ佛を尊信する者をばとかく其惡^キきわざもよきやうに書とり、又佛を賤^メたるおぼとかくあしさまに書取られた物でござる。實はかやう有^マまじきことでござる。すでに此文などが其一つでござる。物部守屋大連の天皇へ申上られ、さて右の通りに佛像を燒^コぼたしたれ事故、其た^リりて先づ天皇と大連が此病をうけられたるさまに記さしたものでござる。よしや是が佛の祟^リにも致せ、正史を記すの例と申はかやうのものではないでござる。其わけは序の時に云ませう。さて此時の病が麻疹の始りでござる。夫は鈴屋の翁の玉勝間に委^キ考へが有^マす。さて^レ禍神のしわざと申すものはすべもすべなきものでござる。このまへにも佛法の祟^リと見ゆる事があり^レ見へます、夫が則禍神の心でござる。其謂^ヲを今即^ニこくに申たればとて、初て御聞の方々故た^ニち心得とらる^レことではないでござる。依て是は追々と委^ク分ります。もし實に是が佛の崇^レじやと申ならば、ゆるしをかれぬわけでござる。なぜと申に佛は慈悲を以て專^ニ致^スべきはづの教でござる。おのれさやうの教を立ておきながら、己お信^ゼぬ者有^トも、なぜかの慈眼視衆生とかいふ如く、慈悲の眼を以て衆生を見ぬのじや、夫もしばらく實は神の例を以て免

しても遣はさうが、この時すでに敵對いたしたる者ばかりでなく、外の者をもなぜ惱ましたぞ、なぜ苦めたぞ。夫のみならず此病を長く久しく今の世にまではやして、なぜあまたの人をとり殺すぞ。かように執念深く祟^ヲをなして、夫でも出世間の佛の心か、慈眼を以て衆生をみるのか。いや甚^ク以^テ不埒なる汝がしはざ、いや不届なる其方が振舞^ジやが、なんと是にも云わけ有^カと此やうに難じたならばなんとする。釋迦もし靈ある者ならば結跏趺座をもして畏^マり、天上天下と指しおる其手おついて恐れ入り、螺髮の頭を搔ながらこそ^レ逃^テゆかねばならぬ。こりや此時のはやり病は決して釋迦の祟^トではない。實は此時禍津日神の御荒びなされたる時で禍神共をり能夫に出^クはせ狂事をなしたるが、佛びいきの云草になつたばかりのこととござる。扱^テ是年六月馬子が又々奏するには、臣が疾ひ重^ク今に至り愈^ズ、是は三寶の力を蒙^ラらでは治しがたしと奏し上^テたでござる。こゝに於て馬子に詔あそばすには、然ば汝獨^リ佛法を行ひ餘人には決してならぬと御言^ガありて、彼三人の尼を馬子に還し下^サされたでござる。そこで馬子が大きに歎^キ三人の尼も頂禮して又新に佛塔を營^ミいたはりかしてきて、又守屋の功がむだになつたでござる。さてこの秋八月天皇は御病ひおもりあそばして崩御あそばしたでござる。この敏達天皇の御次が橘之豐日命と申上^テ、これは後に贈^リ奉^タる漢様の御名お用明天皇と申上^ルでござる。此天皇御位に御つき遊^シて其翌年四月に磐余河上と云ふ處に於て新

嘗をきこしめして、此日御病氣にあらせられて宮に御歸り遊し、詔曰、朕思_ニ欲歸_ニ三寶、卿等宜く評議いたせと仰出されたてござる。其時も守屋大連と中臣勝海連とが例の如く御諫めて申上られたてござる。此事も日本紀に記し、物部守屋大連與_ニ中臣勝海連_ニ違_レ詔、議曰、何背_ニ國神_ニ敬_ニ他神_ニ也。由來不_レ識_ニ如_レ斯事_ニ。蘇我馬子大臣曰、可_ニ隨_レ詔奉_レ助、詎生_ニ異計_ニ云々。引_ニ豐國法師_ニ名_ニ所_ニ入_ニ於_ニ内裡_ニ。物部守屋大連睨大怒とあるてござる。是もやつぱり守屋大連と勝海連とを惡様にかき、馬子を善様に書取られたる文でござる。なぜと云に此文に、物部守屋中臣勝海みことのりに違ふと書れた成ども此時のことは天皇の御心にも佛を御拜み遊ばす事、己命の御心にも御決しかね遊されたによつて、卿等議_レ之と仰られたてござる。それ故この二人の臣等は、有のまゝに眞の所を申上られたてござる。これを違_レ詔と記されたる事甚だ心得難き事てござる。天皇の大御言に違ふことは違勅の罪といつて、いとも畏くあるまじく反逆の罪にひとしき事てござる。其文例をもつて守屋と勝海とを記され、馬子がことをば可_レ隨_レ詔、詎生_ニ異計_ニなど、これは馬子かやうに申したではあらふなれども、その文勢を見るに舍人親王の其下心に守屋を憎み、馬子を最負されたること明かに見ゆるてござる。借かやうに誠のことと奏せらる守屋が眞實のその忠心も更にかひなく、つき賢木_{カキ}いづの御靈と天地にい照とほらす、其天日神の王孫たる天皇命の大宮へ穢らはしくも法師を入れさせ給へること、此時が始めてご

ざる。そもく世の中にありとある禍神あしき事の元は、盡く夜見國より起り來る妙なる謂が有て、すでに其禍事あしきことの元を司どる神禍と云ふがある。其神は夜見の穢によつて出きたること、また眞の道の趣は清きが上にもいさぎよく致さでは、正しき神の御心になわすふさわしう思召さぬ事て、さやうの時しも惡神日神は其穢きことを惡み給ふが故に、をひ出して世に惡事も出きるを、禍神どもはそれに所得てくさく_レの狂事を行ふ妙なるいはれがあるてござる。扱鈴屋翁の道の大意を讀出られたる玉鉾百首第一に、つきさかきいづの御靈と天地に、いてりとほらす日の大御神と云歌も記されたは、此わけをふくんで致された事てござる。其よつくのわけは大平と云人がそれを註したる玉鉾百首解にも云てあるてござる。たゞしこゝらが道の元の妙なるいはれで、中々以て今の中にまふし取らるゝやうな事ではないから、初人の方や漢意_{カキ}の除_{カキ}こらぬ衆などは、さてく篤胤はまはり遠な事おまふすぞなど、思はるゝもあらふかてござる。此方も元覺への有たことで更に無理とは存じません。たゞ其内に篤胤が外の事を論辨いたすにはいはゆる攻撃で、手ひどい所とくらべ考へて故こそあらふ。いでや其鈴のやの翁が眞の道おといた書どもを見て、實にさうかさうでないかの所を尋よふ、詮議しようとも思はれさへ致せば、夫で拙者がかやうにまうした志は立ててござる。さて眞の道また世中の善事は清淨成ことより起る謂れの是有、神代よりの趣きを思召馬

子ならば考へも致さず、後法師の輩は人の眞の道の本を失ひ、其もふす事としては死たる先のことのみ云たり、彼きたなく穢はしきかも禍神あしきことの元たる夜見國の事のみ申し、人の死骸などを朝よひに取扱ひ、人のきらひ捨たる物などを拾ひ著て、人の餘物穢物をもらひたべて、其上汚はしき末國の人にして人にあらざるけがれ者の其教を承續ある汚なき奴も、清めに清むべき朝廷へ召入れられました、扱これより致して佛法ます／＼昌んになり、世々の天皇命にも恐れながらかの無常の心とか、來世を恐るゝとかいへる女々しき大御心の御出來遊ばされて、ついには神の御國の本の御手風もろそかに相成り、この間も云ひたる大國主神の八尋矛を御ゆづり遊ばしたるいはれを御忘れ遊ばし、古への武くいさましかりし大御心もどこへやら、其中に漢様のわるさかしらも相交り、それに乗じて御臣たる人々の勢ひ盛んになつて、朝廷の仰せもどき奉つるのみか、射向ひ奉るやからも中頃には多かつたでござる。これみな元は佛の道と漢意とが致したる事でござる。これは只今つか／＼申すまではなく、歴史の學といつて御代々の記録をよめば、明らかに知れることござる。實にかやうに心を止めて、御代々の御記をよむ時は、覺へず聲を上げて歎息し、其書をつくへに置き慨然といたして憤りを發する事が時々あるでござる。

さて此時つひに守屋大連の深き慮も相通ぜず、彼法師を内裡へ入れたること故、守屋大連は眼を怒

らして大に怒ると日本紀にあります。是は尤なる事でござる。其時に押坂部史毛ぐそと云人あはてかけ來りて、密に守屋大連へ申すは、今群臣卿をはかり將斷路と申たでござる。さすれば馬子が輩守屋らの歸路を待ぶせて、己が輩の邪魔をはらはんとするの巧と見ゆるでござる。こゝに於て守屋大連は其別業阿都と申所へ退かれて、人數を集められた所が、中臣勝海連も衆をあつめて守屋を助けんとせられたるうちに、馬子方なる迹見赤擗と云者ひそかに伺ひよりて、勝海連を殺したとあるでござる。にくい奴でござる。さてかの法師を召いたなれども天皇の御病轉盛におなりあそばして、既に今わにおなりなされたでござる。時にかの司馬達等が子の鞍部多須奈と云者の申上るには、天王の御爲に私出家いたし佛道を修しませうと云て、丈六の佛像及び寺を御造らしあそばしたでござる。とふ／＼これにもしるしなくて、天皇は、おかくれあそばしたでござる。これが四月のこととござる。さすればこの時の佛わざ何のしるしもありやせんでござる。

其あくる月の五月に物部の守屋の大連は馬子が輩と中惡き事故、其家に籠り居て、ひそかに用明天皇の御弟にまします穴穂部の皇子を御位に即んとの心で、其催しが有たと申すこととござる。是を察して蘇我馬子ら炊屋姫命の御言といひ立て兵を遣して、其穴穂部の皇子を殺し奉り、又宅部皇子と申上るは穴穂部の皇子と御中よかつたとして、これをも弑し奉たでござる。是も舍人親王は誅すと

書れたは甚だしきことござる。これしきの字義をしられぬ事ではないけれども、こりやみな馬子をかばふてのこゝろと見へるでござる。鈴屋の翁も「まつぶさにいかでしらましいにしへを日本御紀の世になかりせば」と詠れたる通り、日本書紀は實に結構なる御書物ではあるなれども、かやうにきたなき事のみ多いによつて、見るごとに胸おわるくいたすことござる。

さてこの七月蘇我馬子大臣勸諸皇子與群臣謀滅物部守屋大連と有ます、是はよう書れました。實に馬子が何れをもそのかしたにはちがひ有まいでござる。さて守屋の籠居らるゝ所へおしよせた所、守屋は手勢を率て戦ひ自ら榎の上に入り雨の降如く矢をはなつ、其軍強く盛にして馬子がたの軍勢怯弱恐怖三廻却還とあるが、守屋大連の氣丈な大和魂ではかうありそなものでござる。その時厩戸皇子もむまこがたで、この軍中にいられて白膠木を以て、かの佛經にいはゆる四天王の像を作りて頂髪に安置なされ、馬子もろともに、もし守屋に打勝たならば、四天王の寺を建よふと誓をたてす、みゆくうちに、又かのにくきやつかな、迹見赤檮が矢をはなつて、守屋大連を榎木から射落したでござる。これによつて守屋の軍がついに敗れ、其子たち眷屬も或は殺され、或は隠れて姓を改め名をかへて、有處をかくしたる人もあるでござる。

こゝに又難波に有所の守屋の本宅をば、則ち其臣に捕鳥部萬と云人が、百人ばかりの勢で守りおつた

る處が、大連の討死致されたるよしを聞て、そこをひき山中へかくれいたる所が、朝廷評議有て萬は逆心をいだいて隠れたること見ゆれば、その親族を滅すがよひと評定があつたでござる、時に萬は垢つき弊たる衣裳をきて、やせ憔悴たるさまをいたして、弓を持劔を帶して獨自ら出来る所が數百の衛士を遣はされてとり圍むと、萬はたかむらの中に隠れて繩を竹に繋ぎ夫を引動し、吾隠れたる處を感はしたでござる。衛士等大に計られ、その竹の動くをみて萬はこゝにおると云て馳よると、萬は箭お放て一矢もむだ矢はせなんだと云事でござる。衛士らが夫を恐て近づかず、こゝに於て萬は弓を脇に挟んで山に向ひ走り去ると、衛士らは河を隔て散々に追射る所が、さらにあたらなんだといふことござる。其中に一人の衛士がとく馳て萬の先にまはり、川の側に待伏せして射たる箭が萬の膝に中つたる所が、萬は其矢をぬき、なほ弓を張矢を放ち地に伏て大によばわりて申には、萬は爲天王楯將効其勇而不推問翻致逼迫於此窮可共語者來願聞殺虜之際と申たとあります、此語の意を考へ見るに、この人守屋大連の忠心を心として、同く朝廷の御楯となりて守り仕へ奉んと思へる所を、かへさまに夫をば夫と問ひましたまはず、かように責玉ふことよといへる意とさこへるでござる。扱是を以ても守屋大連の深き慮り、又其その心も推はからるゝでござる。さて軍兵らはなほ嚴く射立たる處が、萬はその飛くる箭おはらひのけいて十六箭を飛し三十餘人を殺

し、さてこれまでと思へるか、持たる劍で其弓を切り、又其劍を折まげて川の中へ投ずて、別にさしたる小さき刀もつて自身と頸を刺して死だてござる。依てその死骸を八段に斬り、これを八ヶ國へ散じさらすべき由を仰付られ、其通りにせんとする所が、雷が鳴る氷が降る大あれで、其上不測成事が萬が飼ておいたる白犬があつたる所が、ふしたりころげたりして萬が屍の側で吠廻り、遂に萬が頸を噛へて古き家へ持て行き并おいて其側に横に伏て、とんと飢死で仕まつたてござる。かよの事を思いつけても哀なる事てござる。さて是は河内での事故、其國の國司より此犬のあやしきはざを朝廷へ奏上たる處が、哀に思召し官符といつて御書付を下され、御稱めなされ、此犬世所^ヒ希聞^ニ也、可^レ觀^ニ於^レ後^ニ須^レ使^テ萬族作^テ墓^ヲ而^テ葬^スと仰出されたてござる是。によつて萬が族が有^カ眞香邑^ト云處に墓を雙立て、萬と犬とを葬たと有てござる。これは御尤なる事てござる。さて用明天皇の御次が泊瀬部若雀命と申上て、後の御贈り參らせたる漢風の名を崇峻天皇と申上るてござる。この御代に至てはなほ憚ることなく馬子が輩佛法を弘め、かつ其我ま、無道なる事いふばかりなく、天皇命にも殊の外いきどおり思召さるゝことの多かつたことみへて、或時猪を御前へ獻じたる者が有。その節天皇命、猪を御指さしあそばして、何れの時かこの猪のくびをきる如く朕がねたしと思ふ處の人を斬ましと仰られて、密々には其催しも有たてござる。此時に大伴八手子といふ妃がありて、これが天皇の御

寵愛の衰へたる事を御恨申上てあつたる所が、この御言を承て馬子に云告たてござる。馬子が是を聞て大きに驚き計をめぐらし、群臣をも詐つて東國の調を進らすよしおひひ、東漢直駒と云者も其人にしたて天皇お弑し奉たてござる。この駒は後に馬子が女と密通してそれがあらわれて、馬子が爲に立木にしばらくつけられ責殺されたてござる。馬といふ畜生の名をついて馬子といふ畜生の名のついた者の命を請て、かように漢様の畜生の行を致したる故、神のおん罰でがな有ませう。さて馬子はかく天皇お弑し奉たる程の事てござる。それに厩戸皇子も座すにかく惡逆お致したなれども、誰一人夫お制し彼が罪お咎むる者だにないと云は、實に馬子の勢に吞はてたものと見へるてござる。此時は彼俗にも、よう人の知てある聖德太子今申た皇子の事てござる。重く朝廷にも御用ひなされ、世にも殊なる御器量のましますことに取さた致し、これは實に取さたばかりでなく餘程のおん方でましましながら、これをおん捨置遊されたること恐れながら甚以て御不埒てござる。この砌は外にもねくしき皇子がたもなく、尤この時推古天皇いまだ御位に御つきあそばさんで入らせられたなれども、これは御女儀にましまして、御位に御つき遊したるも下よりをしつけ奉たる事てござる。かやうの事に御心のつきあそばさんも、こりや申奉るべき筋ではなく、さしづめ馬子のたぶれ奴おは、厩戸皇子の罰し給はねばならぬ事てござる。聖德太子は用明天皇の御子で、其母を穴穗

部間人皇女と申し、聖德太子を懷妊なされてむまやどに至らせられて御生みなされたに依て、むまやどの皇子とは申でござる。又上宮と云宮に住居成れたに仍て、上宮の太子とも申す。記書に、生而能言、有_リ聖智、及_シ壯_一聞_一二十人訴_一能辨_一知未然_一とあり。是故其名を稱へて上宮_一豐聰耳命と申すでござる。さて昔漢國の周と云た世に晋の靈公と云たる諸候の大夫といつて、第一の臣に趙盾と云が在て、それが眷屬の者が其君靈公をころしたる時に、趙盾これを打捨さしおいたる處が、其時の記録をしるす役の董狐と云もの其事を記して、趙盾弑_ス其君_一と書たでござる。甚だ正しき書かた故、萬世に至るまで、史記を記す者の則と致すこととござる。孔子もこのしるしざまをきつくほめておいたでござる。これは左傳の宣公二年の_一でんにあり此例を以て記さうならば、むまやど皇子弑_ス天皇_一と書たればとて一句もない程のこととござる。こりやどうして捨をかれた事じやと申すに、聖德太子は馬子がむこで夫に佛法を弘んと成る、御心より、馬子と彼是示し合されたる事の有故でござる。こりやあらそつてもあらそはれぬ事實の上によくわかつてゐる。然るを佛法ずきの人々舍人親王を始めまいらせ、古へより此皇子をほめたて、聖德とさへ申さたし、すでにけしからぬ古き物ながら聖德太子傳曆など申て、此皇子の御ことを彼是と取つくるひ偽りに偽りも重ねて記したるものが有、世人も大かたはよき人と心得てゐる。すでに漢學者でも太宰彌右衛門と云たる腐儒者などは、辨道書と云書を著し、

それに云ことは、本朝に於て厩戸の功は制作の聖とも云べき人にて候、聖德太子と諡せられたるも虚名にあらず候など、いひましたが、是は聖德太子は佛法ばかりでなく、漢風のことおも御始めなされたる故、儒者の腐心にそれをうれしく思つての事じやが、其から風を御用ひなされたる故漢風に天皇を弑し奉つたのでござる。太宰などは今時の漢學者流がさしんの如く恐る、儒者じやが、さて儒者など、云ふものは眞の道には不案内のものでござる。聖德など、申は恐れながらあたためぬこととござる。但しかん國の聖人といはる、輩も、孔子を除くの外は大方は上べを取かさつたのみにて、實は主殺などが多いからこゝらと思へば、少々計りはあたらぬでもないかてござる。鈴屋翁の歌に「小菅よし蘇我の馬子は天地の、そこひのうらにあまる罪人」又「馬こらが草むすかばね得てしがも、きりてはふりて恥みせましお」又「くなたふれ馬こがつみもきためずて、さかしら人のせしは何わざ」と詠れたはこゝらの事實を讀れたのでござる。さかしら人のせしは何わざとは、其代に賢き人のしたまへるは何わざにて有しぞと云の心で、天皇を弑し奉れる馬こが大罪を罰せずして、賢人がましき顔おしてかしこげに行へるしわざは、何事を行へるぞなど深く答たる心でござる。實にかやうのいみじき大事をばさし置き、聊もとがめ給はぬ程のこと故、外にいか程の功が有ても、善き行ひがありてもそれは取にたらざることとござる。この厩戸皇子十七ヶ條憲法と云制を

御定めなされたが、多くは漢土様の胸わろきことばかりでうるさくうつとしいが、其第三條に、承^スレ詔^ヲ心^ヲ謹^ム、君^ハ則^チ天之^ハ、臣^ハ則^チ地^ノ之^ハ、天^ハ覆^ヒ地^ヲ載^ス云々。欲^シ覆^シ天^ヲ則^チ致^ス壞^ル耳^{云々}とか、れましたが、是は皆漢土籍^ガの書^ガ拔^キ詞^ヲじやが、それにしても何と馬子が天皇を弑し奉つたを、この御憲法の趣では捨をかるべきことでない。又第六條に見^レ惡^キ必^ズ匡^ムとも御書成れたが、なぜに馬子がかゝる大逆を犯したるおみて御匡^シ成^レれ、牛^ノ裂^キがはりつけにでも御かけなさらなんだ。是ら都て漢様の顔ばかり賢人がましく書記した計で立派なので、山^ノ賣^ノの能^キ書^キみたやうな事どもでござる。唐の書物が皆かうでござる。又第二條に篤^ク敬^シ三^ノ寶^ヲ。三^ノ寶^者佛^ノ法^ノ僧^ノ也。則^チ四^ノ生^ノ之^ノ終^ノ歸^ス、萬^ノ國^ノ之^ノ極^ノ宗^也。何^レ世^ノ何^レ人^ノ非^レ貴^ニ此^ノ法^ニ云々。不^レ歸^セ三^ノ寶^ニ何^ヲ以^テ置^レ枉^ト、佛^ノ法^ノの事^ハばか^クよ^クにことごとくしく御書成れたなれども、神の御事^ハば聊^モ宜^ハず、餘^リといへば御不^埒でござる。なぜと云に、吾^ノ大^ノ御^ノ國^ニで天皇は日神の御正統に座し、現^人神^トとさへ申奉て其天下を、ん治め遊す。御政事の本は神事が本で彼順徳天皇の御抄にも先神事後他事とさへをん記し遊されたる程の事で、此ことが闕ては天照大御神のおん定めにしたがひ、決して相濟ざる深きおん謂の有事なるに、聖徳太子^ハ己^ノ命^ハは其御子孫と産しながら其大御神のおん定めお御搔亂なされて、聊も神のおん事をば十七ヶ條にも宣はぬは何とをん不^埒であるまいか。察し奉つる所このをん憎しみにもましましたればこそをんかくれなされて後、蘇我入鹿がために其をん子孫ものこらず亡ぼされて

おんしまひなされたでござる。日本紀よまる、衆はよくこゝらおば取捨して、惑はぬやうに致さるゝが宜しひでござる、漢國の朱子と云儒者が申たる言に、佛法渡て以來善惡の名たがいおはるといひましたが、實にこれは尤な事で、すでに馬子と守屋の上でも知ます。守屋は眞の道をたどり遠き慮りさへに明なる大忠臣、馬子は天地の間にも入れ難き程の大罪人なるを、かへつて守屋を逆臣といひ馬子をよきさまに取なし、又俗にも釋迦に提婆太子に守屋など、申は、これ朱子の申たる通り善と惡と名を取かへたのでござる。かやう申すとどうか彼の川柳の句に、「神道者守屋重々理だといひ」と云つたるやうにも思はれませうが、これは實に神道者流の腹をたゝるゝのが尤でござる。しかし國によりては釋迦に提婆、守屋に太子と守屋を實事にいひ來る所々も有でござる。さて播磨國赤穂郡坂越^ノの浦と云處に大酒の社といふがある。これは守屋大連の社でたゞ一神を祭つてあるといふが、是はかの萬などを相殿に祭るべきこと、また心ある人は序もあらばさん詣致すべきこととでござる。

さて馬子が崇峻天皇を弑奉り、豊御食炊屋比賣命を御位につけ奉たでござる。是は欽明天皇の御女子^ノで、元來は敏達天皇の皇后に御立あそばされて有たでござる。この天皇命後におくり奉つたる漢風の御名が、推古天皇と申すでござる。此御代の元年と去年に厩戸の皇子を皇太子に御立あそばし、

又攝政を御かねなされ、萬の政を御執なされ、此年かの天王寺を御建立なされたてござる。是より致して日々月々に寺を立て、僧をふやし佛を作り此御代に漢土へ度々御使を遣はされたるも、皆佛法の爲になされたる事てござる。廐戸皇子世にましましたる間は、朝廷の御わざも十に七八は佛法の事てござる。それはよむにもうるさい程のことてござる。

さて聖徳太子は此をん代二十九年二月五日に薨じられたてござる。扱此太子のことを記したる物は夥しく有が、みな佛ずきの輩や坊主の作つたるもの故、其中實のこともあるかもしれぬけれども、見渡したる所が七八分程は明にしれたる偽りゆへ、其餘の二三分もどうもうたがわしくてならんでござる。太子傳曆と云てざつと六百年以前からの書がある。是は古きもの故、すでに瑤檢校が群書類從にもおさめてある。それと釋の虎關が元亨釋書とである。其一つ二つおいは、聖徳太子は漢土南嶽の衡山寺と云寺の慧思といふ僧の再來して、御國へ生れさしたのじやと云ふことで、或時人に語つて仰せらるゝは、此國へ傳はつたる法華經は文字が落てある、我がむかし彼國に居たる時よんだる經は其字の有たると云て、其經をとりて遣されし所に、間違つて外の本をよこしたる故ではないとて、或時元來建おかれたる夢殿と云へ籠つて、戸おさして七日が間出られなんだる所に、八日めに漢土で持れたる處の經を取りかへられたと云ことお、國史にある處の眞の事おも取交

て記してあるが、其の慧思といふ僧は世に南嶽大師と云高名なる僧で、佛祖統記などお始め、その外も支那の名僧の傳を書たる物お見れば、彼國の陳と云た代の大建九年に壽が六十三で身まかつたとある。この大建九年は我國では敏達天皇の六年にあたりて、聖徳太子の五歳にならるゝ時の事じやがこりやどふだ。なんと未だ死もせぬ五年まへに御國へ生れ來よふはづはあらふか。又推古天皇の二十一年十二月一日に、片岡と云所へ太子の御出なされし處に、飢者が道の邊にをるゆへ其名お問れたる所に答へず。そこで召物を給はり又たべものをも給はりて歌お御讀なされ、其あくる日人を遣はされて御見せなされしに、かの飢者は既に死んであるから、そこへ墓をつきてこれを埋め、其後數日經て近習の人お召れて、かの飢者は凡人とは見へぬと仰られて、其墓の所を見せに遣されたる所が、飢者がひそかに其塚をぬけて出で、かの賜物の衣服たゝんでそこへ置き、いづちへかまいたてござる。そこで其賜はつたる衣を御取寄なされて、常の如く服れたと云事で、夫お見て時の人お聖之知ハトハツレ聖其實なる哉と云て、彌太子をかしん惶奉たと云事が日本紀に有。此ことを又かの禪家の方で尊ぶ處の達磨が御國へきたのじやと云て、元亨釋書などには開卷第一に此ことお記して有が、なる程この飢人はへんな奴ではあるけれども、是は南嶽大師を附會したるよりは、もつと甚しい時代のさうひな事で、夫はかの達磨が死んだる年は漢國梁の武帝が大同元年のことて、御國では安閑天皇

二年にあたる。此推古天皇の二十一年聖德太子の飢人にあはれたる年より七十九年先のことで、佛
ずきな輩のうちと云ものは大方こんなもので、どふかと云ふと實は文盲で、年代などをばさしもし
らんでいるからのもので、また中には得心していつ、やつていたと思はる、僧などもある。元亨釋書
を作つたる虎關などがそれで、何にしても人を惑はす者は坊主でござる。下はこれに准へて聖德太子
のことは日本紀に依て見るがよし。夫も用心せぬとかの佛びいきの説に惑ふこととてござる。篤胤が思
ふにこの飢者はやはり佛法の混れ者で、わざと飢たるまねや、しんだまねなどして、あやし
ませんとした事とてござる。佛者にはそんな奴らがいくらもある。またはかねて太子の御はからいな
されて人にあやしませ佛法に信をおこさせんとて、かやうの事を太子がおさせなされたもしれぬで
ござる。又ケ様の悪さかしらをなされかねぬ御方でござる。さうなけりや天皇の太子と座す御身に
て、かゝる非人同前のけがれ者に物宜ふ事さへ有に、御衣お賜はり剩さへに夫を又召返されて、常
の如く御身に御つけあそばしたも何とやらおかしな事とてござる。

さて蘇我馬子はこの御代の三十四年五月八日に死んでござる。其しんだ事を記された所に、性有_ニ
武略亦辨才_一以恭_ニ敬_三寶_一と記しおくれましたが、ちとほめすぎのやうでござる。なぜといふに武
略が有たならば、守屋にあんなにきたなく負ぬはずのこととてござる。さて其跡の大臣お其子蝦夷と

云、これはえぞと云と同じ事。此奴ら代々ろくな名はつかぬ。是も馬子が威勢あうけついで甚だの
我儘有、亦其子入鹿は父にまざる、我儘無道でこれも同じく大臣でござる。さて推古天皇の御次が
舒明天皇、其御次が皇極天皇でござる。此御代の二年十一月に聖德太子の御子、山背の大兄王と申
すが班鳩の宮と云に坐したるを、其御一族を追ひ奉り悉く入鹿が爲に滅されさしたてござる。是
は入鹿がかしくも天日嗣を奪ひ奉らんと云心が有によりて、此大兄の王は聖德太子の御威光が移
つて、世の人みな慕ひ奉る御方故、扱は天日嗣を此王のしろしめすやうになりゆかん事を忌み、
己が反逆の邪魔になるによつて其邪魔を掃はんとて、大兄の王の宅を襲ふて攻たる所が、奴三成と
云者數十人の舍人と、もに出で拒み戦ひ、入鹿が大將土師沙婆連_を射ころしたるによつて、入鹿が
兵士恐れて引退いたでござる。この時大兄の王は馬骨を取集めて御寢所の下におかれ、其妃又御兄
弟方御子等をひきひて逃れ出さしつて、膽駒山_{と云處に}御隠れなされたでござる。巨勢の徳大の臣
等は火お放つて班鳩の宮を焼た所が、灰の中に骨を見て大兄の王の死れたと思つて圍みを解き退
いたでござる。馬骨を人骨と見たがへると云は、是もいかひべらぼうでござる。此に於て大兄王の
家族を連さしつて、飲食も無くして逃れ出たる處が文屋の君と云人が勸て、かよう／＼にして戦ひ給
はゞ必ず入鹿に勝給はんと、二度までも計を申たなれども、大兄王御兄弟は御聽入なく、いかにも卿

の申す通りに致したならば、必定勝は致すべきなれども一身の故を以て人を煩はし、又後の世に於て大兄王の爲にわが父母をうしなへりといはれしは、大丈夫の心にあらずと申されて、御兄弟の男女二十三人諸ともに御首をくゝりておわられたこととござる。偕々佛者と云はつに了簡をつけたものでござる。なんとかように弱くめ、しくいくじもなひ死さまお成れて、是でも佛法では大丈夫か、朱子は佛法渡つてより善惡の名差ひあるといつたが、かやうの女々しく拙い事では、善惡ばかりでなく強弱の名までが取かはつていと云ものじゃ。なぜと云に戦へば必ず勝べき頼ありながら、手をつかねてくびれ死なざるよふな怯つたせきしわざお、どふしてくますら男など、は思ひもよらず、實以てますら男大丈夫といふ者は、かやうの事に當つては一足も退かず、たとへ討死するとても續くだけ切てく切まくり、さてかなはぬ時は守屋大連の臣捕鳥部とらぶの萬がやうに、自ら頭をかき切か腹かさばいて死るのが、こりや眞の大丈夫とますら雄心とも、大和魂ともいふものでござる。然るを書紀に、此御首縊りの所に五色の幡藍はたきぬがらが大空に照光り、種々の音楽が聞へたなど、有けれども、いづも申す通り書紀の撰者舍人親王は佛ずきの御方ゆへ、かゝるたは事のかぎりをつたへ、まことにうけなされてしなされたのでござる。實は取に足ぬみだり言でござる。實にさやうな事が有ならば、それはいかなる禍神の心でか世の人を惑はしたのでござる。とにもかくにも佛法などの如き邪

道の渡來を行はるゝも、鈴屋の大人のいはれたる如く禍神等の心によることゆへ、其ふしぎらしきことどものあるもみな禍神のなし行ふこととござる。さてこのかゝる不測らしき事があつても、それだけの何一つ佛法が御國の爲になつた事とはありません。こゝを考へて禍神のしわざなる事を悟るがよいでござる。然るを後の太子傳曆などには、この縊り死れた事をよくいひなし、書紀の妄説につけまねをして、或は聖德太子は觀世音の化身とやらで、此國は無佛世界じやによつて佛法を弘めん爲とて生れ出られたること故、元より其御子孫を遣さんの御心なく、又山背大兄王を始二十三人の人々が皆權者とやらで、假に來られたる事故このとき何れも仙天女となつて、雲に乗り西に向ひ飛去られたなど、いつてあるでござる。これも朱子は、釋氏よく遁辭して其説を窮局し難しといつたが實に其通りに違ひないでござる。然れどもさうはいはさぬ、なぜと云ふに、實に觀音の化身にましますならば御妻をも持ち給はず、御子などもなければよいに、又かやうに云ふとかの黃門とかいふ、男根なしと思はれうかとの御心でなど云ふべけれども、其わけならばかやうにたんと御生みなさらんでも宜かりそやなものじゃが、子計りたんと生み置れてかゝる憂目を見せ給へること、其本地たる觀音がなんとひがわざでは有るまいか。又太子は未然といつてよく先の事を三世までも鑑みさとりしつたとのことで、既に日本紀にも知未然とあるが、なぜそれ程の悟り深き御心で

座ましながら、彼御心を合せ給へる蘇我の馬子らが爲に、三世までもなく直に其子等の害せられ給ふ事の、未然を察しおかれなんだかおかしなことでござる。又崇峻天皇の馬子に弑せられ給へるは前生の報ひで、それゆへ太子の帝へ劔難の御相ある事を、未然に申上られたなど云ことも太子傳にはあれども、然らばその御子等の首しめて死給ふべき相をばなせしおかれなんだぞ。扱々佛ずきの者の取つくりひたる説と云ふものは、見るにも聞くにも胸わるくなる事ばかり。これを思へば聖徳太子も後世の佛者どもの附會な説に、大きにぬれ衣被いでいらるゝ事とござる。斯佛法渡りて天皇にまで大變のあるに随つて見れば、なんと御國亂妨の開祖といふは佛法ではありませんか。皇大御國は天地の開けてより、彼の大御代まで何千年ともなく年へ來ぬる内に、天皇に禍事のあらせられたることもなく、又臣連等始め下さまの者に右申たる如く、大罪人のありし事此古へには俗に云ごとく、藥にしたいくてもありや致さん。かく拙者が實録の上で細々申すことを御聞の上、猶以てかの佛道を信仰致さるゝ方は、馬子らが天地不容の悪行を不届とは思はず、下ごゝろには各尤と思ひ居らるゝと云ても否とはいはれまひ。夫に近頃俗の人の云事をきくに、佛道もなけりやならん、此國は古へは人が荒くてならなんだ故に、佛道と云ふ事を弘めさしたものだ坏とこしやくらしく云が、其事實は何に記しあるといつたならば、ひしとさし詰まりぎうの聲も出はすまい。しかしかく

は云ふ物の、彼道も數百年人々の意に染み付きていること故に、今急に直さうとしても直るものでもないから、王國の神の有難いことを思ひ奉り、かの外道をば薄紙をへぐ如くにも改めらるゝやうに致たいものでござる。唐人すら過勿^{ナレ}憚^ル改^ムと云つたる如く、悪き事きくならば早く改むるが賢人とも、發明ともまたいふものでござる。また惡説と思ひつゝも直さゝるは、畜生にも劣ると云者でござる。

さて蘇我の入鹿はかように我反逆の差支に成そうな方をば亡しつゝ、天皇のまねをし奉り帶劍を致して御前に出なんと既に大事に及ばんとするに至りて、中の大兄の皇子と中臣の鎌子の連と、密々に種々と示合されて、此皇極天皇の四年六月十二日に天皇の御前に於て入鹿を誅せられたでござる。此中の大兄王と申は舒明天皇の御子に坐て、後に天日嗣^{しろしめし}を知^{あのみことむらまけの}看^みて天命開別天皇と申し、後の漢風の御諡を天智天皇と申上るは即ち此中の大兄の王のこととござる。中臣鎌子の連と云は後に藤原の朝臣の姓を賜り、又大織冠^{たじしきのかむり}と云位を賜り大臣となり、藤原一統の大祖にて世にも人々よく知ておる大織冠鎌足公と申は是でござる。

扱入鹿が父蝦夷^{あみし}をも誅せられたる所が、蝦夷其誅せらるゝ時に臨で、天皇の御代々の御紀并に御國記、又やんごとなき御寶どもを此奴大臣のことゆへ預つていたるを、ことごとく火をつけてすでに

みな焼失はんとしたる時に、船史ふねのふりよさか惠尺と云人があはてふせいで、其國記をば取出し中の大兄王に奉たてござる。是はいみじき大功で、もし此時この人のかく働かずば、神代の傳へも御代々々の寶物も、みな蝦夷が爲に焼失はるゝ所で有たてござる。さすれば古の御典をよむ人は、この惠尺の恩頼をもなほざりに思ふべき事ではないでござる。なんと蘇我馬子このかた三代、實に天地の間に入難きほどの大逆無道の奴どもではないか。

さて此後の御代を重ね年經るに従て、いやますく世に弘まり、御國のつひへ世の害となつたる事は、筆にもかゝれず、口にほうばり中々以て二十日三十日にいひ盡さるゝことではなひから、夫はさしをき、當時は八宗と相なり、夫にかの一向日蓮の二宗を加へて十宗とわかれある所以をあらく申ませう。まづ御國で宗旨の始は三論宗が始めてござる。是はかの龍樹菩薩が著したる大論、即ち大智度論と同く、天竺の提婆と云ふ僧の著したる百論ともうすをおもと學んで、義を立たるもので、推古天王の三十三年正月に、慧灌と云僧が高麗國より渡りまいりて傳へた事でござる。河内國井上寺が其本でござる。此次に傳はつたるが唯識と申でござる。是は天竺の世親と申す僧の立たる筋を以て宗旨と致し、彼唐の代の玄奘法師が天竺へ參たる砌に傳へ來て、夫が御國へ傳はつたるは、孝德天皇白雉四年に、河内國丹比郡の僧道昭と云者、かの國へ渡り、玄奘三藏に謁してこれをうけま

いつたてござる。此道昭と云僧が、始て火葬をはじめたてござる。奈良右京の禪院が此僧の建立でござる。

此次に渡たるが律宗でござる。是は佛法の戒律とまうすいしめのことを宗旨と致して、聖武天皇の天平勝寶六年正月に、漢國より鑑真と云僧が渡りて傳へたる宗旨で、奈良の招提寺がこの僧の建立でござる。

此次に渡たるが華嚴宗でござる。是はかの華嚴經の趣を宗旨として立たるものでござる。孝謙天皇の御代河内國の僧慈訓と云者、漢土へわたり、彼國の賢首國師といふに出逢て、是をうけてかへつたてござる。南都東大寺大安寺などがこの宗旨でござる。

此次に渡たるが天台宗で、これは法花經の權實と云ことを宗旨として、其説を龍樹の大論に本づけ、漢國陳といつた時分の僧で智顛といふが、始て天台と云を開きたるゆへ天台大師ともいひ、またその宗を天台宗と云もこの故でござる。桓武天皇の延暦二十一年に近江の國滋賀郡の僧最澄といふ者彼國へ渡り、天台山國清寺へ至りて智者より七代目の道邃法師と云に従ひ、其外時の名高き僧に従ひ眞言の秘密をもこれをうけ、其道の奥意おきはめ其歸りし年が延暦二十四年でござる。さて比叡山の延暦寺はこの僧の開基でござる。後に諡號を下され傳教大師と云は是でござる。

此次に渡つたるが密宗でござる。是はいはゆる真言宗で、これは其元の起るところは元來釋迦の秘密として普く傳へず、金剛手菩薩と云ふに授けし處が、金剛手是を南天竺の地の鐵塔に藏めておいたるに、神これを守り數百年ありし所が、世に傳はるべき時至り、龍樹菩薩芥子の實を擲つけて其戸ざしを開きたれば、今の三部の密經が出たと申す。然れどもこれは偽り託し云事で、實は此間中申す通り三部の經は龍樹以後の人僞作いたしたるものに相違ないでござる。さて是を天竺の不空三藏と云が持て漢へわたりしは、唐の玄宗が開元七年の事でござる。さて皇國へ渡りしはこのまへ傳教も受け來りしなれども、其委しき事は讃岐國多度郡の僧空海と云が、桓武天皇の延暦二十三年、すなはち唐の徳宗貞元二十年に彼國へ渡りて、不空大廣智三藏の高弟慧果阿闍梨といふに出逢てのこらず學び盡し、平城天皇の大同元年にかへつて來たでござる。此僧大に密宗を弘め高野山を開基いたし、仁明天皇の承和二年に入滅したでござる。この後延喜二十一年に弘法大師といふ諡を下されたでござる。

此次に渡つたるが禪宗でござる。これはかのこの間申す所の楞伽經といふを元として、心性を悟る事を宗旨と致し、又以心傳心、教外別傳、不立文字、直指人心、見性成佛といふの義を立て、それを漢土へ傳へたるが梁の武帝が普通元年のこと一ホトナリでござる。そこで來れる僧が名におふ達磨でござ

る。處が武帝は名だゝる佛好で、夫故國を亂したる程の王では有たなれども、達磨がいふ所は武帝のこれまで心得たる趣とはたがふゆへ、氣に入らなんだでござる。これに依り達磨は魏の國へ行て、少林寺と云ふ寺の壁に向つたきり九年いて死だといふ事でござる。此宗旨は以前傳教大師が傳へてきたなれども、早く亡び失せ有たる處が、備中國吉備津宮賀陽氏かより出たる僧に榮西といふが有て、これは御國にありとある處の諸宗を學び盡し、六條天皇の仁安三年、南宋の孝宗が乾道四年に漢土へ渡り、かの天台山へも登り修行し彼是佛書を得て歸り、其後鳥羽天皇の文治二年の夏、又々漢土へ渡り、夫より天竺へ行て釋迦の古跡を尋ねんとしたなれども、佛の本國はみな佛道は亡びたるよしを聞て大に力を落し、こゝに於て虛庵の徹禪師といふに従て禪宗を學び勤むること三年、かの國の紹熙二年と云ふ年の秋すでに還らんとする時に及んで、徹禪師より達磨以來嫡々相承の傳來を盡く附屬せられて歸つたる年が、後鳥羽天皇の建久二年の事でござる。さて大にかの單傳心印、不立文字、教外別傳、直指人心、見性成佛の義をひろめ、元よりこの榮西は才辨拔群のもの故、其頃の僧どもを盡く云ひ伏せて思ふまゝにこの宗を弘めたでござる。その禪宗の輩この榮西を始祖といふも尤な事でござる。此宗が分つて臨濟、曹洞、黃蘗この下々二十四派にわかる。

この次におこつたるが念佛宗でござる。また淨土宗ともいふ、是は美作の國より出たる僧源空と云

が始めて弘めし宗旨で、是は人のよく知てある通りたゞ一心に彌陀の名號を稱へさへすれば、罪あるも罪なきもみな極樂といふ尊き國へ生れる由をすゝめて、其宗旨といたす經は阿彌陀經でござる。この源空元來は天台宗の僧でありし所が、晩年に慧心僧都の往生要集といふものを讀で、こゝに於てそれまで學だる所を捨て、この趣にかへたと申こととござる。さて此僧の念佛宗を弘たる年が後鳥羽天皇の御代より土御門天皇の御代のほどでござる。

是に次で親鸞といふ僧が出で、これは源空が一心專念彌陀名號の宗旨を本と致して、大に人情のまぬがれがたきことを察したるが、肉食妻帶の宗旨を始たでござる。そのいひぐさに或日夢の中に觀世音が見へて親鸞に告て、行者宿報設女犯我成玉女身被犯、一生之間、能莊嚴、臨終引導生極樂と諭したると披露したるものでござる。これは觀世音陀羅尼經といふ佛經に、女犯の欲と五辛といつて、にんにくの類ひ都てなまぐさき物をくつたる時などに唱る咒文が有故、それから思付てかよの偽言をいつたものと見へるでござる。一向宗と申はこれとござる。順徳院の建曆年中より此宗を弘たでござる。親鸞始は慈鎮和尚の弟子にして天台宗であつた所が、後に源空の弟子となり、善心坊綽空と名け、其後親鸞と改めたでござる。

これに次で出來たる宗旨が彼日蓮宗でござる。則日蓮といふ僧の始たる事とござる。其宗旨の趣は

天台宗の法華經を本と致して、夫に一念三千また止觀など、いふ義を取て我物となし、吉田家の神道を習合致してみだりに大言のみを放ち、あるが中にも文盲千萬なる宗旨とござる。此僧は自ら記しおける書に、日蓮は貞應元年壬午安房國長狹の郡東條郷の生れ也とも、又日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ栴陀羅の家より出たりとも記しおくに依て、此上もなき汚らはしき者の子と見ゆるでござる。此僧の云おけることどもを破つたる書は、禁斷日蓮義、挫日蓮、續挫日蓮、破邪見正記、四度宗論記などと云ものは、何れも七八分は尤なることとござる。彼宗の者共一々それに返答を致しあるけれども、たゞ大聲を上げて云たばかり見事に返答したりと見ゆるは、更にも有やせんでござる。事を明白に辨へたる人は、日蓮宗は天台宗の蟲食、一向宗は淨土宗の蟲食ひ、山伏は眞言宗の蟲食ひじやと云ふが、これは相違ないこととござる。殊にこの三つの者は神をば賤しめて、みな佛の下司の如くいひなし扱ふ不埒なる者でござる。夫も具に申たいが今日はまづおきませう。

扱かように諸宗と分る様になつたるは、先に申す通りすべて經々が一部一冊として、釋迦の眞のものはなく皆後人の思ひつきを以て、次第々々に偽り作つたるものなることを辨まへず、その諸宗の祖師どもがひたすらに釋迦の眞のものと心得てこれを信仰し、またまれにはその眞ならぬものなることを悟つたる者もある様なれども、夫は又彼負じ魂に是を守て、俗にいふくさい物へ蓋おするや

うにこれを取繕ひ、彼經どものとりくゝに有といひ、無といひ諸法實相といひ、秘密といひ彼是の經々を作る者の思々にいつたる説どもを、右諸宗を始たる祖師たちがおのが心になつたる經によつて、宗旨の本意を立てたによつて、右の如く諸宗になつたものでござる。しかれどもこゝにおかしき事の有は、かやうに諸宗にわかつて各其立たる趣意が、いかふたがふやうに見へ思はる、けれども、これは末のいさかひ枝葉の論ばかりがちがうので、其おんづまり極意の所へゆくと、諸宗が皆一つ意におちて、先夜申たる楞伽經の旨が則彼經文に、即一切法、唯一真心、一念不生、即是佛と云によつて立たる禪宗の旨たる、先いはゆる以心傳心、不立文字、直指人心、見性成佛といふ見性治心と云が説にしめらるゝでござる。夫は諸宗を一々申すもいらぬこと故、其うち世に多く有て、其宗の旨を人のよく知てをる、真言天台淨土此三つの宗旨でいわうならば、まづ真言秘密の宗旨の極意は、先夜も申す通りかのいわゆる光明真言で、をんあぼきやべいろしやなふまかほたらまにはんどまじんばらばらばらやうんと云陀羅尼を唱へて、一切智を得ると云が極意でござる。是は天竺の辭のまゝで翻譯せず、かの宗旨では此真言のわけをとかず秘密にして決して其わけを傳へぬ故、かの宗を真言秘密の宗といひ、又密宗とも云でござる。但し彼宗の法師どもは決して人に傳へず秘してはらずとも、此方も眼が有ゆへ天竺の詞じやと云て、そうわからぬわけでもないから、

彼宗の者へ對しては氣の毒ながら其わけをあらゝ申す。まづをんと云は歸命といふの義、あぼきやといふは不空といふのこゝろ、べいろしやなうと云はびるしやなといふと同じ事で、翻譯すれば光明遍照といふ事、又大日といふ義にもなります。又まかほたらといふは決定といふのこゝろ、まといふは如意といふの義、はんどまといふは蓮華といふこゝろ、じんばらといふは光明といふの義、はらばりたやといふはうつると訓で轉の字の意、うんといふは菩提心といふの義で、まづかやうに一々の天竺詞へ字をあてゝおいて、偕これを漢文に作りみると、歸命光明遍照大日決定不空、如意蓮華光明轉菩提心と云ことになるでござる。かよふに致す事を翻譯と云でござる。此心は何のこともなく大日佛を一心に信仰すれば、其驗決定して空からず、思ふがまゝに一切事の成就して、蓮の華うてなに座して、光明を發して菩提心に轉ずると云のこゝろでござる。轉菩提心とは則佛を成して即成佛するといふのこととござる。さて真言僧のいふ事に、此光明真言をつゝむればあうの二字につゝまる。其あうの二字があの一文字につゝまるといひますが、是も大造秘することながら、たゞかよふばかり云ては、其つゝまると云わけはどうした事かしれぬやうなれども、是はずべて音といふものはあが始りて、其あといふ聲は、咽の真中から外へさわらずまん丸になつて出る音で、口を大きく開かねば出ぬ聲ゆへに、これを開音といふでござる。さてその咽より出る音を口お

すぼめ合せていふ時はうとなる、夫故このうといふ音を合音といふ。なぜならば唇を合さねばいへぬ音じやによつてのことのござる。さてもの云にはこの口を開くと合せるとで出来るもの故、右の光明陀羅尼をとへるにも、口を開き口を合せていひ、言おなすによつてそれをつむれば、口をひらひたあの音と口をすぼめたあの音とが本じやによつて、此あうの二字につまるといつたもののござる。又其あうの二音があの一字につまると云故は、都て諸の音は盡くあが始で、其あが始じやと申故は、音は咽より出るもの故、其咽より出る始はあの聲ならでは出ず。これは各々呼試ても知がよひでござる。さて其咽より出るあの聲が、唇、舌、齒、顎、牙とかように口の内こ、かしてへ觸て諸の聲がこゝで出来る。其一つ二つを申さうならば、まみむめも是を唇の音という。なぜなれば唇でいふからの事でござる。らりるれろ是を舌音といふ。なぜなれば舌でいふからの事でござる。まづかやうのわけじやが、其本の出所といへば咽から出るあの音が本じやによつて、何の音でも本はみな其あの字に歸するわけでござる。夫故このあといふ音を母音といふ。それは此あの音から諸の音が出来る所が、ちやうど母の子を生むやうじやによつて申たものでござる。眞言僧の申たあうんがあの一文字につまるといふもこのわけでござる。しかれば光明眞言に限つて、かやうつゝまるやうに申すのはあるかなことでござる。なぜなればもろくの音と云ものは右申す通りのわけ

故、何の詞でも本の母たるあの音へ歸するは同じことでござる。それをこの眞言にかぎつた事のやうにいつて人をおどすが、眞言僧それにおどされて眞にさうかと思ふのは、音いんのわけをしらぬからの事でござる。この方はその手じやいかんでござる。

扱此眞言を唱へあの字を觀じて、坐禪するのを眞言宗の阿字觀といふ。さやうに阿字觀坐禪するのは何の爲じやといふに、彼毘盧舍那佛則ち大日を感じせんが爲でござる。然らば其大日と云者はどこに居てどふしたもののじやといふに、則坐禪を致し眼耳鼻舌心意の六根を清淨にして、自思を悟り發明しみがき出したる其自の心を毘盧舍那佛と云でござる。其毘盧舍那といふ言は右申通り、光明遍照とくと云事になる。又大日ともいふ義となるわけは、光明が遍く照す所が、ちやうど日輪の世間を普く照すやうなもの故、大日という意にもなるでござる。但し光明が普く照すといへばとて、悟ればその骸がさやうに光といふわけではなひ。自心を悟て大智を得るによつて、何ごとにもあまねく行わたりて明になるといふの徳おほめて申たもので、その徳に至つた所を菩提心を得たるとも、佛に成たともいふでござる。すなはち大日經に菩提謂知三自心といひ、金剛頂經には一切衆生本有菩薩性、爲貪瞋癡煩惱所縛。故輪三廻六趣といひ、なほこの外にもかやうのたぐひの語が多く見へて、かつ金壺集といふものなどにも、それ佛法遙にあらず、心中にして即近し、淨土外になし、身をすて、

何をかもとめんといひ、またこの眞言をとなへる清淨心が即佛即淨土なり、かならず外に求むべからず。唯心の彌陀、己身の淨土といふは豈これにあらずやとあるが、これ坐禪と同じことなり。これはその宗旨の僧の書たものゆへ、別して篤胤が申すこととござる。さてこゝに禪宗の本意たる直指人心、貝性成佛と云ふ意の諸の經々に見えたる文を、一つ二つ言はゞ、

華嚴經云、遍詣十方求成佛、不知身心久成佛。

般若經云、知我心者、即身成佛、又云、於内外法心莫散亂。

遺教經云、縱此心者、喪人善事、制之一處、無事不辨。

法華經云、唯佛與佛乃能究盡諸法實相。

阿彌陀經三の卷の二の云、實相者、即念自性天真之佛。

阿彌陀經三十七丁表に云、執持名號一心不亂。同疏云、是爲一經要旨云々。

此一心即達磨直指之禪といふ。その抄には、一心者專任正境也。禪不亂不生忘念也。

大日經云、云何菩提謂如實知自心。

これらみな直指人心、見性成佛のこゝろなり。

さて禪宗にみなしめらるゝことはまづどうしたわけじやといふに、天竺にはかの佛法より外道と、

さしたる婆羅門の輩が唱ひ來たる道があつて、其道の趣意が元來治心の教でござる。所へ釋迦が出で其いひぐさこそ大造なれども、こりやみな先の婆羅門をもしつけよふが爲にいつたこととござる。そりやいはゆる方便、おのれが修して人にも勸める所は、やつぱり治心の修行でござる。なぜといふにまづほとけといふは、佛の字の和訓のやうに人は思つてゐるけれども、佛といひ又ふといふと同じ事で、それへけの字をそへて云ばかり、やつぱり天竺の語で正しくは佛陀といふべきこととござる。夫を翻譯すれば悟といふ覺の字の心となる。さすれば天竺の佛またふと又ほとけといふ語は悟つた人といふ事でござる。夫は翻譯名義集というものに、佛陀こゝには智者とも覺者とも云とあるでござる。其悟た人と成にはどう修行するといふに、心みがき上げねばならぬ。其みがき方はといへば心を治て見性するのが修行で、見性といへば何かむづかしさうに聞ゆるけれども、何の事もなく性を見つけると云ことでござる。其性の字は中庸に天の命是を性と云ふとあり、性の字で御國の訓おつける時は生れつきと云語でござる。其生れつきが則ち皇産靈神様が人の骸の出來ると一つに賦りつけさしたもので、削るにもけづられず、洗つてもをちぬと云人の眞のこゝろでござる。夫を死んだとて佛と思ては大きにちがいますから、惑はぬやうになされませ。夫故漢土人が此字作るにも心と云字をへんにして、生れるといふ字をつくりにつけたものでござる。そんなら其生

れついたる誠のこゝろと云物はどんなものじやといふに、親を敬ひ妻子をめぐみ、富貴を願ひ惡きをいやがり善きを好むのが則ち性で、人の眞の心是に反してあるならばそりや變と云もので、常にたがつていては人の道とはいはれません。偕かやうにまづ性の字の字義を穿鑿しつめ、又佛と云天竺語がさとりといふ覺の字の義じやと云ことを知て、そこで見性成佛と云語を解して見ると、なんと削つてもけづれぬが性で人間の眞の心じやといふ者を見つけて、そこであきらめたが、悟つた人で、則佛じやと云の心でござる。またそこをさやうに見とるのは小刀細工の理屈をいつた書ではしれず、直に人の心を的にして考へねば知れず、得られぬ事故、こゝに則ち不立文字、直指人心といふ語の處でござる。此不立文字の事も諸宗で彼是申すけれども、これは達磨もしつかりと諸經の意を得たる上で申した事で、それを一つ二つ申さば、法華經に、諸法寂滅相、不可^カ以^テ言^フ宣^フといひ、大般若經には、第一義無^レ有^ニ文字^一といつた事も有。かやうの文が又々有ますから、どうも達磨の語は、諸宗からは破られぬ譯でござる。さて禪家の立言したる不立文字、直指人心、見性成佛と云の義をといてみると、かくの如く面白く眞の道を修行する意味合にもかなつてゐるが、その立言のもしろいばかりで、既にかやうの言を立そめたる達磨を始、又元祖と仰ぐ釋迦法師其外の名僧智識とよばれた程の僧ども、只一人と致し其行ひは此とありではない。なぜと云に見性成佛したと云な

らば、先僧に成たが相すまず、妻子をもたず親を捨てたが相すまず、きたないものもひろふて着たり、乞食をするのが氣に入ぬ。其わけは彼奴らがいふ直指人心の語の通り、直に人の事お的にして考へ尋てもさとののが是が眞の悟といふもの、これ佛語でいふならば直指人心、見性成佛でござる。もしこれに反してゐる事は、そりやさとりでも何でもない。然るを世の禪學者道學者などいふ者が、其生つきの心則いはゆる性に親妻子おいみきらつて、きれひな物より穢たものといふやうなねじけ心が元から有ふか。こりや十人が十人ながらありやすまい。人になければ釋迦もだるまもそんな心はないはづじやが、なんと其生もつかず尋た所がないもせぬねぢけごとを、無理にやつて見性じやといはれうか、成佛だといはれうか、いや中々もつてさうは言さぬ。釋迦や達磨は見性もせねばさとりもせぬ、其見性した悟だと思つていたのは、其生もつかぬねぢけごとをかながへて、夫をば無理にしひてやつていたのち、見性じや成佛じやと心得たものでござる。こりや眞の見性まことのさとりと云ふものではなく、不見性不成佛と云ものじや。そんなら其眞のさとりと云ふものはどふしたものだじやと云に、彼石の上にすはつたり壁に向つてにらんでいたりや何かおして、六年九年苦まずと今聞て今わかり、今やつて今出來る一向無造作なものはこのさとりでござる。夫は何の事もなく人間の生れつき、則ち謂ゆるそれが性で夫に反してゐるものとを分別仕わけて、親をした

ひ妻子をいつくしみ、かの七情とかいふ生れつきの真心も、其程々に動くのがこりや人間のあたりまへと云ことおみつけるのが即ち見性、又其親を敬ふ心をもつて君につかへ、妻子をめぐむ心お他へをよぼし人と交はり奴僕を憐み、かの七情といふまごゝろをよこさの道へ踏さぬやうにしやんと明らめ、おぼへるのがこれ即ち眞のさとりと云ふ。是が眞の道といふものでござる。釋迦や達磨がやつた所はこれとは反してあるから、悟りでもなければ道でもない。みな彼奴らがつとめて是れをやり、それをさとりと云ひ觸らして、後の世までを惑はしたものだ。もし又きやつらが實以て其底の心から情慾を離れ、親妻子を何とも思はず、きたない物や貧窮がすぎで有たと云ならば、そりや眞の道、眞のこゝろとそむいてあるから則ち變と云もので、常をもつては語られせん。いはゞ人にして人にあらず、彼奴がいはゆる人非人じやといへば、彼奴をひいきの輩の云こともよくしれている。佛は出世間出三界といつて、こゝろも體も此世の天地の外へ出してある故、とんと別のものじや。夫故此世の神の例や、此世の凡人の上を以て云べきことではないぞといふが、夫では彌々佛と云者は此世の人間でそれにちがひのない。夫を此世の人間へ弘るは何のたわ事じや。出三界の出世のと大きなことを言たればとて、此天地の間に生れ來ては此天地の神の支配はぬけられず、それ故此世の人のこゝろもなくならぬ。夫をなくなつた顔に化ているのが佛法じや。そりや是を始た釋迦

さへさうだ、愛憎と云て愛したりにくんだりするこゝろお止めよといつたけれども、己が道の外なるをにくみやしめ、妻も三人子も三人もつたが、是が愛憎でなくて何じや。愛憎が人情の元だから、外もとんと今の人間と少しも替た事はなく、年たけたればしわがよつたり、死時いくぢがなくなり體が痛の、水が呑たいの、哀れなさまにいつたわさ。鈴屋の翁の歌に、「事しあればうれし悲しと時々動く心ぞ人の真心」また「うごく社人の真心動かずといひてほこらふひとは石木か」とよまれたるおよく思ふがよいでござる。然に今の世にも禪學者じやの道學者じやのと云輩が、かやうのわけおぼしりも致さず胸のわるくなることばかりやつている。是は年頃日ごろうるさく思つておつたこと故、今日はよき序だから申すするが、此輩佛の眞似して心法悟道と云ことを旨と致し、如意又拂子など云をのが居間などにかざり、或はしやにかまへなどしてわかりもせん佛經などをよみ、悟道に入て天地の氣と一つになつたとか云て、うれしく悲しひ事が有ても夫おさうとも思はぬ顔に見せ、とかく世の人を衆生凡夫と見おろして、何ごとも命もさつぱり惜くないやうな顔をしているが、これらはうそな證據には煩ふとやつぱり醫者にかゝり、また中には悟さへすれば藥をのまんでも病がなほるなど、云ている者も有が、これらはひそかに藥をのむと見へるでござる。又元より悟つたつらで、實はいつかど暮して居ながら、乞食のまねおして物もらつてあるいたりして、とかく

世の人を衆生凡夫とみおろして、何事も心法悟道に言紛らして放屁のやうな理屈をつけ、夫でも少し風雅の情ありげにもてなして、腰折歌や發句ぐらい、又は悟道まじくらの大口漢文などを書散じ、月華をめでたる歌文にも例の心法悟道の意を交へ、悟がましく人にもほこり物に執着せぬと云がきつい自慢で、たとへば月花をみてもながしめに見て、よい花じゃよい月じゃぐらいに云ておくでござる。華の麗に目がつくならば、夫より女の色香をばなほ見さうなものじゃが、夫は一向に見ぬ顔をしているでござる。又中にはうまいもの旨しといはず、それは底からそうかと思へば是は拙者が子供の時に、人とたはむれに川柳の口まねを申た事でござる。それは「悟道者もから瓜よりは鰻くひ」なせなれば、心法悟道に入れば愛情もなくなると云事だからさうは有そもないものじゃが、うであげた冬瓜よりは鰻の方おたんとうでござる。さすれば旨いかうまくないかかわかると見へるでござる。又此輩の死ぬ時などがをかしいでござる。大かたは日頃のおぼけをこゝでは是非あらはすが、中には死ぬまで化している者もあり、又此輩死時に辭世とか云て、悟りくさい事を發句か何かでは是非云ねば成んときめた心の内がおかしいでござる。それは人に知さずかねて作て置き、今わのきはに今作つた顔で人に見せ、夫ゆへその悟道先生がまゝ頓死などをしても跡にて何かお片づけると、料紙の箱か紙入に夫があるから、とんと辭世にさしつかへはない。さて死んで後は同腹中のお

ばけがあひよりて、わる口にいへば嘔吐を發するやうなこともを傳に作り彫つける。まづ禪學者道學者など云者はこのくらいなものでござる。然れども何かちよこさいにしゃべるもの故、とかく彼等が云事をば人は眞のことかと思つて信ずるものじゃが、どうぞ彼奴らがいふ事をばたへて取上ぬやうに致したいものでござる。實の所は彼等の學問と云ものは、博く書物をよんで眞のことをしる程の働もなく、しかれども少しは生ちよこさいがある故に、ちつとばかり見かぢり聞はつりて、そこで右の通りの變なまねして、悟りくさいことでもいつていと、俗人は驚くからする事でござる。それ故此輩はまことの學問でもしたる人にきめられるときの云遁れに、禪學ではゆる不立文字と云ふ言と、孟子がいつた如く書を信ぜば書なきにしかずといふ言などをばよく記臆して、何ぞと云とこれを云ひ出してにげるものでござる。さて佛法の趣、釋迦の教と云ふものは、此通り人の眞の情に戻つてゐること故、其弟子なりし奴どもですら彼の阿難を始め女犯などをやつた者が大分ある。人情に背いてゐる證據には此間申したる通り、釋迦の死だときくと直に其弟子どもがこれからはこの方を呵制する人がなくて、氣らくじやと云て悦びあふた程のこと、夫故今の坊主どもなどは女犯をやらぬ者はとんとあるまい。こりや顔にしるしのなき事故しれぬが、位高き法師のかほよき小姓をおきて男色をさるゝお見ても、其以下の坊主どもはこそく女犯おやることがよく知れる

でござる。今世では僧も男色をば構わぬやうになつてあるけれども、色にそみ煩惱のおこる心は同じ事だ。釋迦が男色はくるしうないと云つた事は何の經にも見へはせぬ。今をさる事十二三年前に江戸の遊所で坊主おたんとおとりなされて、ほうづきをからげたやうに日本橋へさらされた事があつたが、其時は拙者もいまだ御國學などおさしも委くは知ぬ時で、扱々にくき坊主どもかななどと云つゝ見たるが、その後一人の士がいまだ我が古への道も地におちぬ、有がたき事じやと云ひましたが、其時は何の心もなくさいていたが今思あたるでござる。さてこそ親鸞などはこゝおさとりて、肉食妻帯の宗旨を工夫したる事と見へるでござる。何はともあれ人の誠の道をたどりたいと思ふ人は、佛法に迷はぬ様に致したいものでござる。守屋大連の語に、何背^{ソナ}國神^ニ敬^ム他神^ニ也、云れたる事、又鈴やの翁の、「いつくべき神等おきて外國のけしき神おらいつく諸人」と、詠れたる事を忘れぬやうに致したひものでござる。然れどもこゝに心得べきことは、今かやうに天の下にひろがつて、彼切支丹のさばき以來此坊主共に宗旨も改させ、變死を御吟味なさらんが爲で、今は上よりの御定となつておること故、如何程いやに思へばとてこりやどふもならぬ事。又先祖の墓を守らせおくこと故其心しらひをして、其分相應に坊主をもあつかふべき事只々右に申たる事どもは、人の惑ひをとくばかり迷はぬやうに申すまでのこととござる。鈴の屋の翁の常にははれますには、學問す

るは道を明めるので、努々^{つと}これは道ならぬ事など云て、上よりの御定をもとくといふすぢではないと、あれやこれやの書に記しおかれ、歌にも、「かもかくも時の御令^{みづかひ}にそむかぬぞ神の眞^{まこと}のみちにはありける」「時々のみのも神のときく」の御命^{みこと}にしあればいかでたがはん」又「いまの世は今の御のりをかしくみて異^けき行ひ行ふなゆめなど、もよんでおかれたでござる。

出定笑語附錄

平田篤胤

世に何の道、くれの道とて、言はず道々の多かる中に、佛の道てふ道は、普く世に弘ごりては有れど、甚もく怯く怪き道なる事は、吾が師伊吹舎大人の出定笑語ちふ書を著して、委く説諭されたるが如し。かくて此書はしも其笑語に泄たる事をら、時によりをりに臨みて、何くれと講諭されたる、其書とめ等の數あるを拾ひ集め、殊に親鸞日蓮の二派は、同く佛法と稱へる中にも、宗外と爲たる程の邪宗なる事をし、詳に辨へ給へるを合せて、かく三卷となし、即て笑語の附録とはなしたるなり。其講説の珍たき事は、讀見て後に覺るべし。故いさ、か此由を記して、見む人の便としつ。かく云者は、下總人野口音春、平山光長らなり。時は文化十四年と云年の正月もちの日。